

松原城跡発掘調査報告書

2021
神戸市

序

松原城跡は、神戸市北区に所在する中世の城郭です。地元の道場町では「蒲公英城」の名で知られ、多くの言い伝えを残しています。

今回、宅地造成事業に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査の成果について報告書を刊行することになりました。

この調査では、城郭の曲輪、堀切や礎石建物などの施設と共に、土師器や陶磁器など、城郭での活動をうかがえる遺物が発見されました。この地域の歴史を知るうえで、また戦国時代末期の情勢を考える際の貴重な成果が得られました。

刊行にあたり、本書がこの地域の文化財保護と歴史をひも解く資料として、広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および本報告書刊行にあたりまして、ご協力いただきました事業主の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関に、心から感謝の意を表します。

令和3年3月

神 戸 市

例　　言

1. 本書は、平成 30 年度および令和元年度に神戸市北区道場町日下部字西山で実施した松原城跡埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、宅地造成事業に伴うもので、てんま産業株式会社から委託を受け、神戸市教育委員会文化財課（当時、現文化スポーツ局文化財課）が実施した。現地における調査は、文化財課 佐伯二郎、織田文佳、小野寺洋介、田島靖大、萱原朋奈が担当した。
3. 調査現場での遺構の実測・遺構写真は調査担当者が行い、航空撮影および測量は東海アーナス株式会社が実施した。
4. 出土品整理作業は、令和 2 年度に神戸市埋蔵文化財センターにおいて実施し、文化財課 佐伯、山田侑生、小野寺、田島、萱原が担当した。
5. 遺物の写真撮影は、西大寺フォトの杉本和樹氏に委託して実施した。
6. 本書は、佐伯、山田、小野寺、田島、萱原が執筆し、編集は佐伯、小野寺、萱原が行った。
7. 本書に用いた座標は平面直角座標系第 V 系（世界測地系）、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で表示している。
8. 調査位置図は、国土地理院発行の 25,000 分の 1 「三田」、および神戸市発行 2,500 分の 1 地形図「塩田」、「宅原」を使用した。
9. 本書で用いる土色は、小山正忠・竹原秀雄編の『新版 標準土色帖』（15 版、1995 年刊行）に準じる。
10. 発掘調査および資料整理期間中は以下の方々からご指導・ご助言・ご協力を賜った。深く感謝申し上げます。

岡寺 良	北垣聰一郎	黒田慶一	河野克人	先山 徹	下高大輔	杉原賢治
千田嘉博	高田 徹	中井 均	永恵裕和	乗岡 実	白谷朋世	早川 圭
宮田逸民	森岡秀人	山上雅弘	山崎敏昭	米田克彦	（五十音順、敬称略）	
11. 調査にあたっては、道場町連合自治会より多大なご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
12. 発掘調査で出土した遺物ならびに図面・写真等の記録類は、神戸市埋蔵文化財センターで保管している。

凡例

本書で示す方位は、座標北を指す。

遺構名は、遺構記号の後に曲輪番号を 2 桁、個別の番号を 3 桁で SK01001 のように表示した。

遺物は本書掲載順に通し番号を付けている。ただし、石製品、金属器については、それぞれの番号の頭に S および M をつけて土器と区別している。また、遺物の番号は、本文・挿図・図版とともに統一している。

土器の実測図は、断面を以下のように区別することによって種別を表現している。

土師器：白抜き ／ 須恵器・陶器：黒塗り ／ 磁器：濃い網掛け ／ 瓦質土器：淡い網掛け

目 次

序		第11節 その他の曲輪	43
例言		(1) 曲輪12・13	43
目次		(2) 曲輪15	43
第1章 はじめに	1	(3) 曲輪16	43
第1節 調査に至る経緯	1	第12節 堀切・閉塞土塁	43
第2節 発掘調査・整理調査の経過	2	(1) 堀切	43
第3節 調査組織	4	(2) 閉塞土塁	46
第2章 地理的環境と歴史的環境	5	第4章 遺物	47
第1節 地理的環境	5	第1節 概要	47
第2節 歴史的環境	5	(1) 士師器	47
第3章 発掘調査の成果	10	(2) 瓢箪器	48
第1節 調査の概要	10	(3) 瓦質土器	48
第2節 曲輪1	10	(4) 陶器	48
(1) 概要	10	(5) 輸入磁器	49
(2) 基本層序	11	(6) その他の遺物	50
(3) 平坦面	11	第2節 曲輪1出土遺物	50
(4) 第1造構面	11	(1) 造構・東登城道・土塁	50
(5) 土壘	14	(2) 造構外	52
(6) 登城道	17	第3節 曲輪2出土遺物	56
第3節 曲輪2	20	(1) 造構	56
(1) 概要	20	(2) 第1造構面	56
(2) 基本層序	20	(3) 第2造構面	57
(3) 第1造構面	20	(4) 斜面	60
(4) 上層土塁	22	(5) 上層土塁	61
(5) 第2造構面	24	(6) 下層土塁	62
(6) 第3造構面	27	第4節 その他の曲輪出土遺物	64
(7) 下層土塁	29	(1) 曲輪3	64
(8) 第4造構面	29	(2) 曲輪4	64
第4節 曲輪3	35	(3) 曲輪5	66
(1) 概要	35	(4) 曲輪7	66
(2) 基本層序	35	(5) 曲輪14	66
(3) 平坦面	35	第5節 堀切出土遺物	67
第5節 曲輪4	35	第6節 その他の出土遺物	68
(1) 概要	35	(1) 石製品	68
(2) 基本層序	35	(2) 金属製品	69
(3) 平坦面	35	第7節 古墳時代の造構・遺物	74
第6節 曲輪5	39	第5章 終め	85
(1) 概要	39	第1節 造構の検討	85
(2) 基本層序	39	(1) 調査成果の概要	85
(3) 平坦面	39	(2) 築城造成過程	85
第7節 曲輪6	39	(3) 土塁構築	86
(1) 概要	39	(4) 下層土塁沿いの溝 (SD02301)	87
(2) 基本層序	39	(5) 建物・施設	88
(3) 平坦面	39	(6) 閉塞土塁	88
第8節 曲輪7・8・9	40	第2節 遺物の検討	89
(1) 曲輪7	40	(1) 調査成果の概要	89
(2) 曲輪8	40	(2) 分布状況	89
(3) 曲輪9	41	(3) 遺物の組成	91
第9節 曲輪10・11	41	(4) 丹波焼播磨	92
(1) 曲輪10	41	第3節 松原城跡の総合的検討	93
(2) 曲輪11	42	(1) 古墳時代	93
第10節 曲輪14	42	(2) 平安～鎌倉時代	93
(1) 概要	42	(3) 戦国時代	93
(2) 基本層序	42		
(3) 平坦面	42		
(4) 横幅	42		

挿図・写真図版目次

図版

図1 松原城跡位置図	1	図39 曲輪6 平面図	40
図2 調査範囲図	2	図40 曲輪7・9 平面図	41
図3 現地説明会の様子【写真】	3	図41 曲輪14 平面図	42
図4 現地作業状況【写真】	3	図42 墓切北東側断面図	44
図5 松原城跡と周辺の道路	8	図43 墓切断面図	45
図6 松原城跡調査前測量図	9	図44 墓切南西側断面図	46
図7 松原城跡 曲輪等配置図	10	図45 土器器皿分類図	47
図8 曲輪1 第1造構面平面図	12	図46 丹波焼擂鉢分類図	48
図9 曲輪1 平坦面断面図	13	図47 曲輪1 遺構・東登城道・土壘出土遺物	51
図10 SK01005平・断面図	14	図48 曲輪1 遺構外出土遺物（1）	54
図11 SX01001平・断面図	14	図49 曲輪1 遺構外出土遺物（2）	55
図12 SX01002平・断面図	14	図50 曲輪2 遺構出土遺物	57
図13 SX01006平・断面図	14	図51 曲輪2 第1造構面出土遺物	58
図14 曲輪1 北西土壘断面図	15	図52 曲輪2 第2造構面出土遺物	59
図15 曲輪1 南西土壘（北部）断面図	16	図53 曲輪2 斜面出土遺物	60
図16 曲輪1 南西土壘（南部）断面図	16	図54 曲輪2 上層土壘出土遺物	61
図17 曲輪1 西登城道断面図	18	図55 曲輪2 下層土壘出土遺物（1）	63
図18 曲輪1 東登城道断面図	19	図56 曲輪2 下層土壘出土遺物（2）	64
図19 曲輪2 第1造構面石敷造構平面図	20	図57 曲輪3・4・6・7 出土遺物	65
図20 曲輪2 第1造構面平面図	21	図58 曲輪14 出土遺物	66
図21 SK02102平・断面図	22	図59 墓切出土遺物	67
図22 SX02101平・断面図	23	図60 石製品	68
図23 曲輪2 第2造構面下層石敷造構平面図	24	図61 金属製品（金具類①）	70
図24 曲輪2 第2造構面平面図	25	図62 金属製品（金具類②）	71
図25 曲輪2 平坦面土層断面図	26	図63 金属製品（繩）	71
図26 SX02204平・断面図	27	図64 金属製品（容器類）	71
図27 曲輪2 磚石建物平・断面図	28	図65 金属製品（刃物・工具類）	72
図28 曲輪2 南西土壘断面図	30	図66 金属製品（その他）	73
図29 曲輪2 北東土壘断面図	30	図67 金属製品（銅製品）	73
図30 曲輪2 北西土壘断面図	31	図68 ST02001平・断面図	74
図31 曲輪2 北東土壘縦断図	32	図69 ST02001須恵器出土状況図	74
図32 曲輪2 北西下層土壘（南半）石積立面図	33	図70 須恵器（1）	75
図33 曲輪2 北西部第4造構面後出石列立面図	33	図71 須恵器（2）	76
図34 曲輪2 北西侧斜面断面図	34	図72 土壘断面模式図	86
図35 曲輪1 南東側斜面断面図・曲輪3 平坦面断面図	36	図73 SD02301の位置と断面図	87
図36 曲輪4 平面図	37	図74 松原城跡出土土器器皿計測図	91
図37 曲輪2北東側斜面～曲輪4平坦面断面図	38	図75 手印（黒印）一覧	92
図38 曲輪5 平面図	39		

表

表1 出土遺物観察表（土器）	77	表5 出土遺物観察表（鉄砲玉）	83
表2 出土遺物観察表（石製品）	82	表6 出土遺物観察表（その他金属製品）	83
表3 出土遺物観察表（金具類）	82	表7 出土遺物観察表（錢貨）	84
表4 出土遺物観察表（繩）	83	表8 松原城跡器種組成表	89

カラー写真図版

カラー写真図版1

1. 調査地全景（北東上空から）
2. 曲輪2および曲輪4（北東上空から）

カラー写真図版2

1. 調査地遠景（南上空から）
2. 調査地全景（北西上空から）

写真図版

写真図版1

調査地全景（南東上空から）

写真図版2

1. 調査前全景（南から）
2. 調査前全景（西から）

写真図版3

1. 曲輪1 全景（南から）
2. 曲輪1 全景（南から）

写真図版9

1. 曲輪2 第2遺構面全景（西から）
2. 曲輪2 下層石敷遺構検出状況（南から）
3. 曲輪2 第2遺構面 下層石敷遺構（南東から）

写真図版10

1. 曲輪2 第2遺構面 碇石建物および下層石敷遺構（南東から）
2. 曲輪2 第2遺構面 SX02204（南東から）
3. 曲輪2 北東土壘（東側）断ち割り（西から）

写真図版4

1. 曲輪1 第1遺構面 石敷遺構および南西土壘（北から）
2. 曲輪1 第1遺構面 SX01001（南西から）
3. 曲輪1 北西土壘断ち割り（南東から）

写真図版11

1. 曲輪2 北東土壘（西側）断ち割り（西から）
2. 曲輪2 北西土壘断ち割り（南から）
3. 曲輪2 南西土壘断ち割り（西から）

写真図版5

1. 曲輪2 第1遺構面全景（東から）
2. 曲輪2 第1遺構面全景（西から）

写真図版12

1. 曲輪2 北東土壘（東側）縦断面および焼土面検出状況（南西から）
2. 曲輪2 北東土壘（西側）縦断面および炭面検出状況（南から）
3. 曲輪2 北西土壘縦断面（南から）

写真図版6

1. 曲輪2 第1遺構面 上層石敷遺構（北から）
2. 曲輪2 第1遺構面 SX02101（南西から）
3. 曲輪2 第1遺構面 虎口（東から）

写真図版13

1. 曲輪2 北西下層土壘石積（南から）
2. 曲輪2 南西下層土壘（東から）

写真図版7

1. 曲輪2 北西土壘上面縁群（北東から）
2. 曲輪2 第2遺構面全景（南上空から）

写真図版14

1. 曲輪2 北西下層土壘断ち割りおよび石列（東から）
2. 曲輪2 北東下層土壘断ち割りおよびSD02301の北東部（西から）

写真図版8

1. 曲輪2 第2遺構面全景（東から）
2. 曲輪2 第2遺構面全景（南から）

写真図版15

1. 曲輪2 SD02301の北西部（南から）
2. 曲輪2 北西土壘断ち割り（南西から）
3. 曲輪2 北西斜面断ち割り（西から）

写真図版 16	写真図版 29
1. 曲輪2 南西斜面断ら割り (南東から)	曲輪4 出土遺物
2. 曲輪2 南西斜面断ら割り (北西から)	曲輪14 出土遺物 (1)
写真図版 17	写真図版 30
1. 曲輪2 南西斜面断ら割り (南西から)	曲輪14 出土遺物 (2)
2. 曲輪3 全景 (北西から)	石製品・石造物
写真図版 18	写真図版 31
1. 曲輪4 全景 (東から)	古墳時代遺物
2. 曲輪4 全景 (北西から)	
写真図版 19	写真図版 32
1. 曲輪5 全景 (南東から)	鉄釘・金具類
2. 曲輪6 全景 (西から)	
3. 曲輪7 全景 (南西から)	
写真図版 20	写真図版 34
1. 曲輪14 全景 (西から)	鉄鎌・鉄砲玉
2. 堀切 全景 (南西上空から)	短刀
	鉄鉈
写真図版 21	写真図版 35
1. 堀切 全景 (南西から)	鉄鎌・鉄砲玉 (レントゲン写真)
2. 堀切 南西側断面 (南西から)	短刀 (レントゲン写真)
	鉄鉈 (レントゲン写真)
写真図版 22	写真図版 36
1. 堀切および閉塞土塁 (北東から)	刃物・工具類
2. 閉塞土塁断ら割り (北西から)	鉄製容器片
	銅製品
写真図版 23	
曲輪1 出土遺物 (1)	
写真図版 24	写真図版 37
曲輪1 出土遺物 (2)	刃物・工具類 (レントゲン写真)
	鉄製容器片 (レントゲン写真)
写真図版 25	銅製品 (レントゲン写真)
曲輪1 出土遺物 (3)	
曲輪2 出土遺物 (1)	
写真図版 26	写真図版 38
曲輪2 出土遺物 (2)	その他金属製品
	錢貨
写真図版 27	写真図版 39
曲輪2 出土遺物 (3)	その他金属製品 (レントゲン写真)
	錢貨 (レントゲン写真)
写真図版 28	
曲輪2 出土遺物 (4)	

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

神戸市北区道場町下部に所在する松原城跡は、「蒲公英城」「蒲公城」「道場川原城」「佐々城」「草下部城」などとも呼ばれ、城跡は有野川と有馬川が合流する地点の西側にある比高差約25mの独立丘陵（東西約160m、南北約100m）上に立地する。

城跡のすぐ東側には大阪方面から日本海側に抜ける主要街道である丹波街道が通り、北側には播磨方面へ向かう街道の分岐点があるなど、この辺りは交通の要衝であった。

この城は、南北朝時代（14世紀後半）に赤松氏により築かれ、その後松原氏が主君赤松氏の旧領・蒲公英城を賜り、以後戦国時代の終わり（16世紀末）まで存在していたとの伝承がある。

近年は住宅地として利用され一部の改変はあるものの、二つの大きな曲輪や土壘、堀切が明瞭に残る城跡として知られていた。

松原城跡は城山と称されていたが、三田の市街地にも近く神鉄道場駅に近接する位置にあるため、以前から大規模な宅地開発の計画があった。そのため、これまでに古記録に記されたような城であるか否かを確認するための試掘調査が行われている。

第1回目の試掘調査は、平成4年2月10日から2月29日まで最高所の平坦面にトレーナーを設定して実施された。平坦面では表土・近世耕土下に濁黄褐色粘質土、その下は黄褐色粘質土の地山を検出している。濁黄褐色粘質土上面で溝6条や、耕作に伴うと考えられる集石を検出した。

また、土壘に設定した1トレーナーでは、土壘構築前と構築時のそれぞれの表土を確認している。5トレーナーでは土壘構築による粘土の互層が確認されている。遺物は丹波焼鉢をはじめとする陶

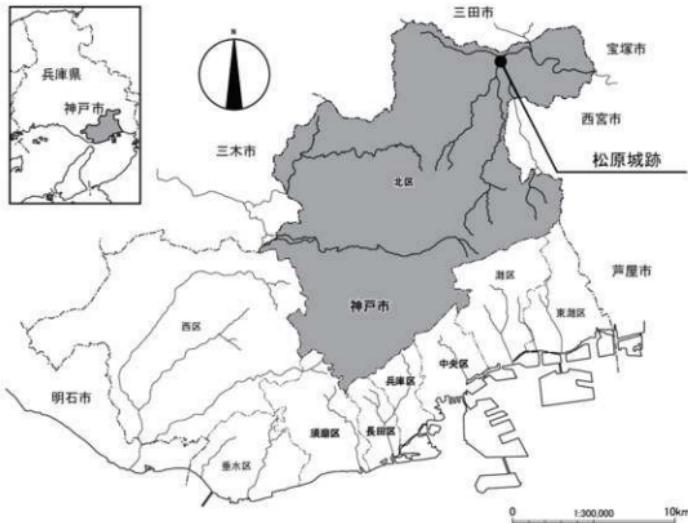


図1 松原城跡位置図

器、天目茶碗、青花、白磁、青磁などのほか、雁股鐵と尖根鐵が出土した。

この結果、土壘は部分的に削平を受けているものの構築過程をよく留めており、出土遺物も15～16世紀を示すものであることが判明した。

その後、平成29年8月18日から31日に実施された第2回目の試掘調査は、遺構の遺存範囲確認のため、主として丘陵斜面部分に対して行われた。その結果、住宅が存在した丘陵南側は削平が著しく埋蔵文化財は確認されなかつたが、他の箇所では平坦部の整地層と土壘状遺構が確認されている。

これらの試掘調査の結果をもとに、調査範囲を確定し、平成31年3月から丘陵全体を対象として発掘調査を実施した。

第2節 発掘調査・整理作業の経過

草木の伐採後、現況地形の測量と並行して平成31年3月13日に調査前の現況写真撮影を行った。また、既存（『図解近畿の城郭V』所収）の縄張図を参考に現地を確認し、平坦面等の把握を行った。その後、3月18日に発掘調査資材・備品を搬入し、3月20日から重機と人力併用で曲輪2の表土掘削から開始した。曲輪2の北側は一段高くなつており櫓台等の施設も考えられたが、掘削を進めた結果、現代の盛土であることが判明したため、重機で盛土を除去した。

曲輪2内部の第1遺構面と土壘、外側の斜面部の調査を行い、曲輪4、曲輪1、曲輪3他の曲輪、堀切と順に調査し、最後に曲輪2の第2遺構面の調査を行つた。

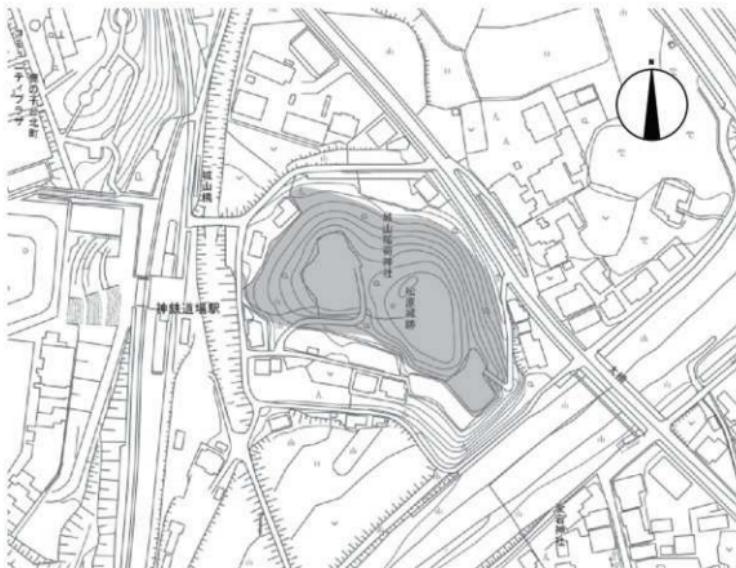


図2 調査範囲図

斜面部は重機が寄り付けず、当初は人力での作業となったが、草木の根が繁茂し、かつ不安定な傾斜地での作業と想定以上の土量のため遅々として進まず、調査期間後半は可能な範囲については重機で掘削を行った。

個々の遺構図や断面図作成は調査員で実施したほか、ラジコンヘリ等による写真測量を実施した。その後、土星・整地土など各所の断ち割り調査を行い、令和2年1月28日に現地調査を終了した。

なお、令和元年8月31日と同年12月14日には現地説明会を開催し、それぞれ400人を超える多くの見学者があつた。

整理作業は、遺物の洗浄・注記・接合と補強・実測・写真撮影、図面・写真等の記録類の整理と報告書の作成を行った。遺物のマーキングは、平成3年度試掘は「92 松原城」、平成29年度試掘は「2017 松原城」、本調査は「松原城-1」とした。



図3 現地説明会の様子【左：令和元年8月31日開催時、右：令和元年12月14日開催時】



図4 現地作業状況【左：曲輪1 人力作業状況（南西から）、右：曲輪2 土壘剥ぎ取り作業状況（南西から）】

第3節 調査組織

平成30年度 現地調査

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古資料担当）

黒崎 直 大阪府立弥生文化博物館館長

菱田 哲郎 京都府立大学教授

神戸市教育委員会事務局

教育長	長田 淳	文化財課担当係長	松林 宏典
教育次長	後藤 徹也	"	中村 大介
教育施策推進担当部長	荒牧 重孝	事務担当学芸員	池田 純
文化財課長	千種 浩	遺物整理担当学芸員	阿部 功
埋蔵文化財センター担当課長	安田 滋	保存科学担当学芸員	山田 侑生
埋蔵文化財係長	前田 佳久	調査担当学芸員	佐伯 二郎
文化財課担当係長	斎木 巍	"	綿織 文佳
"	東喜代秀	"	小野寺洋介

令和元年度 現地調査

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古資料担当）

黒崎 直 大阪府立弥生文化博物館名譽館長

菱田 哲郎 京都府立大学教授

神戸市教育委員会事務局

教育長	長田 淳	事務担当学芸員	阿部 敏生
教育次長	後藤 徹也	遺物整理・保存科学担当学芸員	
文化財課長	安田 滋		山田 侑生
埋蔵文化財センター担当課長	前田 佳久	調査担当学芸員	佐伯 二郎
埋蔵文化財係長	東喜代秀	"	小野寺洋介
文化財課担当係長	斎木 巍	"	田島 靖大
"	松林 宏典	"	萱原 朋奈
"	中村 大介		

令和2年度 遺物整理・報告書作成

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古資料担当）

黒崎 直 大阪府立弥生文化博物館名譽館長

菱田 哲郎 京都府立大学教授

神戸市文化スポーツ局

局長	岡田 健二	文化財課担当係長	中村 大介
副局長	宮道 成彦	事務担当学芸員	小林 さやか
文化財課長	安田 滋	保存科学担当学芸員	山田 侑生
埋蔵文化財センター担当課長	前田 佳久	遺物整理担当学芸員	中井 菜加
埋蔵文化財係長	東喜代秀	報告書作成担当学芸員	佐伯 二郎
文化財課担当係長	斎木 巍	"	小野寺洋介
"	松林 宏典	"	田島 靖大
		"	萱原 朋奈

第2章 地理的環境と歴史的環境

第1節 地理的環境

松原城跡が所在する神戸市北区道場町は市域の北東端に位置し、北側は三田市、東側は西宮市と接する。道場町は旧揖津国有馬郡の中心である三田市市街地に隣接し、鉄道や高速道路などの結節点も近い。

町域は低丘陵と盆地状地形で構成されている。中心部を大きく占める塩田盆地の北・西側丘陵には、基盤岩である白亜紀後期に形成された有馬層群が広がる。六甲山系に源を発する有馬川、有野川、八多川はこの西側丘陵を削り、川沿いに開析谷が発達し、下流で沖積地を形成している。有野川は八多川と合流したのち、松原城跡の東側で有馬川、さらにその先 500 m のところで長尾川を合わせて塩田盆地を東に抜け、丹波篠山市の愛宕山付近を源とする武庫川に合流する。

この地域にみられる被覆層は、古神戸湖底に堆積した地層と考えられている神戸層群である。この神戸層群に含まれる凝灰質砂岩は、三田市から神戸市西区にかけて広く分布することが知られ、松原城跡が存在する城山も斜面部で露頭が見られた。凝灰質砂岩は古墳の石材として使用されており、周辺の丘陵上にある定塚古墳群、北神ニュータウン内の古墳などで確認されている。また、近代以降も石材として利用されたことが石切場の存在からも確認されている。

塩田盆地は標高約 160 ~ 180 m、周囲の丘陵は標高 200 m 強と比高差はあまりない。松原城跡も周辺低地部分からの比高差は約 25 m である。頂部からの眺望は東側と南側は広く開け、東は道場町塩田一帯、南側は同町日下部あるいは有野町二郎あたりまで眺めることができる。長尾町方面は西側丘陵が壁となり、一切眺望することは不可能である。北側は三田市とを画する八景丘陵が横たわり、丹波街道の横山峠を望むことができる。

第2節 歴史的環境

旧馬郡の中心地である三田盆地周辺には、多くの遺跡が存在している。この地域で最古の遺物は、三田市天神遺跡で出土した旧石器時代のナイフ形石器や翼状剥片、三田市有鼻遺跡で出土したチャート製ナイフ形石器などである。市内では縄文時代草創期の有舌尖頭器が北神ニュータウン内第9地点遺跡、宅原遺跡、上小名田遺跡で発見されている。

縄文時代では、小坂遺跡から縄文時代早期の押型文土器が出土した。以後、縄文時代中期には三田市梶下ヶ谷遺跡（中期船元1式）、縄文時代後期には塩田遺跡、宅原遺跡（後期中葉中津式）、三田市桑原遺跡（四ツ池式等）など、縄文時代晩期には塩田遺跡、三田市対中遺跡などが知られるようになる。

続く弥生時代は、前期では三田市対中遺跡で水田跡・溝が検出されている程度で、活発な状況ではない。しかし中期になると、三田市三輪・餅田遺跡や三輪・宮ノ越遺跡が出現し、併せて通称「塩田石」を材料とする石包丁生産が始まる。塩田遺跡でも「塩田石」の製品・未製品が多く出土し、堅穴建物も確認されている。

弥生時代中期中葉には、三田市古城遺跡で方形周溝墓、三田市貴志遺跡で堅穴建物などが確認されている。中期後半になると、北神ニュータウン内第4地点遺跡が、丘陵上の集落として出現する。この時期には三田盆地内でも遺跡数は増大し、低地では三田市貴志遺跡、三田市三輪・餅田遺跡、三田市川除遺跡などで集落が営まれる。また丘陵上では三田市有鼻遺跡、

三田市奈カリ与遺跡などで、数十棟にものぼる堅穴建物が検出され大規模な集落を構成している。しかし、こうした丘陵上の集落は後期に入ると姿を消していく。低地の遺跡もその数を減ずるが、弥生時代後期後半になると宅原遺跡、下二郎遺跡、日下部遺跡などで再び生活の痕跡を辿ることができるようになる。三田市域でも天神遺跡や川除遺跡など遺跡数が増加していく。

また、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて、定塚古墳群で墳丘墓群、三田市奈良山古墳群で方形や円形の台状墓、平唐山古墳群で墳丘墓群が確認されている。

古墳時代では、近年まで前期古墳の存在は知られていなかったが、市境の八景丘陵上で塩田北山東古墳が確認された。墳丘長 35 m の前方後円墳で、後円部と前方部に2基ずつの粘土櫛をもち、管玉、ガラス玉、碧玉製紡錘車形石製品などのほか、三角縁獸文帶—仏三神四獸鏡の出土が特筆される。またこの古墳の西側にも前方後円墳が1基存在し（塩田北山西古墳）、塩田北山東古墳に先行する可能性も指摘されている。

北神ニュータウン内第9地点古墳1号墳は古墳時代前中期から中期初頭にかけての古墳である。東西 14 m 、南北 11 m の方墳で、埋葬施設は割竹形木棺である。その後の中期では古墳の築造は見られず、集落も三田市貴志・下所遺跡でわずかに堅穴建物が確認されたのみである。

古墳時代後期になると、集落遺跡が増加する。宅原遺跡、三田市川除遺跡、三田市貴志・下所遺跡などで集落がみられ、古墳も丘陵上や丘陵裾部に多く築造されるようになる。6世紀中葉からは内部主体を横穴式石室とし、数基から十数基の古墳群を形成している。中野古墳群や尼崎学園古墳群、南所古墳群、八幡神社古墳群、稻荷神社裏古墳群、北神ニュータウン内遺跡 22 地点古墳1・2号墳などが知られる。

松原城跡の西側丘陵には北神ニュータウン内第2地点・第3地点古墳が存在する。第3地点古墳は前方後円墳で6世紀中頃の築造と考えられており、横穴式石室の奥壁には「〇」印の線刻が存在する。

これらの後期古墳の中でも、尼崎学園古墳群や三田市東仲古墳、加茂古墳群第 32 号墳などは石室内に石棚を有する古墳として知られ、被葬者を考え上で重要な要素となっている。

古代に入ると、宅原遺跡、中遺跡、二郎宮ノ前遺跡などが知られる。宅原遺跡では飛鳥時代から奈良時代の大溝、土坑、河道等などが確認され、飛鳥時代、奈良時代の遺物が出土しており、とくに「評」や「五十戸」「郷長」などの墨書き土器や人面墨書き土器の存在は、官衙的な遺跡であることを類推させる資料である。

その他、三田市域では古代寺院である金心寺廃寺や飛鳥時代から平安時代の集落が知られている。

平安時代では、下小名田遺跡で掘立柱建物、石帯、銅印などが確認され、官衙的な様相が強い。八多遺跡でも9世紀代の掘立柱建物が検出され、綠釉陶器などが出土している。

平安時代後期から鎌倉時代にかけては、上小名田遺跡、下小名田遺跡、中遺跡、清水廻り遺跡などで集落が展開していく。上小名田遺跡は12世紀後半の大型建物が検出され、日下部遺跡や中遺跡は13世紀前半頃を中心とする集落である。

また生産遺跡として上小名田窯跡をあげることができる。この窯跡は12世紀後半から13世紀前半の操業と考えられており、この地域でも須恵器碗の生産が行われていたことがうかがえる。

鎌倉時代には文献上でも塩田荘、八多荘、宅原荘などが知られるが、塩田遺跡では塩田荘の荘官居館と推定される掘立柱建物や木棺直葬墓などが検出された。

鎌倉時代から室町時代にかけては、宅原遺跡で幅 1.5 ~ 2.3 m 、深さ 0.8 ~ 1.0 m で断面が

V字形の溝を検出し、埋土の中層から上層にかけて鎌倉時代後半から室町時代前半の遺物が出土している。この他に、宅原遺跡では鎌倉時代から室町時代の掘立柱建物、土坑、溝、柵列、ピットなどが検出されている。また、上津遺跡では鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物、溝、土坑などが検出され、須恵器、土師器が出土している。二郎宮ノ前遺跡では13世紀中頃から後半の屋敷地が確認され、その後室町時代にかけて建物や屋敷地の変遷が明らかにされた。

室町時代では、宅原遺跡で落ち込み状遺構や土坑、ピットが確認され、陶器鉢、須恵器、天目茶碗などが出土している。上小名田遺跡では14世紀前半代の土坑、吉尾遺跡では14世紀代の掘立柱建物、附物遺跡では14世紀頃の縦柱掘立柱建物、溝を検出している。

宅原遺跡では、石敷遺構上の粘土層から丹波焼擂鉢片や瓦片が出土し、15～16世紀代のものとされている。北神ニュータウン内第4地点遺跡では室町時代の土師器の鍋や皿が多数出土しており、土師器皿の中には、灯明皿も含まれる。また、土師器皿の内面にはハケ状の痕跡がみられ、地方色のひとつと考えられている。日下部遺跡では掘立柱建物など室町時代の遺構を確認し、土坑からも室町時代の土師器鍋などが出土している。中遺跡では焼土層から室町時代までの遺物が出土し、屋敷地が火災にあったものと推定されている。

室町時代後半では、宅原遺跡で16世紀後半から近世初頭の遺物が出土し、16世紀代の小規模庭園が確認されたほか、中世末期の妻入掘立柱建物と考えられる建物が検出された。また、中世末～近世前半の土師器小皿を集積する土坑が検出されている。日下部遺跡では戦国時代から江戸時代初期にかけての溝、水溜石組土坑が検出され、明時代の青花、ペトナム製陶器、胎土目の唐津焼・絵唐津、初期伊万里、天目茶碗、建水、花生などが出土している。

墓址は、小坂砦や北神ニュータウン内第47地点遺跡などで14～15世紀の集石墓や火葬墓などが検出されている。小坂砦からは中世後期から近世前期にかけての墳墓群や、14世紀の蔵骨器と思われる土師器鍋が出土している。

城郭は戦国期を主として周辺に分布する。有馬郡を長く支配した有馬氏の居城である三田城跡。平坦面を比較的低い土壘で囲まれた宅原城跡。曲輪・堀・土橋・礎石建物などが確認された茶臼山城跡。塩田の北方で市境にある丘陵の北側斜面に位置する立石城跡。横山城跡は丹波方面への街道の横山峠東側に位置したが、早くに宅地造成により消滅した。また、周囲を土壘で囲われた単郭構造の山城である釜屋城跡。文永年間に築かれ、天正期に荒木村重に攻め滅ぼされた大原城跡などが知られる。ほかにも、ショブ谷遺跡は、平坦面と堀・土壘・堀切・大走り等が現状地形から確認され、「六郷城」とも推察されている。小坂砦でも小規模ながら平坦面、堀切、堅堀、切岸、土壘などが確認された。

参考文献

- 兵庫県史編集専門委員会 1968『兵庫県史第3巻』兵庫県
- 新修神戸市史編集委員会 1989『新修神戸市史歴史編Ⅰ自然・考古』神戸市
- 新修神戸市史編集委員会 2010『新修神戸市史歴史編Ⅱ古代・中世』神戸市
- 三田市史編纂専門委員 2000『三田市史第3章古代・中世資料』三田市
- 三田市まちづくり部生涯学習支援室生涯学習課市史編さん担当編 2010『三田市史第8章考古編』三田市
- 神戸市教育委員会 2013『神戸の遺跡シリーズIV 神戸の古墳ーI 前方後円墳ー』
- 神戸市教育委員会 2016『神戸の遺跡シリーズVI 神戸の弥生遺跡』
- 神戸市教育委員会 2017『神戸の遺跡シリーズVII 神戸の古墳ーIIー』
- 高島信之 2010『神戸爾群の鐵灰質砂岩を使った三田市城崎町の古墳について』『史術研究さんだ』第12号
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2001『兵庫県文化財調査報告第230号 二郎宮ノ前遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会
- 神戸市教育委員会 2008『塩田北山東古墳 発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 神戸市教育委員会 2014『唐崎城跡・尼崎学園古墳群第1次発掘調査報告書』
- 公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 2018『兵庫県文化財調査報告第497号 日下部遺跡2』兵庫県教育委員会
- 城郭談話会 2014～2018『因解近畿の城郭』I～V 広洋祥出版株式会社
- この他、各年度の『神戸市埋蔵文化財年報』を参照

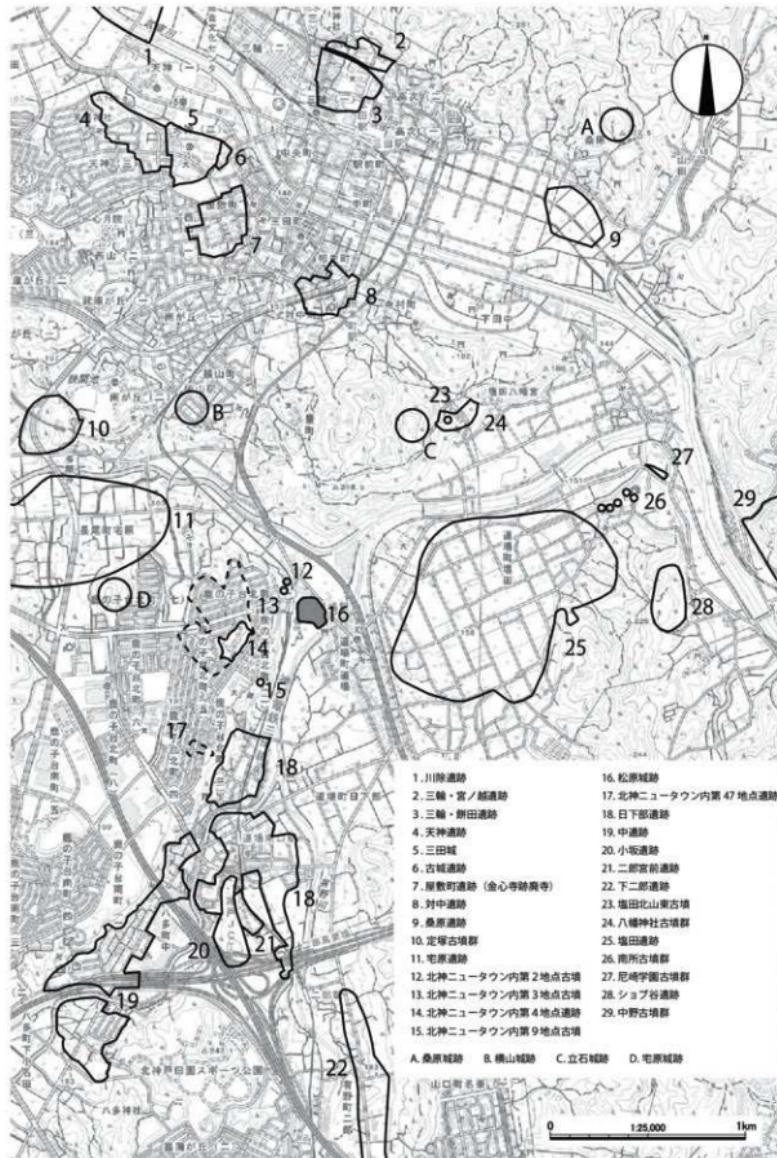


図5 松原城跡と周辺の遺跡

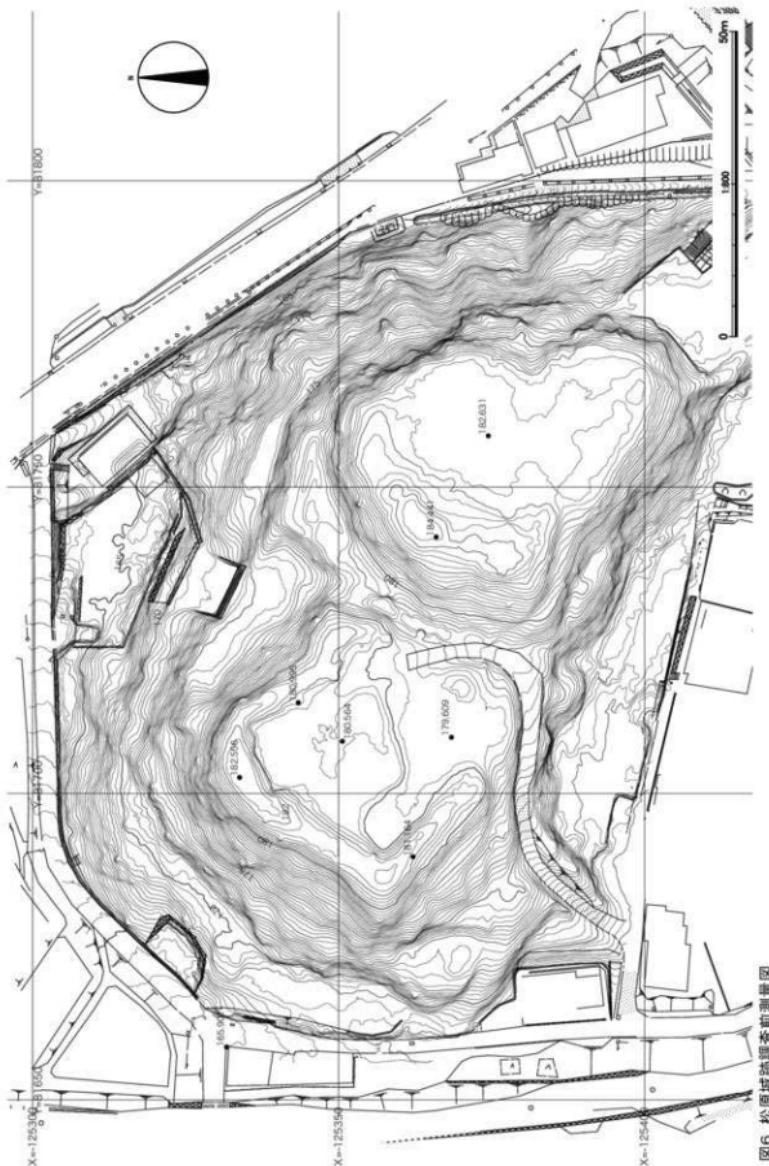


図6 松原城跡調査前測量図

第3章 発掘調査の成果

第1節 調査の概要

発掘調査は、約10ヶ月かけて実施し、延べ面積は約10,930m²に及んだ。調査にあたっては、盛土・搅乱除去を重機で行い、それ以下は主として人力により掘削作業を行った。

中世城郭跡のほぼ全体に対する発掘調査の結果、検出できた遺構は個々の曲輪、帯曲輪、堀切、横堀、閉塞土塁、礎石建物などである。調査区は便宜上、『図解近畿の城郭V』掲載の繩張図を参考に、発掘調査前に現地で現認できた平坦面に曲輪番号を付して行った。I郭～III郭はそのまま曲輪1～3とし、曲輪2北東側に位置する比較的大きな平坦部を曲輪4、以下反時計周りに順番に曲輪番号を付与した。その他の施設は、堀切、横堀等と呼称している。

曲輪1・2に存在する土壠は、曲輪内部からみた方角で、北東土壠のように名付けている。

第2節 曲輪1

(1) 概要

丘陵の東半部に位置し、最も高い場所に築かれた曲輪である。北東一南西方向約30m、北

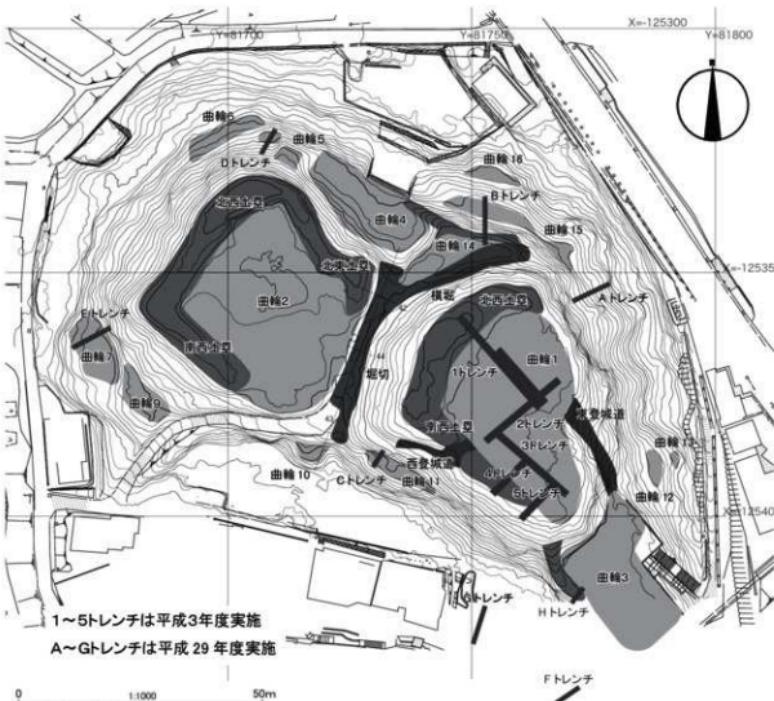


図7 松原城跡 曲輪等配置図

西一南東方向約35mを測り、面積は約900m²である。形は不定形で、方形を意識して造成された曲輪2と比べて、丘陵の地形をそのまま利用していると思われる。曲輪の北東側は急峻な崖面で、北西斜面側は中腹に平坦面を設けた急勾配の切岸となっている。近世以降、曲輪1上に稻荷神社が存在し、その参道が丘陵の西側（曲輪2南西部）より続いている。

（2）基本層序

平坦部遺構検出面の標高は、約182.4m前後を測る。表土、黒褐色砂質土（近世耕作土）、暗褐色粘質細砂土、灰黄褐色粘質シルト、灰白色および浅黄色粘質シルト（地山）が堆積する。

（3）平坦面

表土および近世耕作土が堆積し、炭化物が混じる暗褐色粘質土までは寛永通宝や近世以降の瓦、陶磁器が出土した。下層（灰黄褐色粘質シルト）から石敷遺構、土星壠の落ち込み溝（SD01016）、石囲いされた遺構などを確認した。建物跡は未確認だが、北西半に存在していた可能性がある。

（4）第1遺構面

灰黄褐色粘質シルト上面で検出した。平坦面では、石敷遺構、溝16条、土坑8基、ピット83基、用途不明遺構6基を検出した。土坑・ピットはいずれも建物などを構成するものではなく、溝の大部分は排水のための後世の暗渠と考えられる。

石敷遺構 曲輪1の平坦部の西側に位置し、土壘に沿ってL字状に検出した遺構である。西角は後世の搅乱により壊されていたが、建物の軒下に造られた雨落ち溝の可能性がある。しかし、遺構周辺には建物を復元できる土坑およびピットは確認出来ていない。南西辺は幅約2mで直径2~5cmの大石が多く、北西辺は幅約1mで拳大の石が多い。石は、同じ大きさや色調になるように選別し、敷設している。遺物は、陶器と磁器、16世紀代の青花が出土している。

SD01016 南西土壘南半の内側に位置し、土壘に沿って北西一南東方向に延びる溝である。検出長約14.5m、最大幅約2.8m、平坦面からの深さは約0.1~0.4mで、地山を掘削している。北西端部へ向かって深くなり、北西端部付近では深さ約0.4m、残存する南西土壘との比高差は約0.8mとなる。埋土は表土、にぶい黄褐色粘質細砂、黒褐色粘質細砂、灰白色ブロックを微量に含むにぶい黄橙色粘質シルト、暗褐色粘質細砂、にぶい黄褐色粘質シルトが堆積する。

南西辺土壘に隣接しており、溝の南西側立ち上がりは南西土壘の北東斜面となっている。この立ち上がりからは、長径10cm以上の凝灰質砂岩・河原石を利用した石列を検出した。その検出長は約5.5mで、溝の北西端部から約4m手前で途切れる。土壘に対する土留めと考えられ、溝底からも元来この石列の位置から転落したとみられる石が出土した。

遺物は、溝底から土師器皿、15世紀末頃の瀬戸・美濃焼端反皿、鉄製品が出土している。また、暗褐~黒褐色土層からは16世紀後半の瀬戸・美濃焼天目茶碗、小皿、17世紀中頃~後期の丹波焼甕、そのほか磁器碗、土師器の小片、鉄製品が出土している。

SK01005 曲輪の中央部からやや北東側に位置する遺構である。平面形は1.85m×2.40mの長方形で深さは約0.2mを測る。埋土は砂粒まじりの粘質土などだが、炭化物を含む層が多い。特に最下層は炭化物を多量に含んでいる。遺構の北西部にピット1基（SP01047）を検出している他、周囲にもピットを確認しているが、関連性は不明である。遺物は、鉄製品が出土している。

SX01001 曲輪の北部に位置し、人頭大の石をコの字状に並べ、中に直径2~5cmの大の石を敷き詰めた遺構である。内部の石は、上記石敷遺構同様に、同じ大きさや色調になるように選別し、敷設している。平面形は1.1m×1.2m、深さは約0.1mを測る。埋土は、炭化物を含んだにぶ

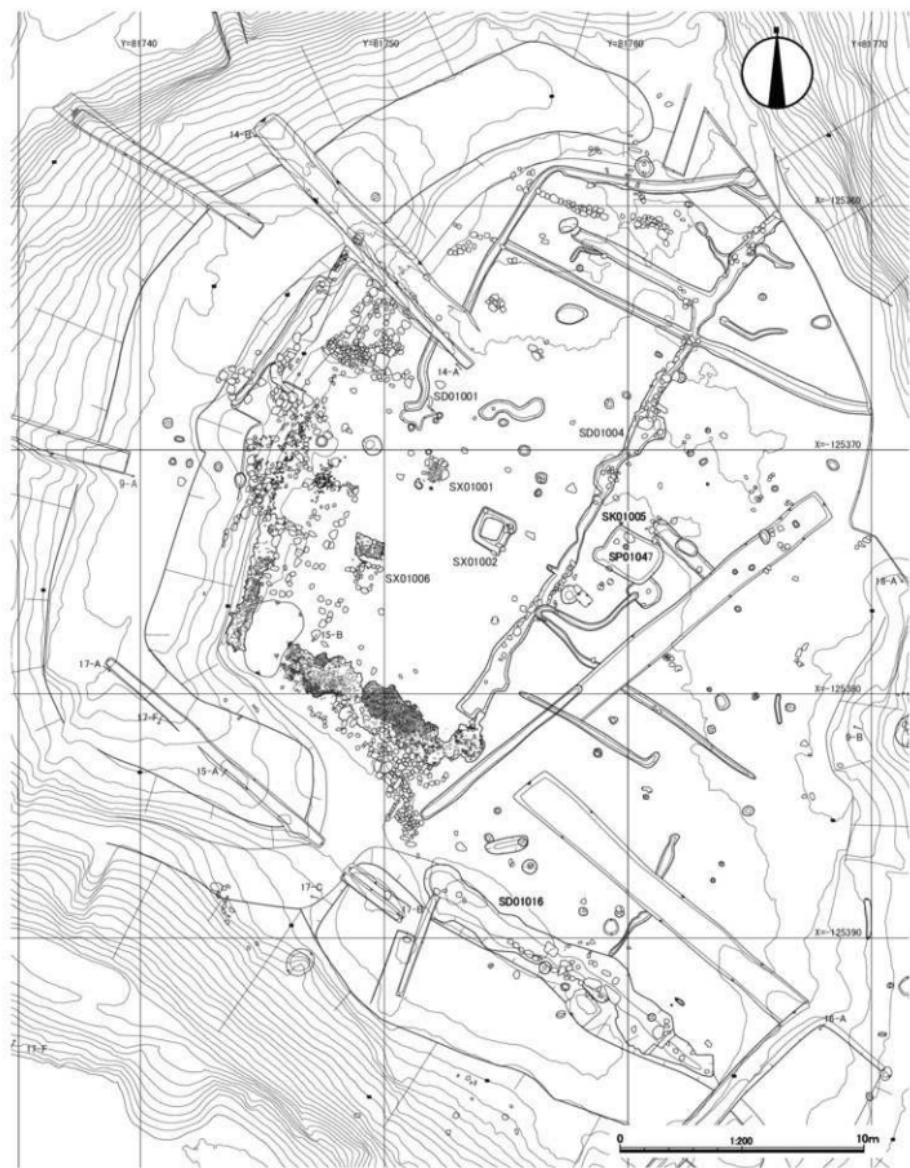


図8 曲輪1 第1遺構面平面図

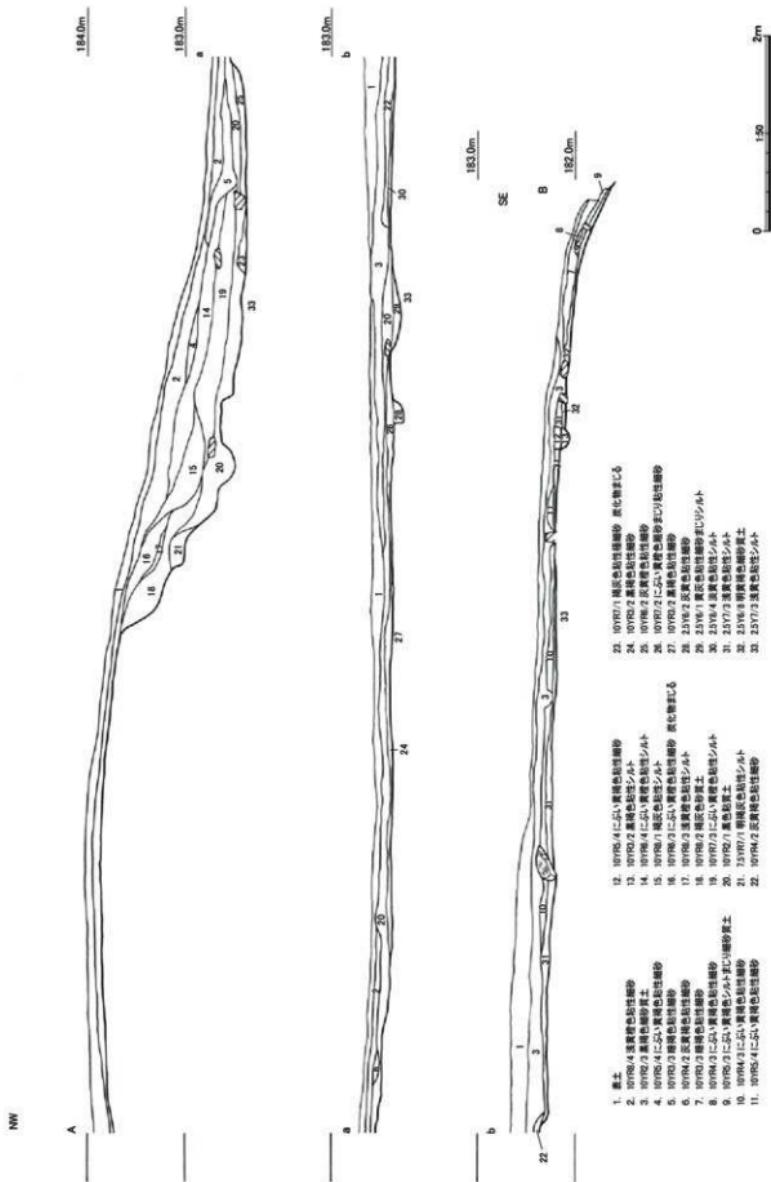


図9 曲輪1 平面断面図

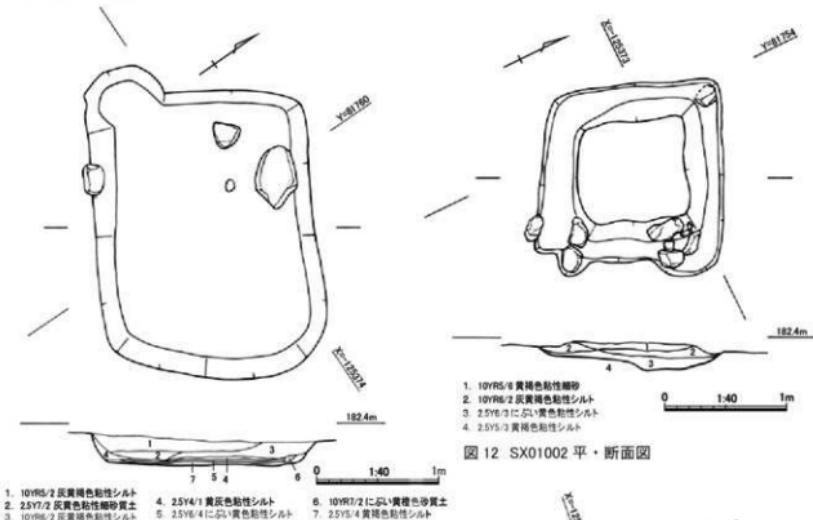
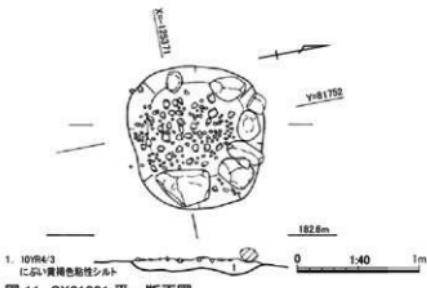


図 10 SK01005 平・断面図



い黄褐色粘質シルトである。遺物は、鉄釘が出土している。

SX01002 曲輪の北部に位置する方形の遺構である。平面形は $1.50\text{ m} \times 1.46\text{ m}$ で、深さは 0.22 m を測る。上面は四周に浅い溝が巡り、中央部は被熱で若干硬化している。埋土は、炭化物と焼土がまじる黄褐色粘質細砂質土、灰黃色粘質シルト、にぶい黄色粘質シルトが堆積する。四隅のうち2カ所には拳大～人頭大の集石があり、黄褐色粘質細砂質土の検出面から鉄釘が少量出土した。

SX01006 曲輪の西部に位置する人頭大の石をコの字状に並べた遺構である。平面形は $1.00\text{ m} \times 1.25\text{ m}$ の方形で、深さは $0.04 \sim 0.1\text{ m}$ を測る。埋土は、黒褐色粘質細砂、灰白粘質シルトが堆積する。石材は河原石と凝灰質砂岩が用いられている。石の傍らからは青花が出土した。

(5) 土壙

概要 曲輪1の南西辺、北西辺、北東辺の三方向を取り囲む。北西土壙は地山を削り出して成形し、曲輪外側に盛土をして構築している。最も残りの良い北西土壙上面は標高 183.8 m 前後、北東土壙は 182.9 m 前後を測る。北西土壙内側では土師器、須恵器、鉄製品が出土し、北東

図 12 SX01002 平・断面図

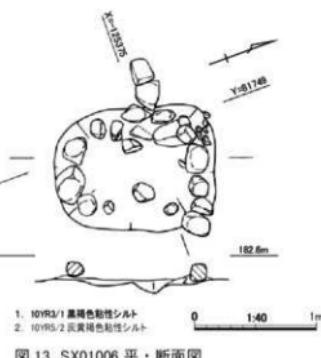


図 12 SX01002 平・断面図

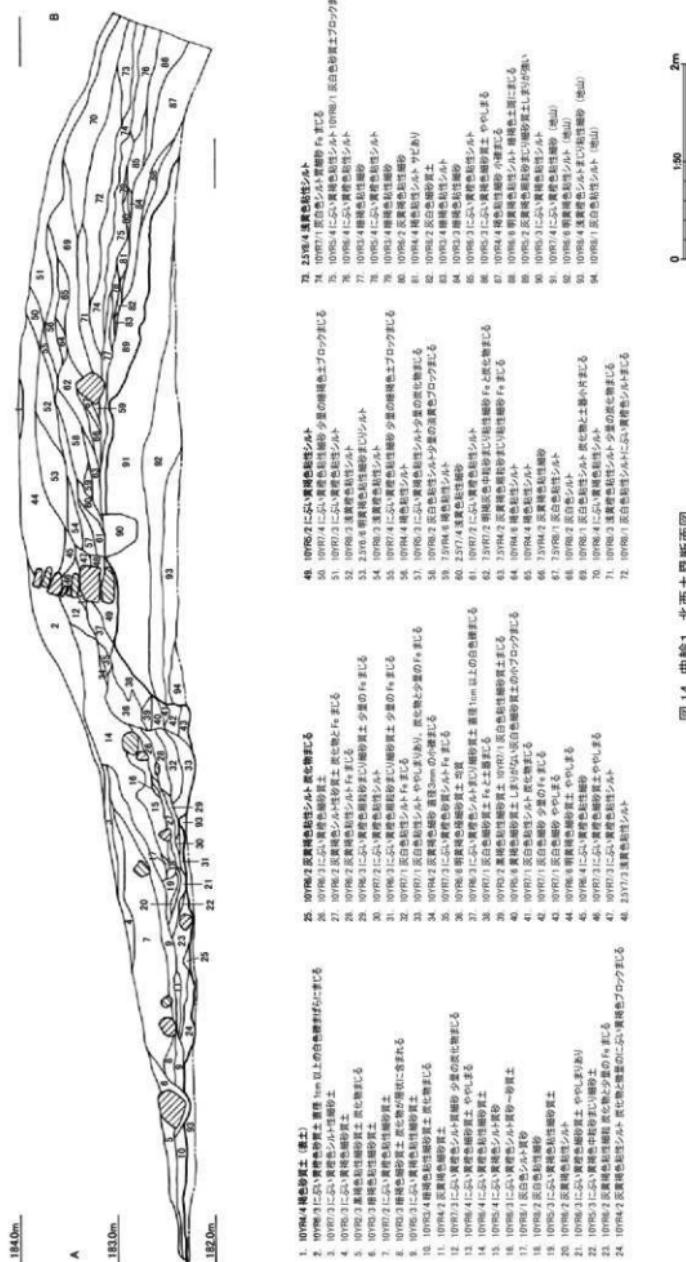


图 14 曲轴1 北西土壁断面图

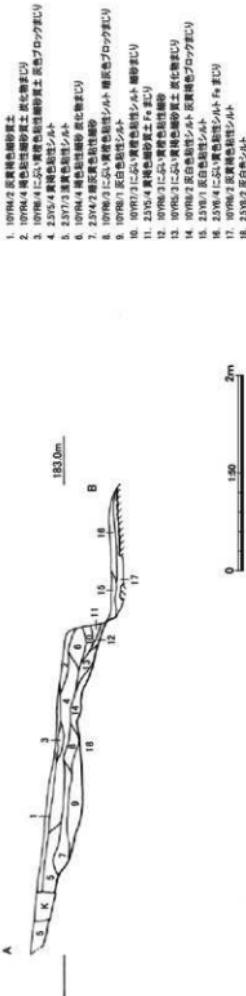


図 15 曲輪1 南西土塁(北部) 断面図

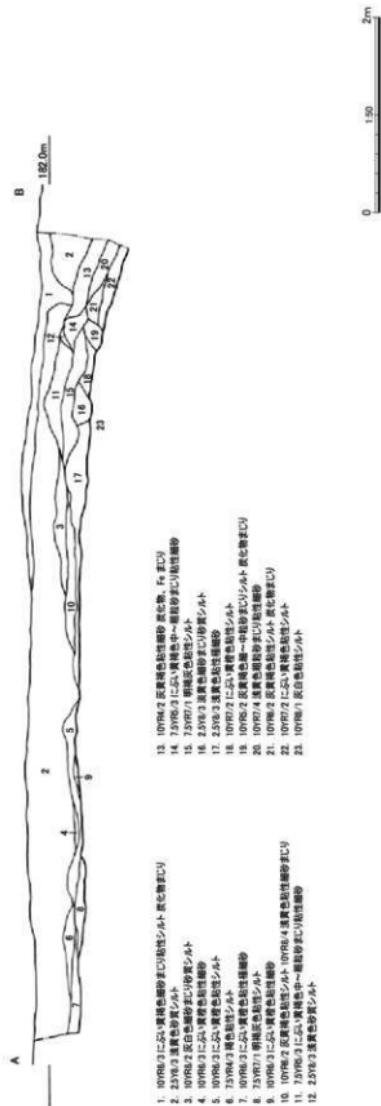


図 16 曲輪1 南西土塁(南部) 断面図

土星内側では一石五輪塔や瀬戸・美濃焼天目茶碗が出土している。

規模 南西土星は長さ約34m、基底部幅4m、土星上面幅約2m、高さは最大で約0.5mを測る。きわめて低平で南東に向かって徐々に低くなり、平坦部と同一面になる。中央やや北西寄りの位置に、喰い違い虎口状の切れ目が存在する。近世以降参道として利用されていたこともあり、改変が著しく、虎口として確定できなかった。また、土星内部側裾に石材が並んで露頭していたが、神社休憩所建物に付随する石材であると判明した。他にも、土星から石敷遺構にかけて雪崩れ込むように、石が広がっているが河原石だけでなく凝灰質砂岩も含まれている。

北西土星は長さ約26m、基底部幅約6m、土星上面幅約3m、高さは最大で約1.7mを測り、断面形状は薄い蒲鉾状を呈する。曲輪1では最も大きい土星であるが、堀切等の土量を考えると相当土砂が流出していたと思われる。城山稻荷神社による改変が著しい。曲輪内側の転落石は神社施設に伴うものと考えられる。

北東土星は南東端が崖面にあたるため、長さは約14mと短い。基底部幅は約4m、土星上面幅約2m、高さは最大で約0.3mと低平である。南西土星同様、徐々に低くなり平坦部に収束する。

構築方法 北西土星の構成土は上層より表土、にぶい黄橙色砂質土（後世の盛土）、褐色粘質土まじり灰白色粘質土、灰褐色粘質土、黄褐色粘質土および灰白色粘質土（地山）となる。曲輪内部側の地山を削り出し、その上に外側へ盛り足していくように構築している。

北西土星北半は遺構検出面（灰白色粘質土上面）から土星の最高所まで表土を含めて1.6mあるが、上層0.2～0.4m（にぶい黄橙色粘質土）は神社を建築する際に元の土星を削平し、新たに盛られた土と考えられる。全体的に、神社による搅乱が多く、土星の上半部は部分的に残存するのみである。

土星内側は2段に造成され、上下段とも石積みを検出した。石積みは直径約20～30cmの大の河原石と凝灰質砂岩を用いている。やや南西寄りでは石段を検出した。南半頂上部では、にぶい黄橙色砂質土下から直径約20～30cmの大の石列が星線に沿って並ぶが、神社に用いられた石材と思われる。

（6）登城道

概要 曲輪1南西部と東部に曲輪の斜面に沿った道状の痕跡があり、登城道と考えられる。曲輪の南西部に接続する道が西登城道、東部に接続し曲輪3へと繋がる道が東登城道である。

西登城道 南西土星の切れ目から曲輪の南西側斜面を沿うように曲輪2方向へと伸びていく比高差約3m、長さ15mの道である。

道は、曲輪1の斜面を沿うように曲輪2の方向へ下降するが、道は途中で途切れ、堀切まで到達していない。調査以前より曲輪2へと続く道があったが、それは神社の参道として整備されたことが判明している。また、曲輪1・2間に木橋などを架けた痕跡も確認されず、曲輪2への移動経路は不明である。

東登城道 曲輪3北西部と曲輪1北東部間を繋ぐ比高差約5.8m、長さ19mの道である。表土、炭化物まじりの褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土が堆積している。両曲輪とも虎口施設は確認できなかったが、曲輪1側出入り口には多数の人頭大の河原石が集積しており、虎口施設に伴う石材が崩落した可能性があるが定かではない。また、道の中間にあたる場所でも、曲輪1からの転落石の可能性がある人頭大～約40cmの大の石が多数確認された。

遺構は上部の曲輪側斜面で土坑を1基検出し、遺物は土師器皿、陶器、鉄製品などが出土しており、土師器は16世紀前半～17世紀前半のものと考えられる。

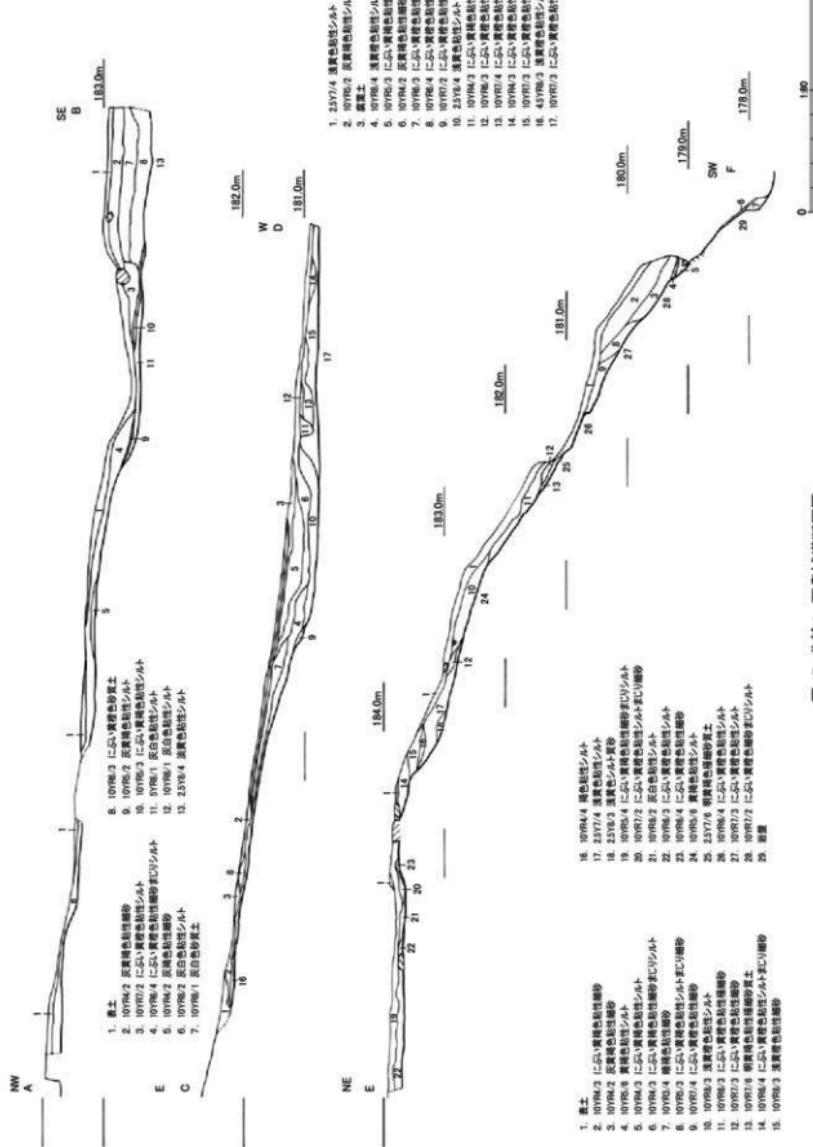


図 17 曲輪 1 西壁横断面図

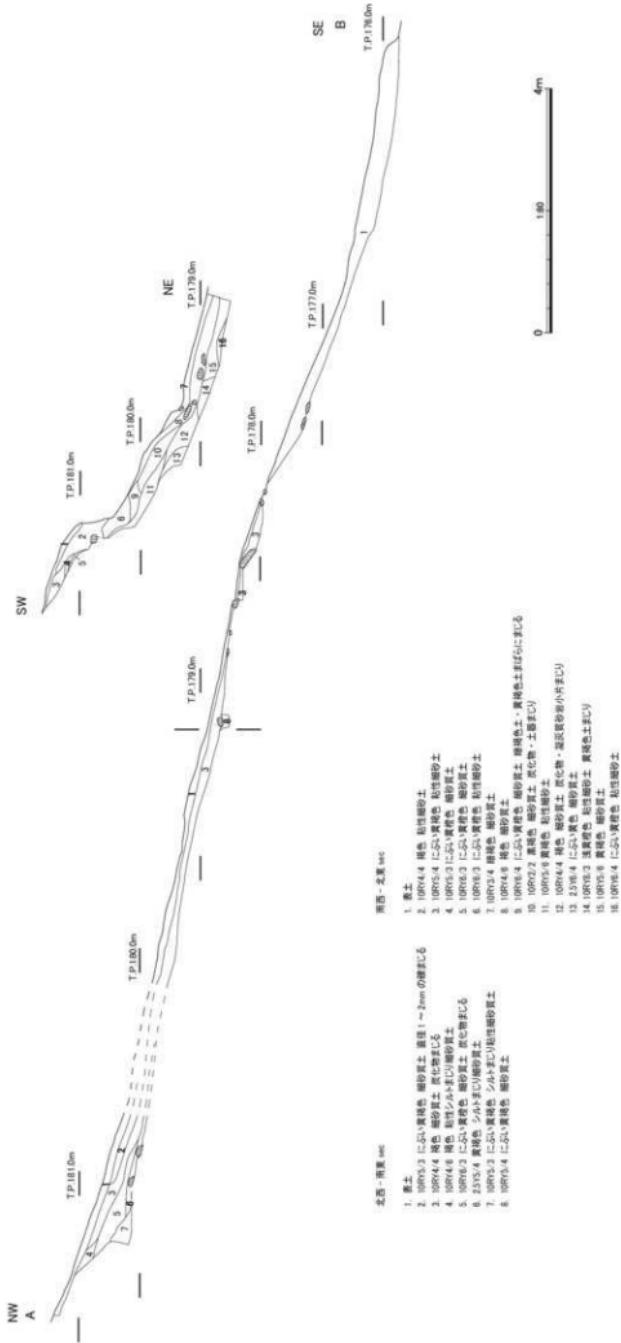


図18 曲輪1 東登城道断面図

第3節 曲輪2

(1) 概要

丘陵の西半部に位置し、曲輪1に次ぐ高所に築かれた曲輪である。北東—南西方向約25m、北西—南東方向約30mを測り、面積は約750m²である。平坦面は、南側に登城道を設け、南東側は堀切と接続する。平面形は方形で、南西側・北西側・北東側の三方を土塁で囲う。平坦面から斜面部を断ち割った結果、丘陵の北東側を削平して南西側に盛土を施すことで平坦面を造成したことが判明し、曲輪の形状が方形となるよう整形したものと考えられる。調査前には南東側の一部に盛土が存在したが、調査前に存在した住宅の庭の造成時に設けたものであり、土塁は確認されなかった。また、平坦面の北半には20m×15m程度の方形壇状の高まりが存在したが、住宅建築に伴う盛土と判明した。調査の結果、築城以前のⅠ期、築城時のⅡ期、改修時のⅢ期、廃城後のⅣ期の4時期にわたる營みが確認できた。

(2) 基本層序

曲輪中央部の標高は約179.4mを測り、南東方向へわずかに傾斜する。平坦面における層序は上層から盛土・搅乱、暗褐色粘質土（近世以降の表土）、淡灰褐色粘質土（上面が第1遺構面・Ⅳ期）、灰黄褐色粘質土、灰白色粘質土（上面が第2遺構面・Ⅲ期、地山）が堆積する。なお、後述する石敷遺構は地山上層でにぶい黄褐色粘質土が堆積し、南西土塁側は盛土をして平坦面を広げていることから岩盤の小片や地山まじりの褐色粘質土が堆積する。

(3) 第1遺構面

淡灰褐色粘質土上面で検出した、Ⅳ期に相当する遺構面である。平坦面で石敷遺構、土坑4基、ピット22基、溝30条、用途不明遺構1基を検出した。土坑・ピットは集中せず曲輪内で散在しており、いずれも建物などを構成するものではない。溝は北側で小型のもの、東と南側で大型のものが存在する傾向にあるが、前者は樹木根の痕跡、後者は排水に伴う後世の暗渠の可能性が高い。

石敷遺構 北西土塁裾で検出した。搅乱により一部失われているが、土塁基線に平行して直径15～40cm大の角礫を並べ、曲輪内部側に数cm大の礫を幅0.9mの範囲で充填する。長さは約9.2mで、小礫群の検出レベルは179.5～179.6mを測る。小礫群の石材は溶結凝灰岩である。北東側の2か所に、50cm角と35cm角の板状の凝灰質砂岩が2.15mの距離で据えられて

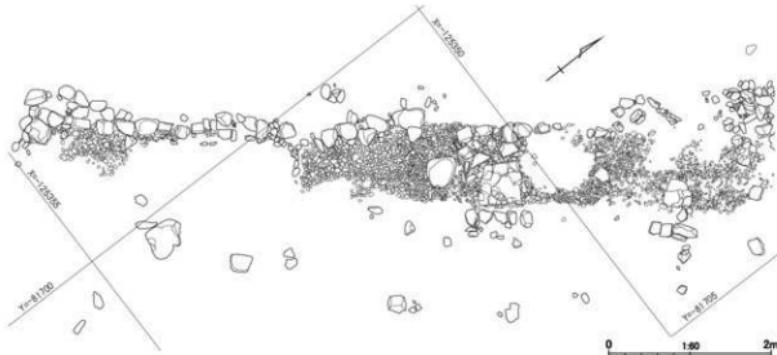


図19 曲輪2 第1遺構面石敷遺構平面図

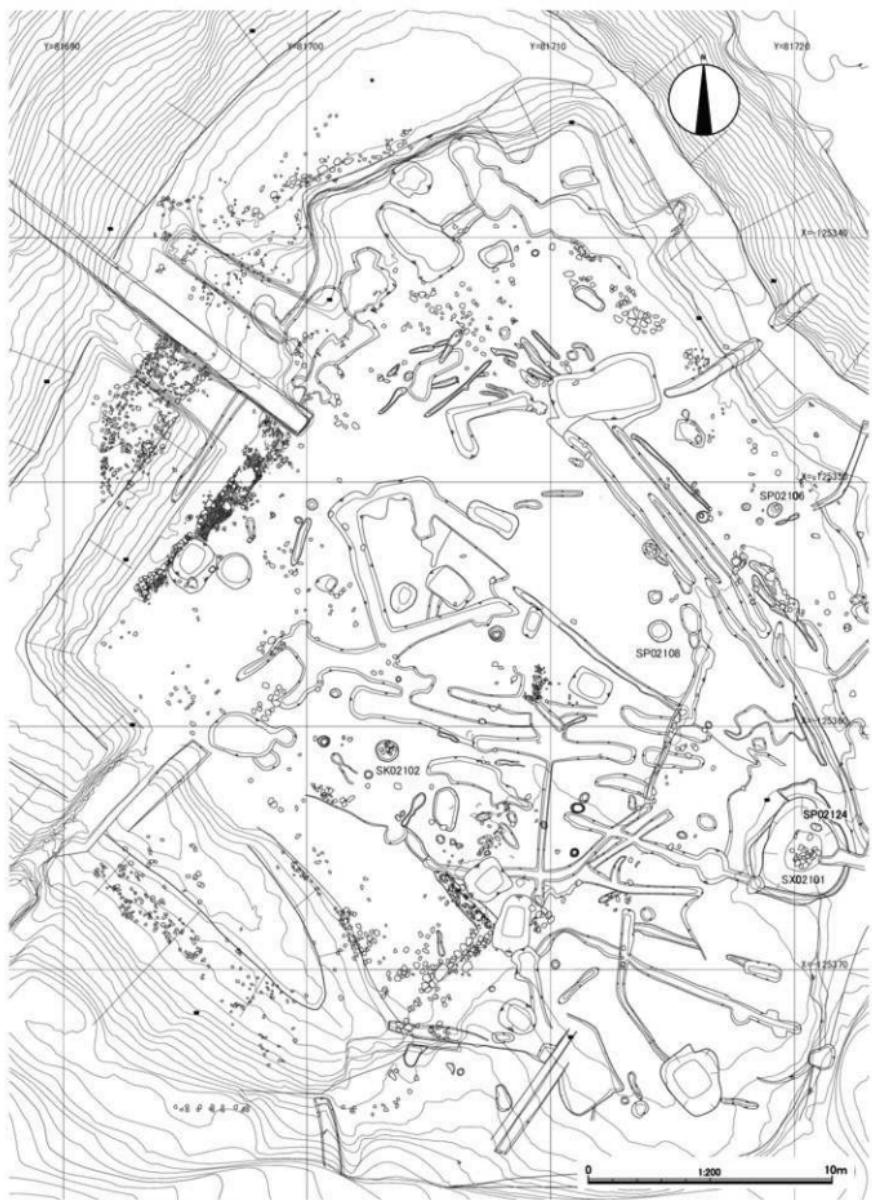


図20 曲輪2 第1造構面平面図

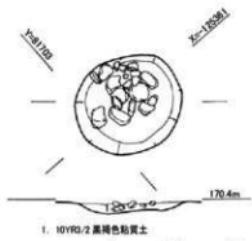


図 21 SK02102 平・断面図

いた。双方とも曲輪内部側に 15cm 大の角礫を数個並べる。この石敷き遺構の性格は不明であるが、土星から流れた雨水を処理する施設、あるいは建物の雨落ち溝、通路などが考えられる。遺構埋土ならびに礫上より 16 世紀中～後半の丹波焼鉢が出土した。

SK02102 南側で検出した長径 0.9m、短径 0.8m、深さ 0.1m の長円形の土坑である。にぶい黄褐色粘質土が堆積し、埋土中に拳大程度の礫を複数含んでいた。

SP02108 東側で検出した長径 0.92m、短径 0.87m、深さ 0.25m の長円形のピットである。灰黄褐色砂質土、にぶい黄橙色粘質土、にぶい黄橙色粘質土の順に堆積する。断面は浅いU字形を呈し、にぶい黄橙色粘質土下層に多量の炭化物を含む。

SX02101 曲輪南部の堀切近くで検出した大型の用途不明遺構である。遺構の東側は後世の搅乱により削平されるが、上端直径約 5.4 m の円形の落ち込みである。漏斗状を呈し、標高 176.8 m 以下は岩盤を円筒状に掘り下げる。現地表下 2m までは、現代の造成土であるにぶい褐色粘質土で埋められており、その下層に近代以降の表土である灰褐色粘質土を確認したため、近世以降も開口した状態であったことがうかがえる。灰褐色粘質土以下は、にぶい黄褐色粘質土、礫まじりににぶい黄色粘性シルトの順で堆積する。礫は検出時点で井戸枠の可能性が考えられたが、石組みではなく投棄された状態であった。

当遺構の性格として、形状と深さから井戸の可能性が考えられる。深さは検出面より 4m までは確認したが、以下は掘削不能で最深部まで届かず、湧水点は確認できなかった。遺構埋土より中世の土師器、丹波焼鉢、磁器などが出土している。

SP02124 SX02101 内で検出した直径 0.35m、深さ 0.85m のピットである。斜め方向に掘削されており、埋土である黒褐色粘質土中より炭化物と複数の土師器皿が出土した。

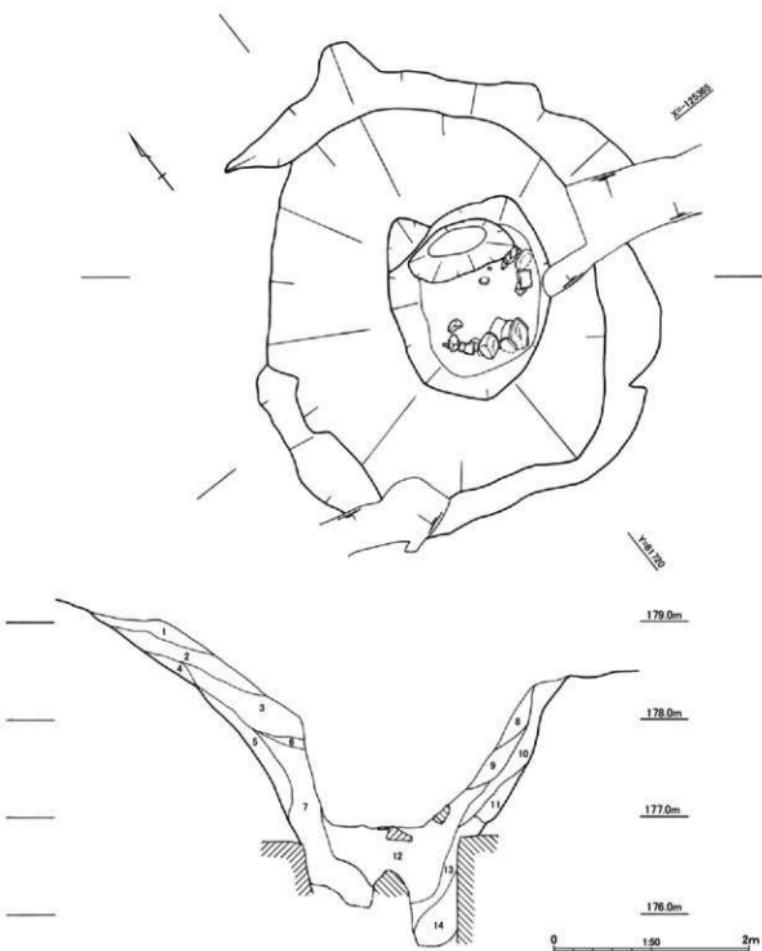
虎口 丘陵南西からの登城道を登り詰めた場所は南西土星の南端に位置しており、当該箇所が虎口と推定された。ただし、前述のとおり、南西土星と対になる土星は確認されなかつた。南西土星端部では曲輪内部側へ土星線と直交方向にのびる長さ 5.5 m の石列を確認した。石列を構成する礫の大きさは 15 ~ 65cm である。また、この南側に面を揃えて並ぶ礫が数個あり、石列と合わせて幅 0.3 ~ 0.4 m の溝状を呈する。この石列は門や建物などの構造物、石垣の基礎などが考えられるが、門柱を受ける礎石・柱穴などは確認できなかつた。

(4) 上層土壌

概要 曲輪 2 の南西辺・北西辺・北東辺の 3 方向を取り囲む。一部北西土星から北東土星で地山を削り残してその上に盛土しているが、基本的には整地土上に盛土している。後述のように明確に改変が認められたため、上層と下層に分けて記述する。なお、土星上には柱穴など構築物の痕跡は確認されなかつた。

規模 南西土星は、長さ約 26 m、基底部幅約 6.5 m、土星上面幅 2.5 m、平坦面からの高さは最大で 1.6 m を測る。傾斜は内側が約 45 度で外側の 25 度より急である。上面から斜面部にかけての表面上に 10 数 cm 大の角礫が散在する。

北西土星は北隅が最高所となり、平坦面からの高さ約 3m を測る。長さ約 38 m、基底部幅は約 8.7 m、表土層を除いた平均高は 2m 強である。北半内側は現代の搅乱を受け削平が著しい。傾斜は曲輪内側が緩く約 25 度、外側は 50 度である。傾斜角は後述する下層土星とほぼ同じであるが、



1. 2SY6/3にぶい黄色粘性細砂まじりシルト
 2. 10YR6/2 灰青褐色細粒まじり粘性シルト
 3. 10YR6/3にぶい黄褐色細砂まじり粘性シルト
 4. 2SY7/3 淡黄色粘性細砂質土
 5. 10YR6/3 淡黃褐色粘性シルト
 6. 2SY8/2 灰白色シルトまじり細砂
 7. 10YR4/3にぶい黄褐色粘性シルト 灰化物まじり
 8. 2SY8/4 淡黄色細砂質土
 9. 2SY7/3 淡黄色粘性細砂質土
 10. 10YR5/3にぶい黄褐色粘性シルト
 11. 2SY8/4 淡黄色細砂質土
 12. 5YB/3 淡黄色中砂まじり細砂質土
 13. 2SY6/2 灰黄色粘性シルト
 14. 10YR7/2にぶい黄褐色粘性シルト
 10YR5/3にぶい黄褐色粘性シルト

図 22 SX02101 平・断面図

上部幅が広いため、より扁平な形状を呈する。一部の内側斜面中段に幅約1mの段が存在する。表土を除去すると、北西土星の頂部や南西辺の斜面部には径10～20cmの大礫が散在していた。北西土星南半において、礫は頂部の内側で2～3段積んだ列状で、中心部では土星中心線に沿って、それぞれ並んだ状態で検出した。また、この両者間では礫が散在した状態で確認された。

北東土星は、長さ約25m、基底部幅約5.5m、土星上面幅2.0m、平坦面からの高さは最大で1.4mを測る。南側で若干「く」の字状に屈折する。同箇所は全体的に相当量の土砂が流出したため本来の形状は失われていた。しかし、曲輪4南西辺の岩盤削り出しラインが土星線に沿っているため、土星も当初から屈折していたものと推定される。北側の隅は、周囲に比して頂部の幅が広いため、見張り台などの設置も推測されたものの、全体として土星上には柱穴など構築物の痕跡は確認できなかった。

構築方法 下層土星の上に白灰色系の地山由来の土を多く盛り上げる。南西土星・北西土星とも曲輪内側に盛土しており、平坦部の縮小化より土星の高さを優先したようである。盛土には版築を行った痕跡はみられず、層厚も数十cmを測る箇所があり、短期間にうちに増築されたと考えられる。また北西土星では下層土星に伴う遺構面を削平して構築していることが判明した。

(5) 第2面遺構面

灰白色粘質土上面で検出した、Ⅲ期に相当する遺構面である。平坦面では虎口、石敷遺構、礎石建物1棟、土坑3基、ピット43基、溝17条、用途不明遺構6基を検出した。ピットは礎石建物を構成するもの他にも多数検出した。平坦部の南側は石敷遺構、礎石建物、虎口などの遺構密度が高いが、北側は複数のピットや大型の方形遺構などを検出しているが遺構密度は低い。

石敷遺構（下層・最下層） 北西土星の内側裾、第1遺構面で検出した石敷遺構（上層石敷遺構）の下層で、さらに石敷遺構を2層検出した。

下層石敷遺構の規模は長さ約5.5m、幅は約2.0mで、幅は上層石敷遺構よりも広い。礫の大きさは上層石敷遺構より大きく、拳大である。礫上面のレベルは179.4mで、上層石敷遺構とは間層として黒褐色粘質細砂～にぶい黄褐色シルト層を挟む。

最下層石敷遺構は、下層石敷遺構の北東隅で検出した。規模は長さ約2m、幅約1mで、下層石敷遺構の約1/4の規模しかない。礫の大きさは上層石敷遺構と同じ数cm大だが、1/5程度は下層石敷遺構と同じ拳大を含んでいる。礫上面のレベルは179.3mを測り、下層石敷遺構とは

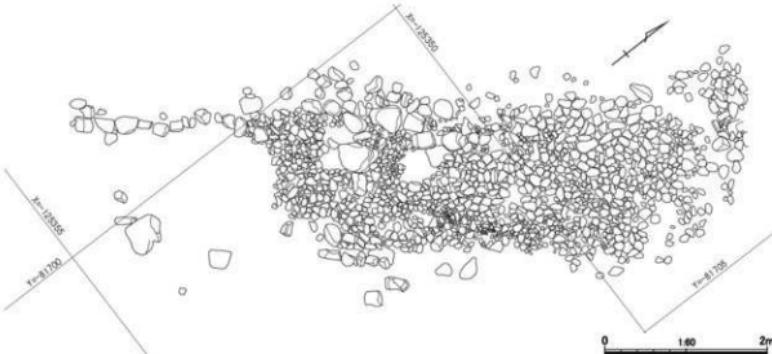


図23 曲輪2 第2面遺構面下層石敷遺構平面図

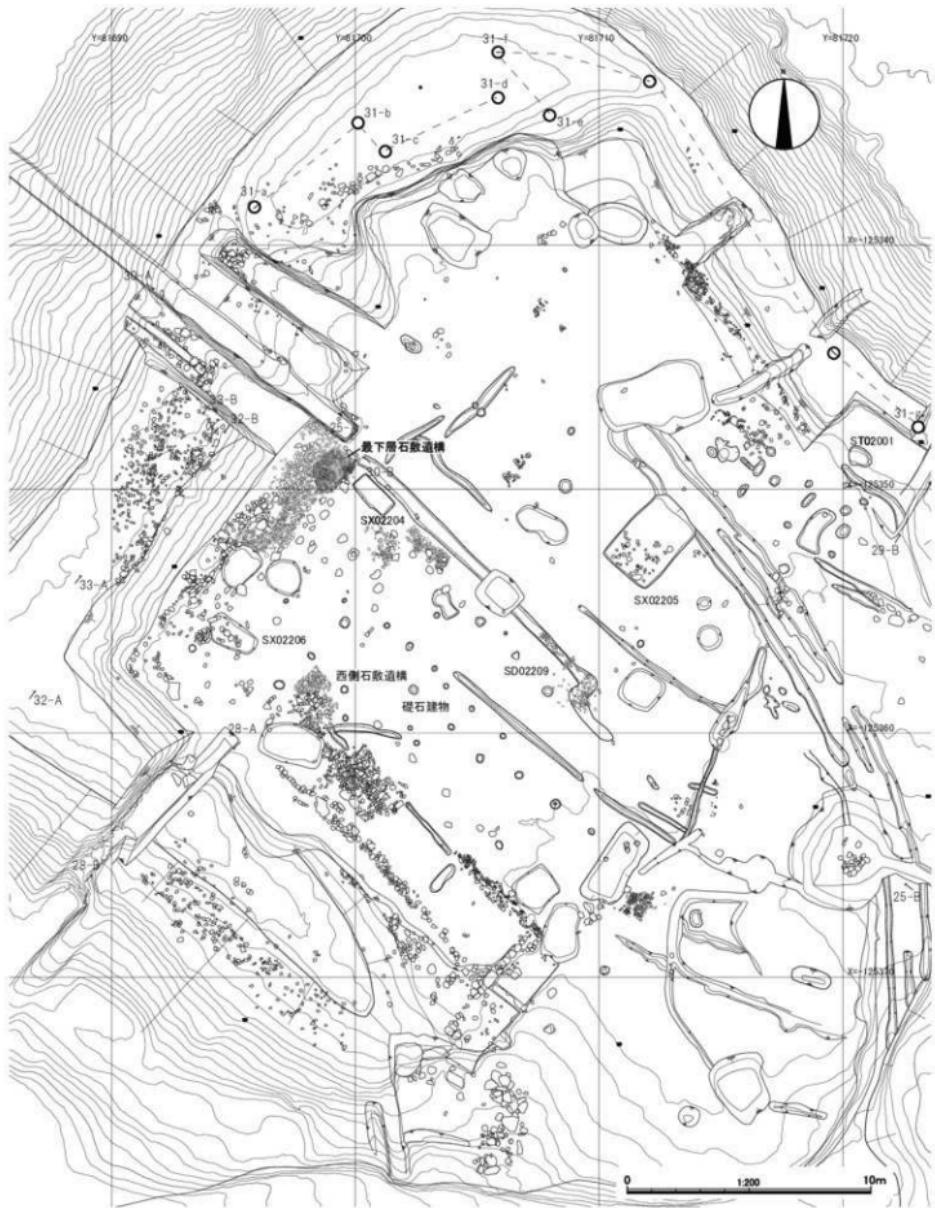


図24 曲輪2 第2造構面平面図

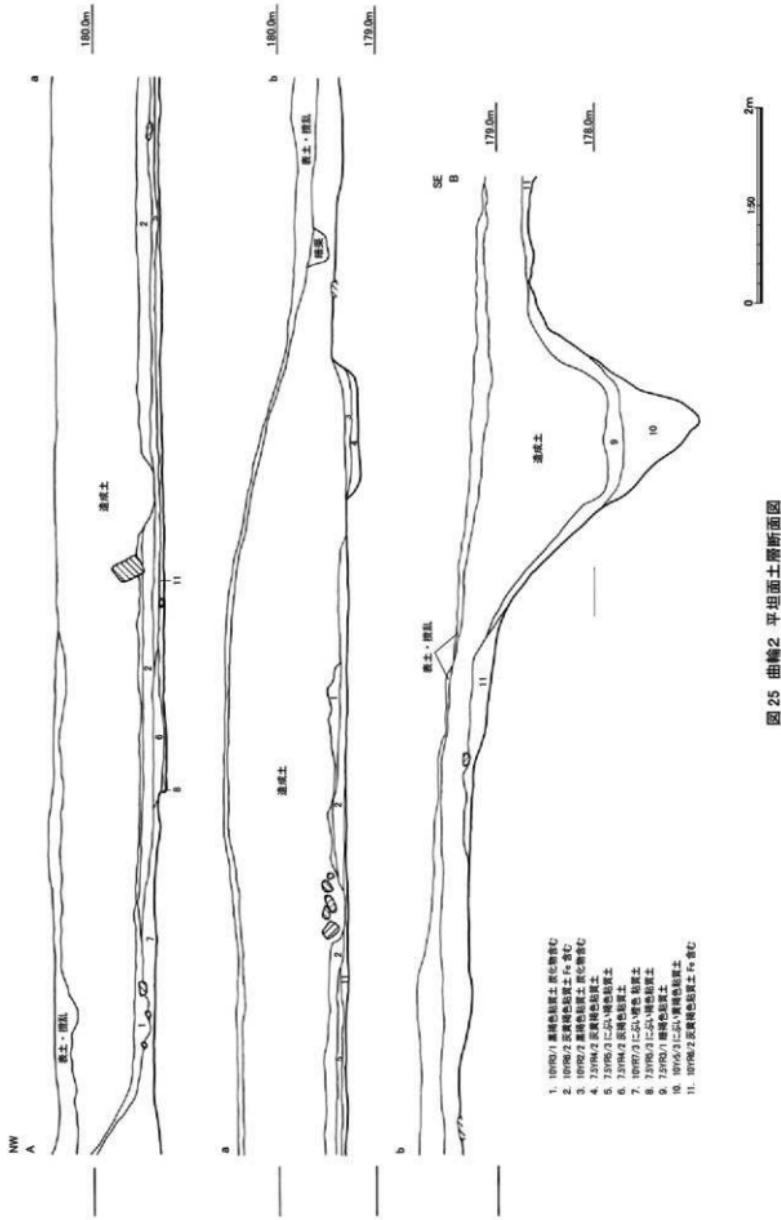


図 25 曲輪2 平坦面土層断面図

間層として黄褐色まじりの灰白色粘質シルトを挟む。

礎石建物 曲輪西側で総柱礎石建物を検出した。規模は3間×6間で、面積約 70.5 m²である。礎石の芯々間距離は約 1.95 mで、およそ6尺4寸となる。礎石は一部失われているが、抜き取り穴として痕跡が残っていた。礎石に使用された石材は溶結凝灰岩が主で、ほかに花崗岩と凝灰質砂岩が見られる。

建物内や周囲には他にも礎石と思しき石材が検出されており、おそらくは建て替えがあつたものと思われる。また建物の周囲には雨落ち溝か通路と思われる石敷遺構が巡っている。

西側石敷遺構 曲輪南西側で、土壘に平行する長さ約 14 m、幅約 2.7 mの石敷きを検出した。他の石敷遺構と比較すると礎の大きさが不均一で、拳大のものから直径 30cm 以上の凝灰質砂岩および溶結凝灰岩・花崗岩が使用されている。石敷のほとんどは失われていたが、虎口部分の土壘直交石列および北側の下層石敷遺構に関連する遺構と考えられる。

SX02209 曲輪曲輪の中央部を石敷遺構からのびる長さ約 15 m、幅 0.4 ~ 0.5m の溝で、深さは約 0.08m を測る。溝の東隅はクランク状に屈折しており、その内側に拳大ほどの河原石がL字状に集石している。礎石建物に伴う雨落ち溝などの遺構の可能性が考えられる。しかし、西側で検出した石敷遺構と比べ大きさは不揃いで、石が敷き詰められた状態ではなく、集石した状態となっている。

SX02204 曲輪の西部に位置し、礎石建物と石敷遺構に隣接する遺構である。平面形は北西—南東方向 1.70 m × 北東—南西方向 0.82 m の長方形で、深さは約 0.1 m を測る。炭化物が遺構一面に堆積した層を検出した他、遺構内からは土師器が出土した。また、この遺構から南東に向かって幅約 1m の炭化物がまじった土が広がっていた。

SX02205 曲輪の東部に位置する方形の遺構である。平面形は北東—南西方向 3.50 m × 北西—南東方向 2.35 m の方形で、深さは約 0.2 m を測る。用途は不明だが、平坦面を広く掘削しており、遺構内部からは人頭大の河原石を複数検出している。

SX02206 曲輪の西部に位置する直径 15cm 前後の石を円形に並べ、それに直行するように同じ大きさの石を並べた遺構である。円形部に直径は約 0.6m で、直交する石列は約 0.6m である。深さは約 0.2m を測る。使用している石材は凝灰質砂岩で、一部黒く変色した部分があった。

その他 平坦面上で複数のピットを確認した。建て替えの痕跡か礎石建物に関連する柱穴かは不明である。また、復元には至らなかったものの、曲輪の東部でも約 2m 間隔で並んだピットを 6 基検出している。

(6) 第3遺構面

築城時(II期)に当たる。平坦面では溝1条、土坑1基、ピット4基を検出した。西半では斜面部に対して黄褐色・暗褐色・黒褐色粘性シルトなどを互層に盛土し、整地したうえで石列や土壘を構築していたことが判明した。

SD02301 北西土壘中央部から北東土壘中央部の土

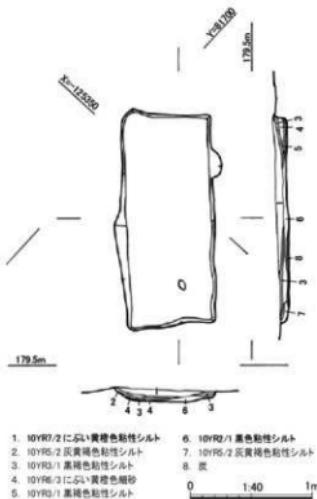


図 26 SX02204 平・断面図

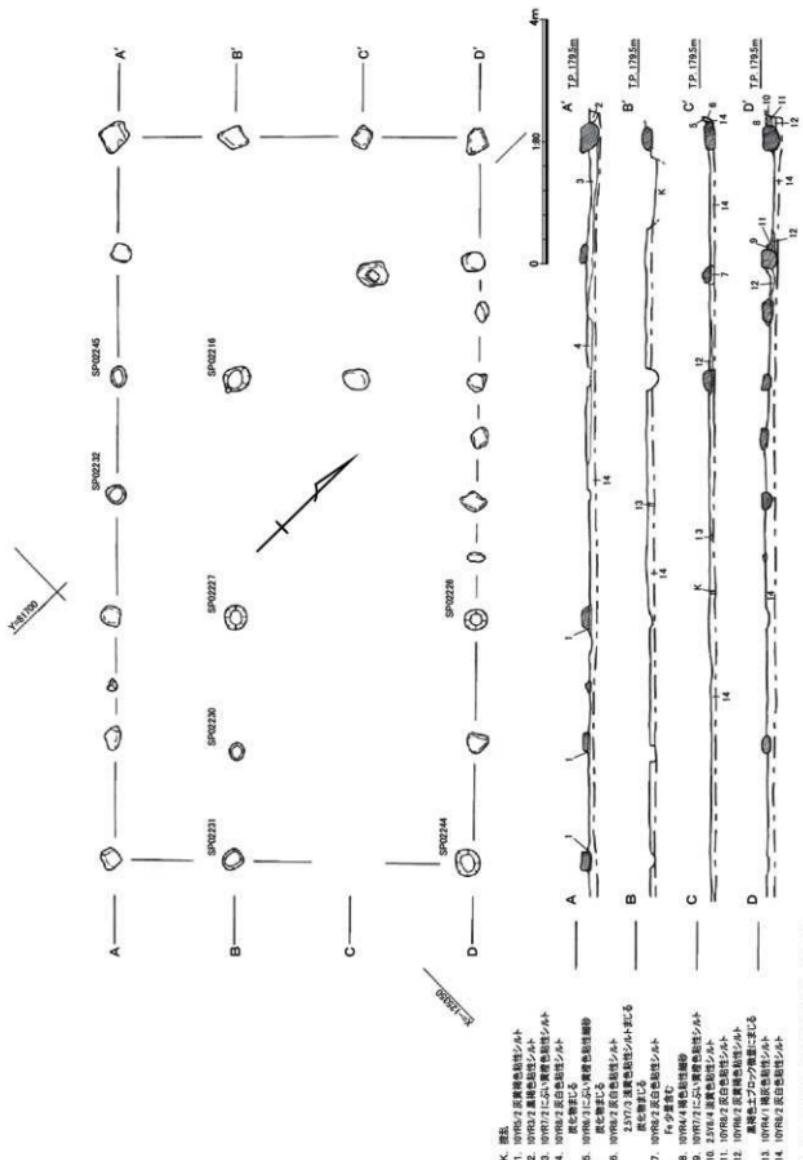


図 27 曲輪2 碓石建物平・断面図

屋内側掘内部で検出した幅1.15m、深さ約0.2mの溝である。墨線に沿う位置で旧表土・地山面を掘削しており、曲輪の平坦面造成後、土星築造前に掘削されていることが判明した。周囲で検出したピット4基のうち3基は、この溝を挟むように北東側から1基、南西側から2基検出した。

また、北西側では溝の側面に長さ約1mの2段の石積みを検出した。下段は直径30cm大の溶結凝灰岩と花崗岩、凝灰質砂岩で、上段は拳大の石を用いており、付近から東播系須恵器捏鉢が出土した。

(7) 下層土壘 土壘の各辺3か所で断ち割りをしたところ、内部に下層土壘が存在することが判明した。

規模 南西土壘は、幅約4m、高さ約0.9mである。傾斜は外側が52度、内側は21度である。北西土壘は、幅約4m、高さ約1mである。傾斜は外側が54度、内側は24度である。北東土壘は幅約4m、高さ約1mである。

このように下層土壘に関しては幅、高さとも同規模であり、統一した規格のもと構築されたことが判明した。

構築方法 下層土壘築造時の平坦面の表土層は、上層土壘築造時に削平を受けている。したがって、すでに存在した下層土壘を利用してさらに盛土をし、上層土壘を構築したことが明らかになった。北西下層土壘は、丘陵の傾斜変換点際の緩い斜面地に、水平になるよう盛土をしていき、外側に土手状に積み内側を埋めていく。最後に黄褐色細砂質土で表層を固めている。

北半では上面に人頭大の河原石ならびに砂岩が散在するが、下層土壘上面を保護するものか、上層土壘構築時に伴うものか判断できなかつた。

この下層土壘に伴う遺構として、北西土壘南半で曲輪内部側に長さ約11mにわたって、最大で高さ約0.8mの3段の石積が確認された。石積の南半は凝灰質砂岩を用いているが、北半は溶結凝灰岩や花崗岩などの河原石を用いている。裏込めはなく、ほぼ垂直な面をなすように積まれている。曲輪内部の空間に対して、土壘が流出しないよう土留めの役割を担っていたと考えられる。対面の外側には石積は存在しないが、西角にかけて幅1m弱の平坦面上に河原石の礫群が広がって存在していた。

北東土壘は、緩い傾斜面に遺構面レベルまで斜めに盛土をしていき、そこから上部は薄く水平に黄褐色・灰黒色シルト質土を盛土する。この上面には薄く炭層が広がるが、屈折部と東南端は比較的厚く堆積する。この土層からは常滑焼窯や回転台土器器皿などが出土している。断ち割り断面では炭層上面は平坦で外側にわずかな高まりしか認められず、土壘としては機能しづらいことから、さらに上層に炭が入る土層までを下層土壘として考えたが、あるいはこの層までが下層土壘で、炭層は焼け跡の片付けの結果であり、さらに盛土して上層土壘としたとも考えられる。縦断面では、地山上に灰褐色土、地山小ブロックのまじる黄褐色土、その上面の炭層の広がりに白灰色シルトの大ブロックがのって、白灰色・灰色・暗褐色のシルト質土、その上にさらに薄く炭層が被る。それより上部は上層土壘に伴う盛土となる。

(8) 第4遺構面

築城前(Ⅰ期)に当たる。土壘の断ち割り調査を行う過程の中で、築城前の旧表土面を検出した。上層面で虎口となる部分において、斜面に直交する方向で石段状に並べられた礫を、北西土壘下では上面が平らな一列の礫を検出している。北西土壘下の礫は大きさ30~60cmほどで、飛び石のように階段状に並ぶ。

遺物は、旧表土層から東播系須恵器捏鉢が出土している。

第3章 発掘調査の成果

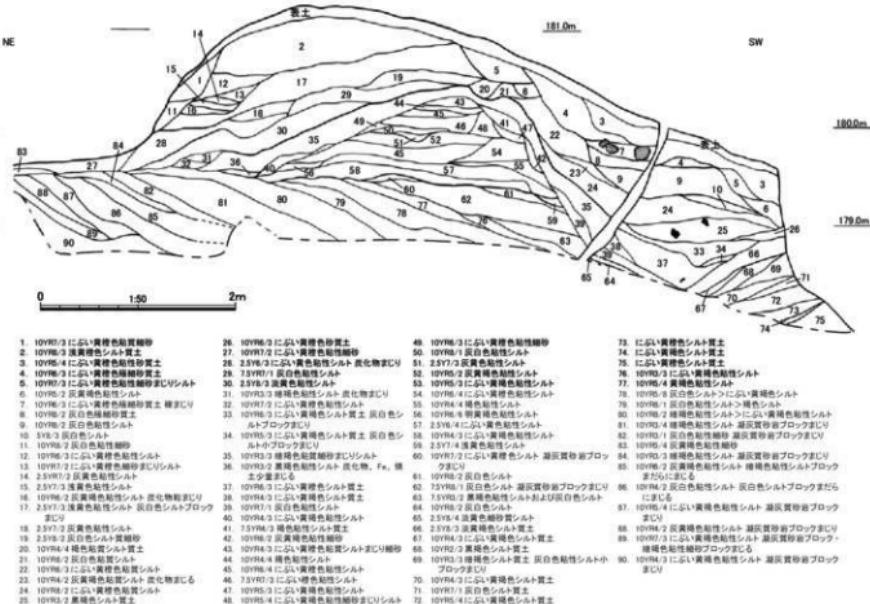


図 28 曲輪2 南西土壌断面図



図 29 曲輪2 北東土壌断面図

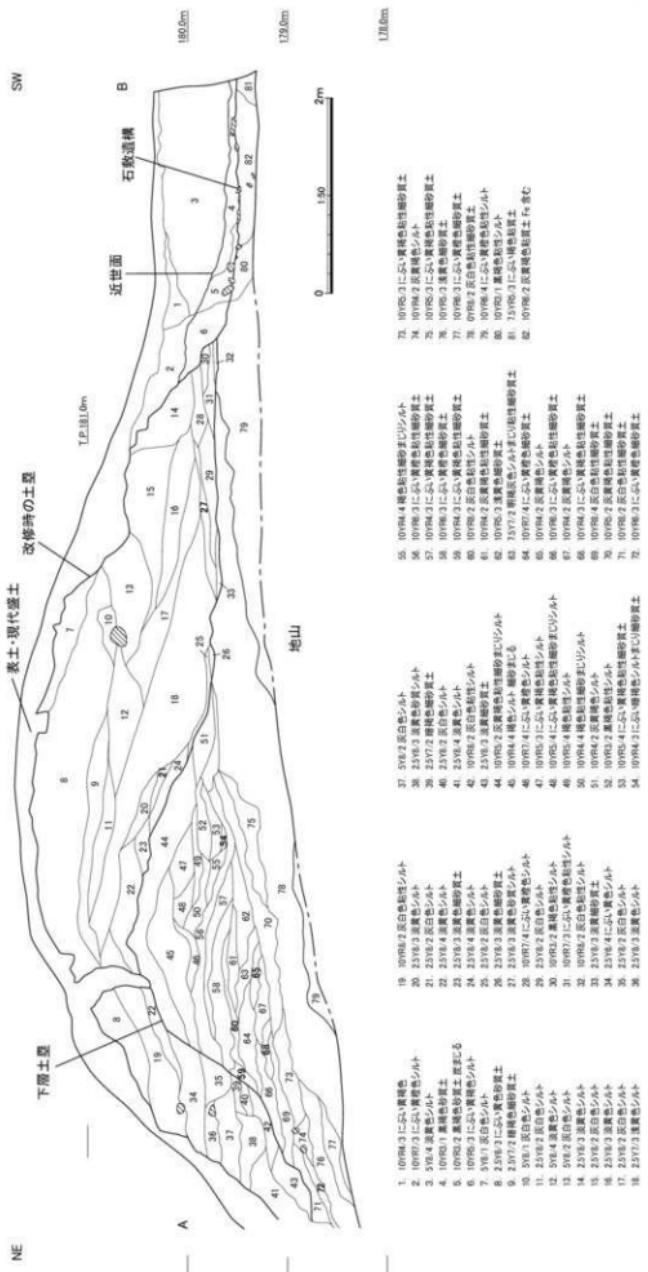
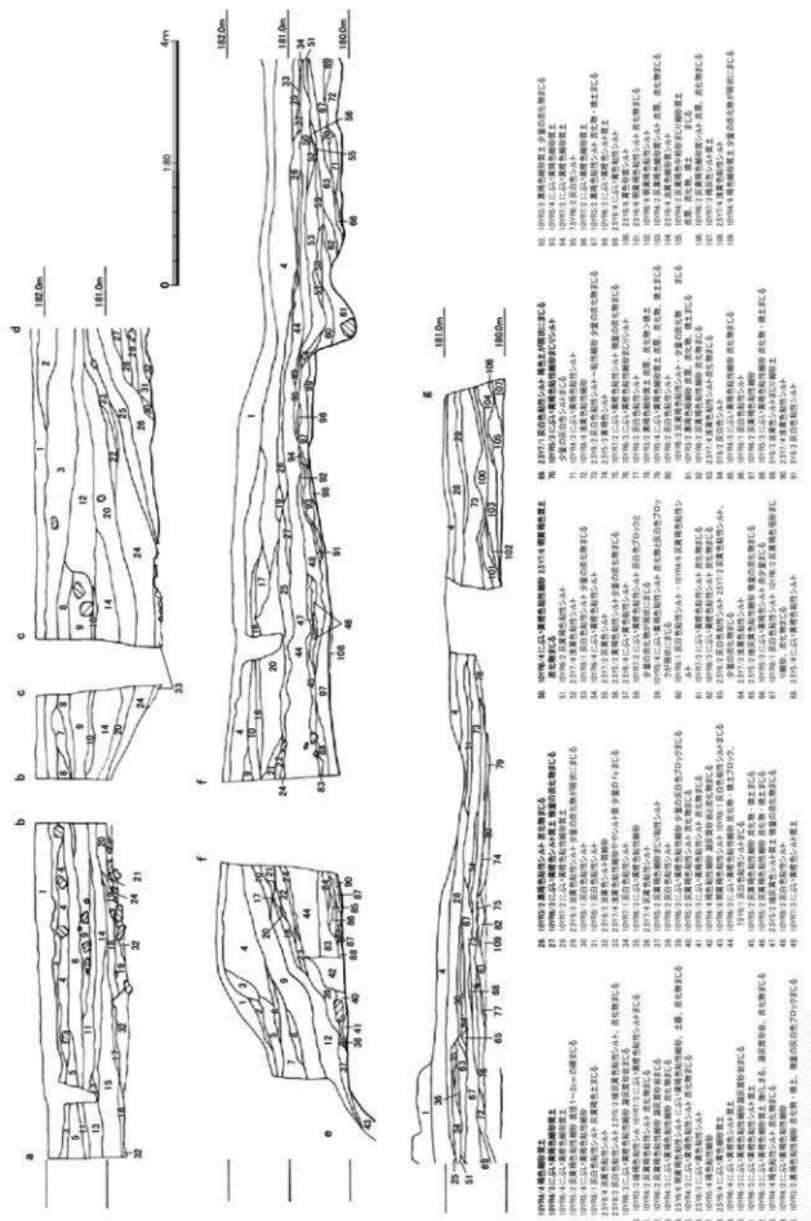


圖 30 曲輪 2 北西土壤剖面圖



北東主張綱断図

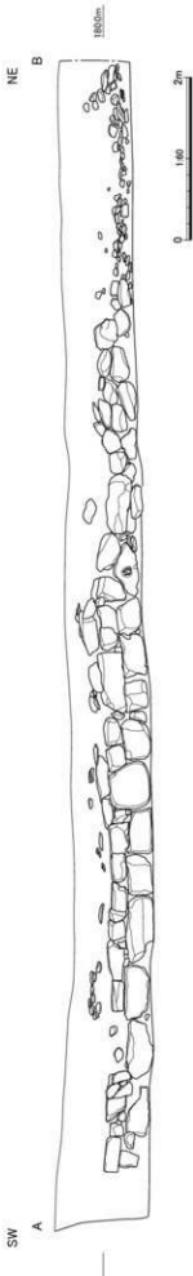


図 32 曲輪2 北西下層土壁(南半) 石積立面図

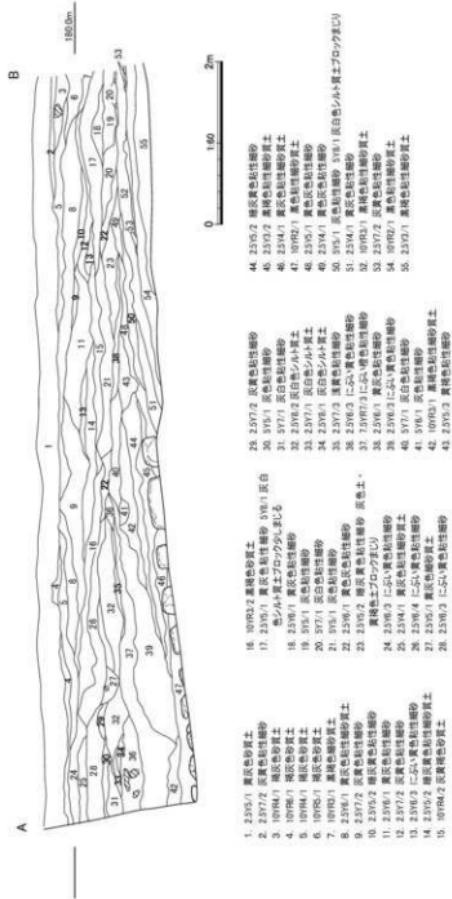


図 33 曲輪2 北西側第4道構面接出石列立面図

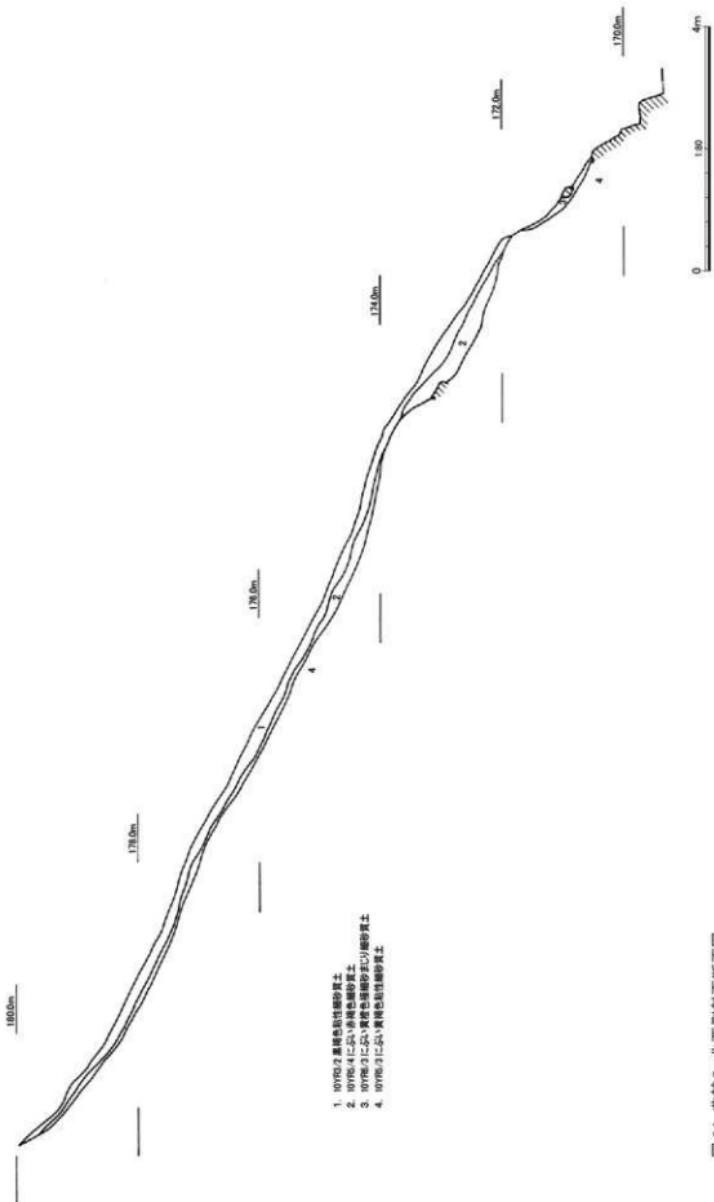


図 34 曲輪2 北西側斜面断面図

第4節 曲輪3

(1) 概要

曲輪3は、曲輪1の南東側、丘陵の東端部に位置する。平坦面の規模は北東一南西方向約18 m、北西一南東方向約24 m、面積は約432 m²である。平面形は方形で、南西部に曲輪1平坦面よりのびる土壘が残存する。南西側の曲輪外部は切岸、南東側は有野川に面する崖面になっている。北西側の曲輪1との間は切岸になっており、曲輪1との比高差は5.5 mである。北東側は從前建物の入り口にあたり階段等の造作で著しく搅乱されており、当初の形状は不明である。

(2) 基本層序

標高は176.5 m前後を測る。上層から表土、整地土、にぶい黄褐色粘質土が堆積し、すぐ直下は凝灰質砂岩の岩盤となる。

(3) 平坦面

大半が現代の住宅建設に伴う削平を受け、表土や現代整地土などを除去すると凝灰質砂岩の岩盤が露出するため遺構面の検出は北西側1/3に限られる。遺構は、東側の堆積土がある部分でピットを3基検出した。西側には高さ1.6 mまで岩盤を削り残し、上部に盛土をした土壘状の高まりが存在する。幅約2m、長さ12 mで約10度の傾斜をもって立ち上がり、中位で約30度に傾斜して曲輪1に接続する。曲輪の北側に曲輪1と繋がる東登城道が存在するが、この土壘状高まりも連絡通路として利用された可能性がある。内側の段はコンクリートが岩盤間に流し込まれ、溝状に打たれているので現代に改変されたものである。平坦部には40～50cm大の円礫が3点ほど存在しており、城の建物基礎などに関する可能性もある。

遺物は、土師器皿、陶器、鉄製品が出土しており、土師器皿は16世紀前半～17世紀前半のものと考えられる。

第5節 曲輪4

(1) 概要

曲輪2の北東側斜面下に位置する腰曲輪である。北西側で曲輪5と、東側で曲輪14とスロープ状になった土壘によって接続する。標高は、中央部で175.0 m前後を測り、曲輪2からは平坦面の中央部同士で約4.5 m低い。平坦面は、北西一南東方向で約27 m、北東一南西方向で約10.5 mを測り、面積は約283.5 m²である。

(2) 基本層序

上層から盛土、表土、褐色砂質土、にぶい黄褐色シルトの順に堆積する。南西側斜面は曲輪2の土壘からの流出土や、後世の投棄物等が堆積しており、それらを除去すると岩盤を検出した。流出土中からは、6.3 m×2.2 m程度の範囲の炭だまりを確認した。

(3) 平坦面

南西側斜面の岩盤を削り出すことで曲輪の平坦面を造り出したものと考えられる。平坦面上では土坑1基、ピット3基を検出した。曲輪5と接続する斜面裾では礫が直線に並び、斜面部では石を3段積み階段状を呈する。南西側斜面下では、後世の流出土と投棄物等を除去した岩盤直上で16世紀代の土師器灯明皿が出土した。このため、岩盤を切り出した時期は16世紀以前のことと考えられる。このほか、平坦面の褐色砂質土中およびにぶい黄褐色シルト上面より土師器、須恵器、陶器、瓦、鉈、釘、鉄砲玉が出土した。

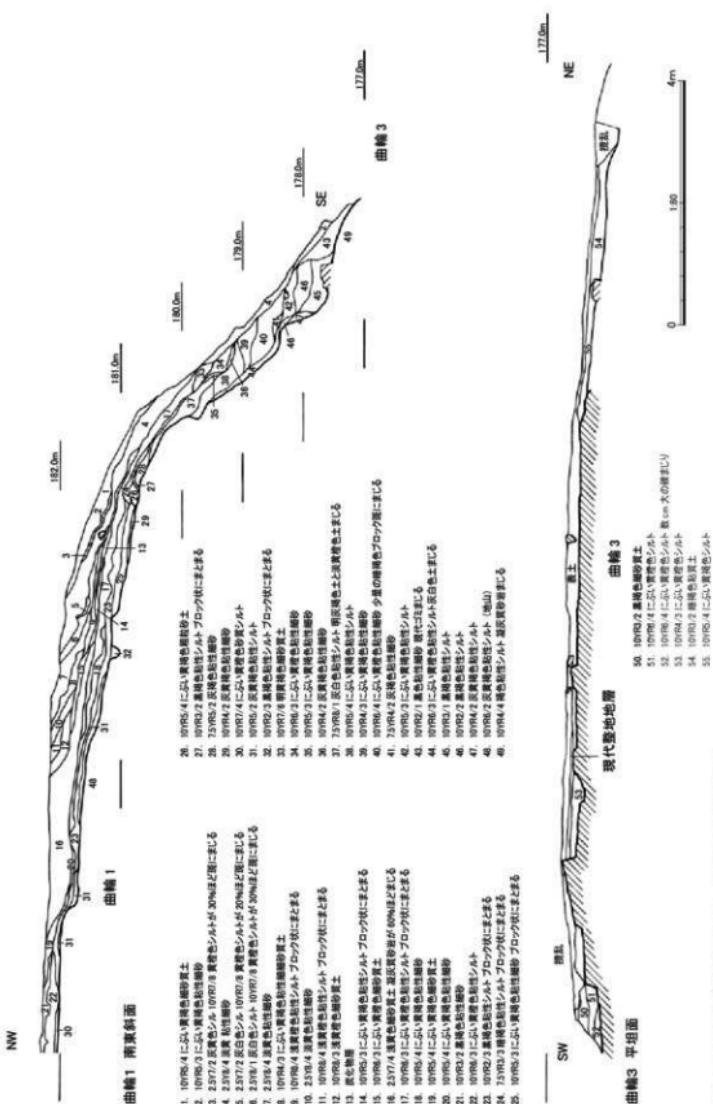


図35 曲輪3南東斜面断面図・曲輪3平坦面断面図

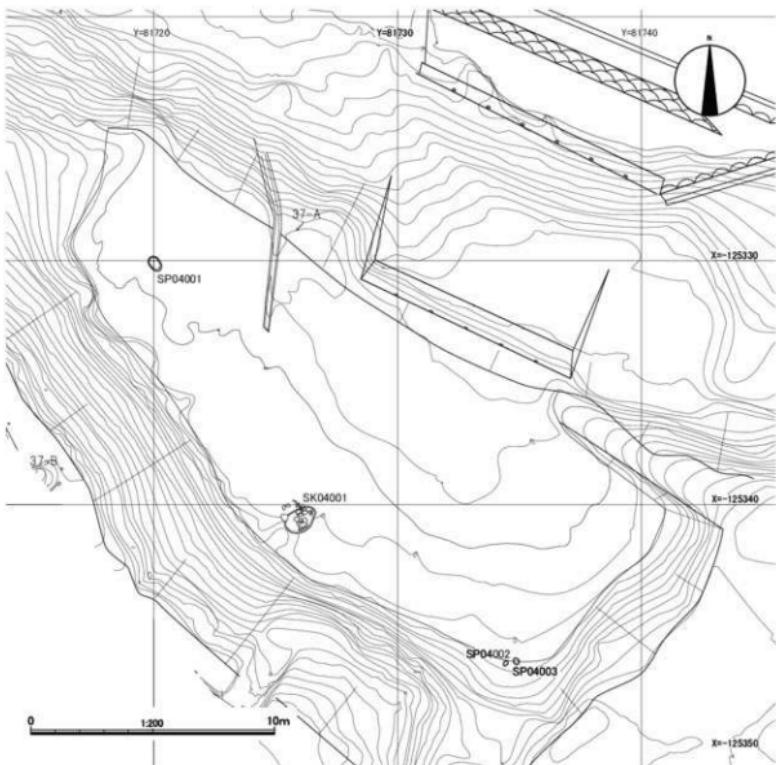


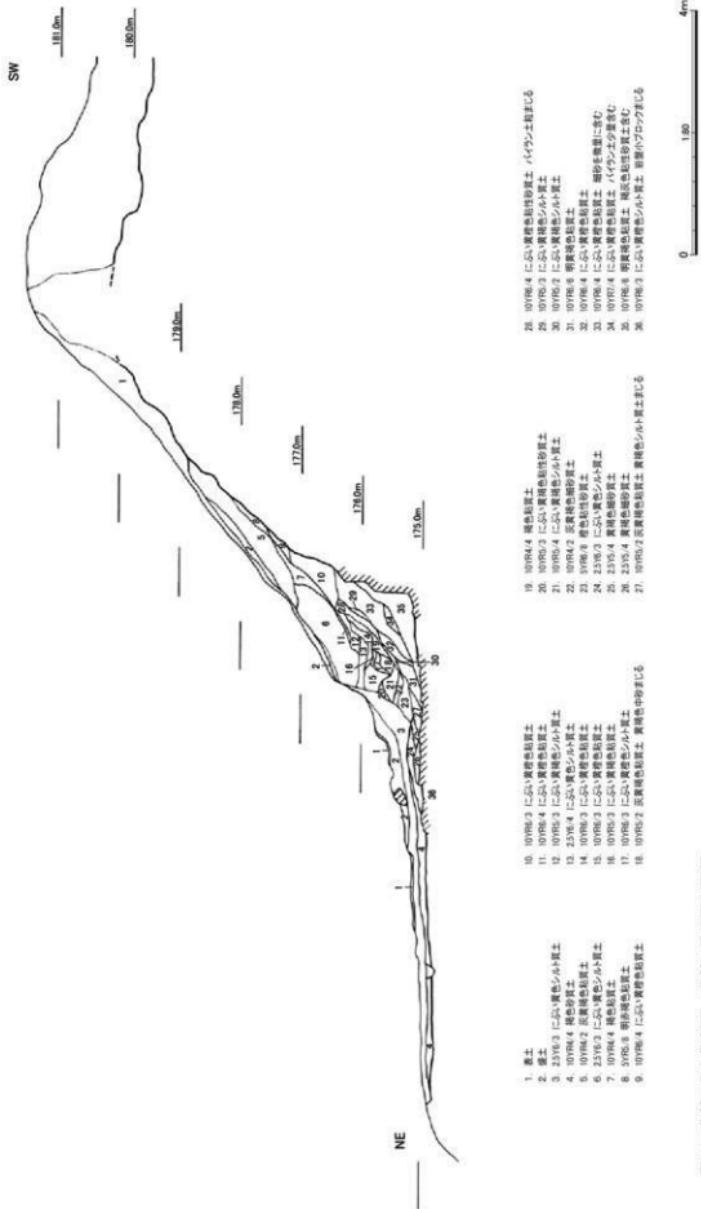
図 36 曲輪4 平面図

SK04001 平坦面の中央部より南東寄りで検出した直径 1.4 m、深さ 0.15 m の土坑である。埋土は、黒褐色粘質土、にぶい黄褐色粘質土の順に堆積する。埋土中には炭化物を多量含み、土坑内部には河原石が集積していた。本遺構より土師器が出土した。

SP04001 平坦面の中央部より西寄りで検出した直径 0.3 m、深さ 0.06 m のピットである。埋土は、炭化物を多量含んだ黒褐色粘質土、灰黄褐色粘質土の順に堆積する。

SP04002 平坦面の南東側で検出した直径 0.2 m、深さ 0.17 m のピットである。閉塞土塁の転落石下より検出された。埋土は、炭化物を少量含んだ灰黄褐色粘質土である。

SP04003 平坦面の南東側で検出した直径 0.28 m、深さ 0.16 m のピットである。閉塞土塁の転落石下より検出された。埋土は、炭化物を少量含んだ灰黄褐色粘質土である。SP04002 と SP04003 は堀切に近接する地点で検出しており、堀切や閉塞土塁と何らかの関わりがあった可能性があるが、詳細は不明である。



第6節 曲輪5

(1) 概要

曲輪2の北側、曲輪4の西側で方形に張り出す腰曲輪である。平坦面は南北3.0m、東西4.6mを測り、面積は約18.4m²である。

南東辺の裾には凝灰質砂岩の石列があり、これを基底石として上部に盛土を行って整形されていたことがうかがえる。東隅下半部には階段状に3段石材が並び、曲輪4から登れるようになっているが、北西へ北側斜面および曲輪2側斜面は急傾斜であり、曲輪4以外との行き来は困難である。また、北東辺は崩落して本来の曲輪の形状を失っている可能性がある。

(2) 基本層序

標高は約177.6m前後を測り、曲輪4との比高差は約2mである。表土、黒褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土が堆積している。

(3) 平坦面

曲輪2土壁上から転落したと思われる石が見られるのみで、遺構は検出されておらず、遺物も出土していない。ここは北側からの攻撃、あるいは曲輪4への侵入を防ぐ防御の基点として機能していたと考えられる。

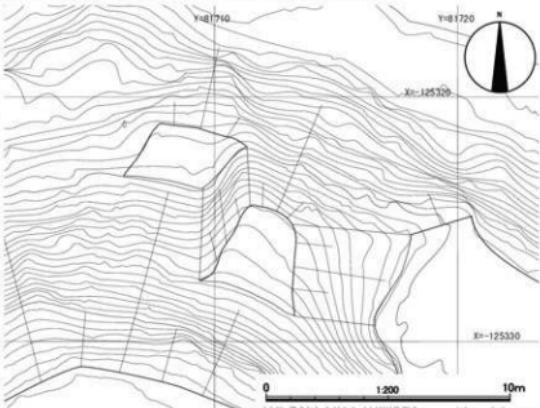


図38 曲輪5 平面図

第7節 曲輪6

(1) 概要

曲輪2北西辺斜面の北側で、凝灰質砂岩岩盤と地山の境の高さに位置する腰曲輪である。長さ約20m、最大幅約3.5mで北東—南西方向に長い。

(2) 基本層序

標高173.0m前後を測り、曲輪2第1遺構面との比高差は約6mである。表土、にぶい黄褐色砂質土、明黄褐色砂質土が堆積している。

(3) 平坦面

斜面地であるため、平坦部北西側の岩盤上に土留めとして凝灰質砂岩を積み上げて盛土をし、平坦面を造成している。曲輪6の下方斜面では凝灰質砂岩の岩盤が切岸状に露出し、そのまま西へとのびる。南西側で、土坑1基を検出した。遺物は、表土および流土から15世紀半ばと思われる土師器鍋の口縁部の他、土師器や陶器の小片が出土している。

SK06001 曲輪6の南西側で検出した長さ約3.0m、幅約1.8m、深さ約0.45mの土坑である。曲輪2北西辺斜面との傾斜変換点にあり、土坑上端部と底部の高低差は約1.5mである。埋土は、斜面からの流入土、炭化物および土器がまじる暗灰黄色砂質シルト、灰白色砂質シルト、灰黄色シルト、にぶい黄橙色シルト、炭化物および土器がまじるにぶい黄橙色シルト質細砂、浅黄色

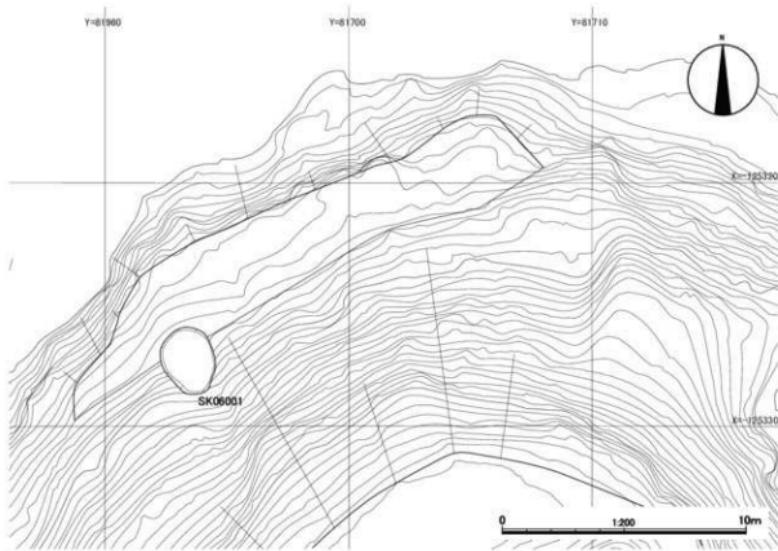


図 39 曲輪6 平面図

シルト質細砂質土が堆積する。

遺物は、土師器、陶器が出土した。16世紀第3四半期と思われる土師器皿が含まれているが、小片であるため詳細は不明である。

第8節 曲輪7・曲輪8・曲輪9

曲輪2の南西斜面に位置する腰曲輪である。

(1) 曲輪7

概要 曲輪2の西側に位置する長さ約19m、幅約9mの腰曲輪である。標高は172.5m前後を測る。曲輪2側は岩盤を削り出し、西側に盛土をすることで平坦面を形成している。旧地形の斜面部に灰黒色粘性細砂質土（流土）が堆積し、その上に褐灰色粘性細砂質土で盛土を行っている。北側は岩盤が切岸状になっており、南側は現代の通路で削平されている。北西側に拡張時の土留めとして用いられた凝灰質砂岩の石列を確認した。

平坦面 遺構は、土坑2基とピット1基を検出した。

SK07002 岩盤を穿って掘削されている。直径1.14m、深さ約0.55m、埋土は灰黄褐色～灰白色粘性細砂・シルトである。遺物は、陶器壺・甕、丹波焼擂鉢、土師器皿・鍋、青磁が出土している。

(2) 曲輪8

曲輪2の南西側、曲輪9上部の斜面に曲輪と思われる平坦部を調査開始時に確認し、曲輪8としたが調査の結果、曲輪は存在しないことが判明した。曲輪と思われた部分は、曲輪2の土塁及び斜面部から流入した堆積土だった。

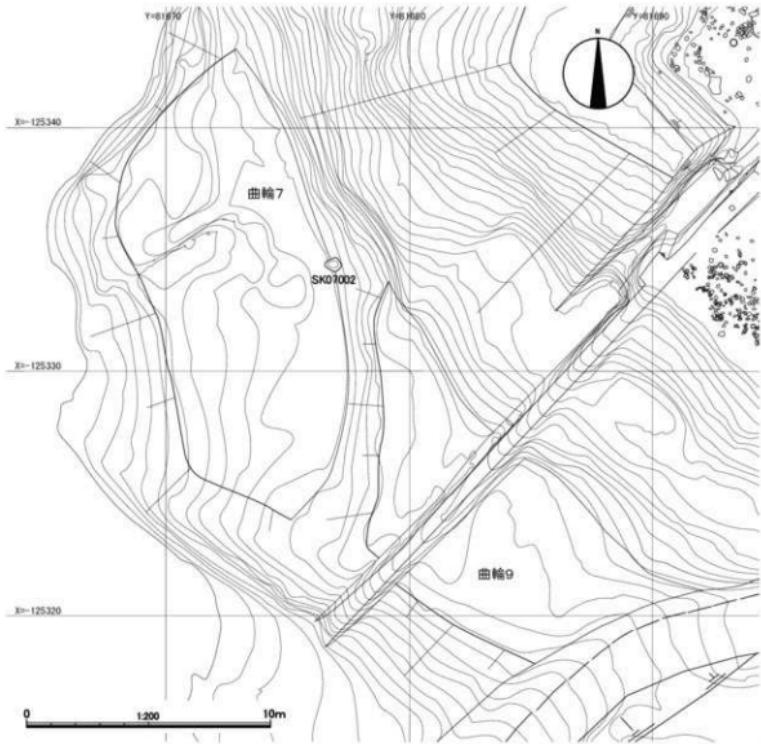


図 40 曲輪7・9 平面図

(3) 曲輪9

曲輪2の南西側に位置する長さ約14m、最大幅約4mの細長い曲輪である。標高は174.0m前後を測る。

現代通路で分断されているが、本来は通路南東側の平坦部と一体のものと思われる。遺物は土師器、須恵器が出土している。

第9節 曲輪10・11

丘陵の南側斜面に位置する腰曲輪である。しかし、丘陵南側は現代の削平や造成により原形を留めていないことに留意しなければならない。

(1) 曲輪10

曲輪2の南東部に位置する長さ6.0m、幅約3.5mの平坦面を持つ曲輪である。しかし、曲輪の形状が近世以降の削平や造成により原形を留めていない、または丘陵の上部より滑った塊の可能性が高い。

(2) 曲輪 11

曲輪1の南西部に位置する長さ 16.0 m、幅 3.0 m の曲輪である。標高は 178.0 m 前後を測る。曲輪1斜面側の平坦部は、長さ約 6.0 m、幅約 1.5 m の現代の搅乱で削平されていた。しかし、曲輪 10 同様に造成により原形を留めていない、または丘陵の上部より滑った塊の可能性が高い。

第 10 節 曲輪 14

(1) 概要

曲輪1の北側で曲輪4との間に位置する平面三角形の腰曲輪である。北西側斜面下に曲輪15および16が取り付く。

(2) 基本層序

平坦面の標高は 178.5 m を測り、曲輪1土壘上面との比高差は約 5.5 m で、曲輪4との比高差は約 3 m である。表土、にぶい黄橙色粘性砂質土の順に堆積し、岩盤にいたる。

(3) 平坦面

長さ約 22 m、最大幅約 7.5 m、面積は約 180 m²を測る。調査前の状況では、北側縁辺部に横堀状の溝と土壘状の高まりが観察されていた。調査の結果、縁辺部にはわずかに土壘状の高まりが確認されたが、土壘状の溝は城郭とは関係のない後世のもの（耕作に伴うものか）と判明した。遺物は土師器、陶器、瓦が出土している。

(4) 横堀

曲輪1側斜面裾にて検出した堀である。堀底幅約 2~4 m、深さ 0.8 m の断面扁平な逆台形で、

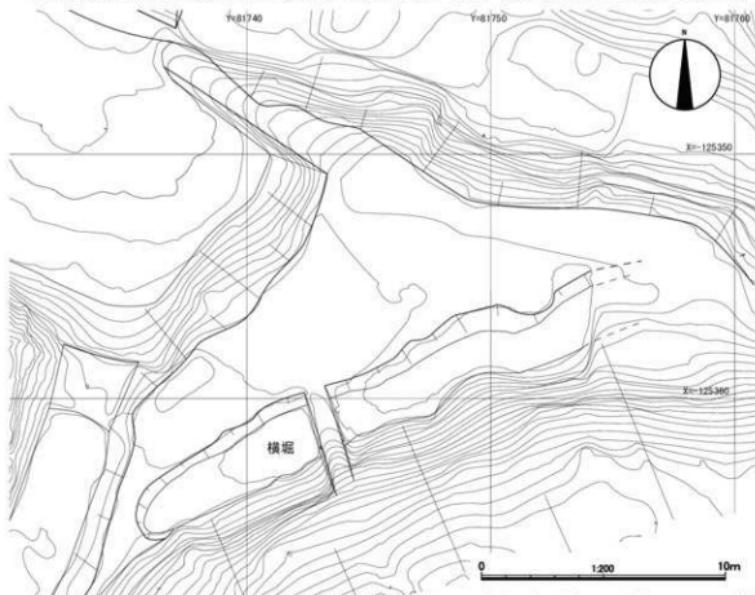


図 41 曲輪 14 平面図

後述する堀切と同様、底部は岩盤を掘削して成形している。埋土は横堀が埋没するレベルまでは黒褐色土が堆積し、その上は斜面からの崩落土が堆積する。黒褐色土から陶器が出土している。

南西端は堀切と接続するが、境目部分は岩盤を削り残し段差を設けている。東端はそのまま斜面部へ貫通しており、特に障壁等は確認されなかった。

遺物は、平坦部表土層からは陶器擂鉢、陶器甕が、曲輪4側斜面肩部からは丸瓦、曲輪1側の斜面部出土より土師器皿、丹波焼擂鉢などが出土している。

第11節 その他の曲輪

丘陵の東側斜面と北側斜面に位置する腰曲輪である。

(1) 曲輪12・13

曲輪3の北部に存在する曲輪である。航空測量から曲輪12は長さ10m、幅3m、曲輪13は長さ4m、幅2mほどの曲輪と考えられるが、急傾斜の場所であり、安全上の理由から調査は実施していない。

(2) 曲輪15

曲輪14の北部に位置する長さ約30m、最大幅4mの曲輪である。標高174.5m前後を測る。一部、平坦部が狭くなっている部分がある。

(3) 曲輪16

曲輪15の北部に位置する長さ11.0m、幅2.5mの曲輪である。標高171.2m前後を測る。

第12節 堀切・閉塞土壠

(1) 堀切

曲輪1と曲輪2の間に造られている。調査前は現代の住宅への進入路および人工池として利用され窪地となっていたが、当初から堀切の存在が想定されていた。ほとんど埋没した状態であったが、調査の結果、規模は長さ約39.0m、曲輪2平坦部肩部レベルでの幅は4.4m、堀底幅は2.0～3.1mで、断面形は逆台形である。当初はV字形をしていたかは不明である。曲輪2の土壠上端と堀底との比高差は約4m、また曲輪1の土壠上端との比高差は6.8mである。堀底付近での斜面の傾斜角は60～80度ほどとなる。

堆積土は、北半では曲輪1側からの流出土が多く、南半では両側の曲輪から交互に土砂が堆積した状況が確認できた。土量的にも曲輪2の土壠を一気に崩して埋めた状況ではなかった。

最下層の30cmほどは灰白色粘性細砂～灰黄色粘性シルトが自然堆積する。下層は地山の白灰色シルト質土や暗灰色シルト質土、黄褐色シルト質土などの小ブロックがまじり、人為的に埋められていた。縦断面で見るとほぼ一定のレベルまで埋められており、後述の閉塞土壠検出レベルとも一致する。この下層上面で一度表土層が形成され、以後の上層は近代以降の盛土である。

下部は岩盤の凝灰質砂岩を削り出して平坦であるが、底のレベルは北端で標高177.2m、南端で標高176.0mと南側へ緩く傾斜している。これは凝灰質砂岩の層理の傾斜に左右されている。

堀切南端は曲輪2側の地山を削り残しているが土橋状に曲輪1とは繋がらず、曲輪1側に2mほどの空隙がある。この部分の底部には細い溝があり、堀底の排水を担っていたと思われる。ただ、降雨後も岩盤にある隙間に雨水がしみこみ、満水状態になることはなかった。南端部分の帶水のみ対処するものであろう。

南半には曲輪1側斜面裾部に幅0.8mほどの通路状施設が存在する。数十cmの大の平らな礎

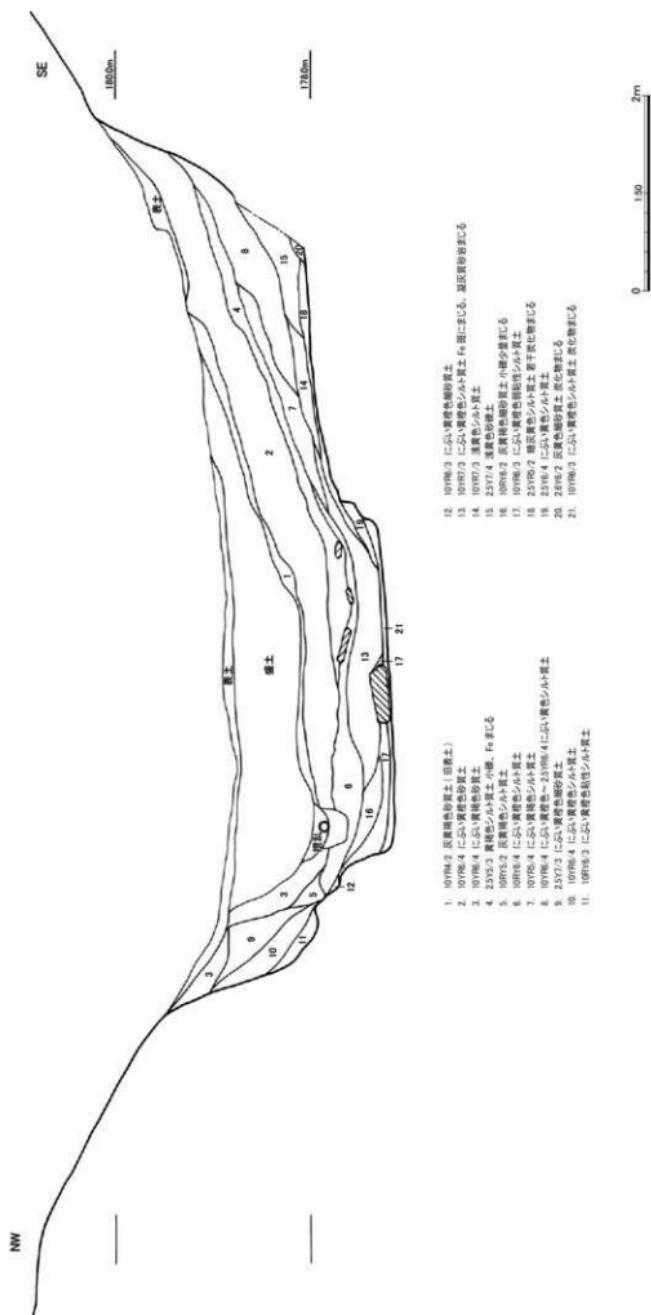


図 42 細切北東側断面図

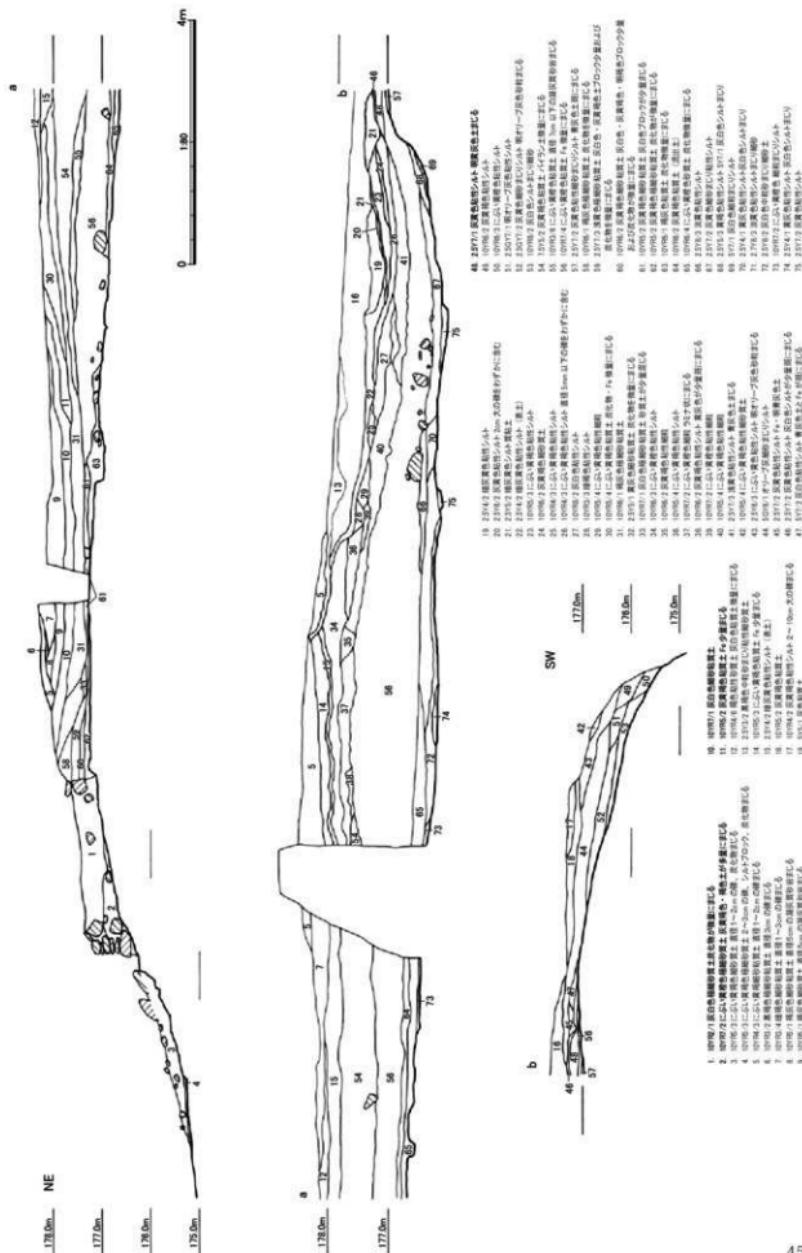


图 43 堀切縱斷圖

NW

SE

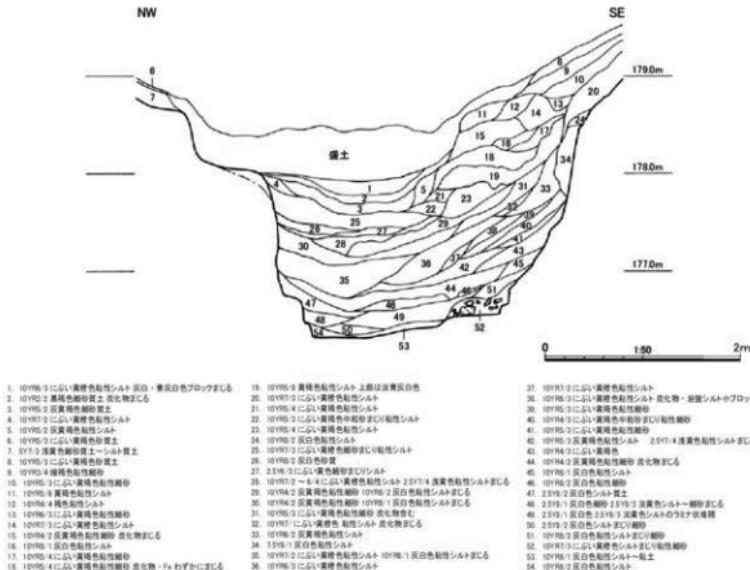


図 44 堀切南西側断面図

が散在し、その間に拳大～人頭大の角礫・円礫を詰めている。礫の上面は多少凹凸があるが、先述の排水溝により水没しないレベルとなる。この堀切は敵の侵入を防ぐだけではなく、城内部を行き来する通路としても使われたと考えられる。遺物は中世の土師器や陶器が出土した。

(2) 閉塞土塁

堀切北端を塞ぐように両側面に石を積んだ盛土である。築かれている位置や規模から、土橋ではなく障壁の土塁、いわゆる閉塞土塁と考えられる。縦断面の観察では、堀切埋設土との関係から、少なくとも堀切が開口していた段階には存在したことがうかがえる。堀底からの残存高は最大 0.7 m、幅 3.0 m、上端の長さ 4.5 m である。石積みの石材は、堀切外側は 30 ～ 50cm 大とやや大ぶりの平たい凝灰質砂岩、堀切内側は大きさ 20cm ほどの角礫を使用しており、堀切外側に対しても強固に築こうとしていた意図がうかがえる。

石積みの下端の岩盤面は特にこの閉塞土塁を意識した加工はされておらず、素直に曲輪 4 に抜けている。石積み下端と堀切底間には若干の堆積土が認められた。

上部は破壊され、その石材は曲輪 4 側に転落していた。曲輪 14 側斜面には円礫群があり、このレベルまでが閉塞土塁の高さであると仮定すると、本来の土塁の頂部は曲輪 14 の平坦部より若干低い位置であったと推定される。また、この高さであれば曲輪 2 側の土塁に取り付くには低すぎ、曲輪 2 側に階段状あるいはステージ状の施設もないため土橋としては機能しない。

この閉塞土塁を築くことにより、緩い傾斜で堀切と曲輪 4 が接続していたものが、高さ 2m 以上で、特に上部は垂直な障壁を持つことになり、堀切を通しての侵入を拒む施設となる。閉塞土塁がなければ、比高差は 1m 程度で段差の傾斜もゆるいため、容易に侵入が可能であったと思われる。

遺物は、転落石間から備前焼や丹波焼など中世陶器が出土し、盛土内からは土師器、丹波焼および瀬戸・美濃焼の中世陶器が出土している。

第4章 遺物

第1節 概要

松原城跡からは、古墳時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代以降の遺物が出土した。土器は土師器、須恵器、瓦質土器、国産陶磁器、輸入磁器がある。石製品・石造品では基石、石臼、一石五輪塔、木製品では漆椀、金属製品では小刀、鉄鎌、鉈、釘、鉄砲玉、銭貨などである。そのほか、稻荷神社関係の近世以降の瓦、土人形なども出土している。

出土遺物量は、試掘調査分も含めて 28 t コンテナ 23 箱分であり、調査面積に比して少量である。遺物は小片で反転復元したものがほとんどであり、全体が把握できる資料は少ない。

曲輪2の遺物は、調査過程から上層・下層で分類した。上層遺物には下層遺物と接合する資料もあり、搅乱を受けて混在している。接合したものは下層に含めた。また、土壘と斜面部出土、あるいは下部の曲輪出土と接合した資料は、出土状況を勘案して基本的に原位置に近い箇所に含めた。

以下、それぞれの種別・器種ごとに概略を示してから、出土地区ごとの遺物について記述を進める。なお、古墳時代の遺物に関しては、城郭とは直接的な関係は認められないため別章にて詳述する。

(1) 土師器

土師器には皿、鍋、擂鉢がある。

皿：土師器皿は大別して手づくねによるものと回転台成形によるものがあり、それぞれをさらに形態で細別した。皿 A～D 類は手づくね土師器で、色調は淡黄色がかつたものが多い。皿 E・F 類は回転台土師器で、底部の切り離しは回転糸切り、色調は乳白色～明黃白色である。

皿 A 類：底部と体部の境界が不明瞭で、底部は丸みを持つ。

皿 B 類：体部は短く内湾しながら立ち上がる。

皿 C 類：底部中央が上方へ押し上げられている。粗雑なつくりである。器高が低く浅い形状のものもある。

皿 D 類：体部は底部から直線的に開き浅い器形で、口縁部はやや外反する。薄手のつくりである。比較的法量の大きい資料が多い。口縁部がやや肥厚するものや器壁が若干厚い資料も含まれる。

皿 E 類：体部は逆ハの字に外方に開き、やや突出した底部をもつ。底部も含めて全体的に器壁は薄い。総じて精良な胎土であり、明黃白色に発色する。やや器壁が厚い個体もある。

皿 F 類：平らな底部から短く立ち上がる体部を持つ。

口縁部に灯芯痕のある灯明皿は、8個体確認した。いずれも手づくね土師器である。

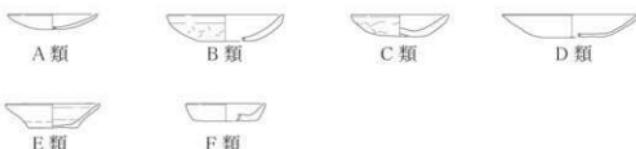


図 45 土師器皿分類

その他耳皿 118 が曲輪2の SP02124 から出土している。

鍋：煮炊具は鍋が出土している。口縁部が「く」字状を呈するもの、体部から口縁部にかけて内湾し口縁部外面に突帯をもつもの、体部がまっすぐに立ち上がるものの3形態がある。口縁端部外縁が三角形に突出するものと、口縁端部外縁が丸く膨らむものがある。口縁部外面に突帯をもつものは、突出度と断面形により細別も可能である。

擂鉢：擂鉢は5個体出土している。口縁部直下に凸帯を巡らす 39,283 と、段になる 40,41,227 がある。

(2) 須恵器

須恵器は中世に属するものとして壺、甕、椀、捏鉢が出土している。

壺：底部片1点を図示した。124 は外面にヘラ削りを施す。

甕：胴部片4点を図示した。いずれも、外面に綾杉文タタキを施し、内面はナデ消しを行う。

椀：東播系須恵器椀5点を図示した。いずれも体部はまっすぐにのびる。口縁部は、42,141,140,171 がそのまま丸くおさめるのに対し、170 がやや外反する。42 は小型である。

捏鉢：東播系須恵器捏鉢3点を図示した。231 と 232 は内湾して立ち上がり、口縁端部に強く面取りを行い、上下に拡張する。233 は体部はやや外反して立ち上がり、口縁端部は上部のみ拡張する。

(3) 瓦質土器

瓦質土器は羽釜と鉢が出土している。

羽釜：125 は曲輪2から出土した。口縁端部・鍔端部は残存しないが、鍔部分は水平に伸び、口縁部は内傾する。28 はミニチュアで曲輪1から出土した。

鉢：方形浅鉢形（26）と浅鉢形（284）があり、26 は曲輪1東登城道から、284 は曲輪14から出土している。

(4) 陶器

陶器は丹波焼の壺・甕・擂鉢、備前焼の甕・擂鉢・徳利、常滑焼の甕、瀬戸・美濃焼の皿・椀などが出土している。

丹波焼

壺：3個体を図示した。62 が曲輪1から、103 と 143 が曲輪2から出土している。

甕：7個体を図示した。14,15 は器形と口縁部形態から近世後半の資料と思われる。63,285,250 は水平方向に口縁部を折り曲げるタイプで、口縁部内面に沈線が巡る。

擂鉢：64 点を図示した。完形に残る資料は少ない。分類にあたっては底部の残存率が悪く見込みでの分割線の状況が不明なため、口縁部形態を重視した。

擂鉢 A 類：器壁が薄く口縁端部は丸みをもつ。

擂鉢 B 類：口縁端部外側に面を持つが端面は撫でない。

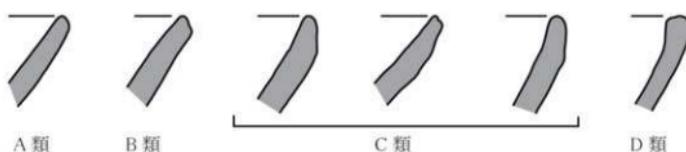


図 46 丹波焼擂鉢分類図

擂鉢 C 類：口縁部をつまみあげて上方にのびる。その際、口縁部外面を強く撫でて先端部が尖る資料や、沈線を有する端面を持つ資料もある。

擂鉢 D 類：口縁端部は内側に肥厚し若干玉縁状を呈する。スリ目はいずれもヘラ描き1本引きで、5個体の口縁部内面の片口付近に窯印が観察された。

備前焼

備前焼は、壺、小壺、甕、擂鉢、徳利、水指（丹波焼の可能性があり）が出土した。

壺：底部片2点を図示した。堀切からの出土である。

小壺：1点のみで、曲輪1から出土している。

甕：5点図示した。264,265,286の3点はいずれも口縁端部を折り曲げて玉縁状としたもので、15世紀後半～16世紀前半に相当する。264,265は曲輪4から、286は曲輪14からの出土である。また、図示はしていないが曲輪2～4の残土中より甕片を採集しており、この資料も間壁編年（間壁1991）IV期で、15世紀後半～16世紀前半と思われる。

擂鉢：8点を図示した。口縁部の端面が内傾し下端がわずかに突出する。

口縁帯が直に立ち上がり、外面上には緩い凹線あるいは2条の凹線を施すもので、16世紀前半に位置づけられる。77は曲輪1南斜面から、288は曲輪14から、291は堀切から出土している。その他は曲輪2からの出土である。

徳利：曲輪2から2点出土している。いずれも頸部内面に絞り痕が明瞭に残る。

常滑焼

大甕が曲輪2下層土壘から出土した。破片は多くあるが接合せず、口縁部と押印のある肩部の計4点を図化した。

瀬戸・美濃焼

皿、天目茶碗、小壺が出土している。

皿：丸皿や印花皿が出土している。

天目茶碗：6点出土している。すべて曲輪1からの出土である。体部は直線的に開き、口唇部はS字状となる。高台は内反り高台である。

小壺：扁平気味の体部と短く外反する口縁部を持つ。

(5) 輸入磁器

青磁皿：2点を図示した。136が曲輪2から、274が曲輪4から出土している。136は、体部が腰折れし、口縁部に稜花を施した外反皿である。15世紀前葉～後葉と考えられる。274は体部が型押しにより花弁状になり、口縁部は内湾している。

青磁碗：7点を図示した。曲輪1から21,84,85が、曲輪2から123,135,249が、閉塞土壘から296が出土している。ほぼすべての外面に連弁文が施されており、曲輪2出土の123だけは内面にヘラ彫りによる施文と、福字印を施す。

84,85,296は、口縁部直下に花弁の先端を波状に描き、花弁は放射状に底部へと線をのばしている。上田分類（上田1982）B～III類に属すると考えられる。

123,249は、連弁の幅が狭く、上田分類B～IV類に属すると考えられ、15世紀後葉～16世紀前葉と思われる。

青磁壺：1点を図示した。曲輪1東登城道から出土している。

白磁皿：13点を図示した。端反皿と菊花皿と小皿が出土している。159,160,161が曲輪2から、272,273が曲輪4から、その他は曲輪1から出土している。159は菊花皿で、小野分類（小

野 1985) D 群に属し、時期は 16 世紀中葉から 17 世紀と思われる。160 は小皿で、他の皿と比較して器厚は厚い。159 以外は端反皿で、小野分類 C 群に属し、15 世紀後葉から 16 世紀後葉と考えられる。

青花皿 : 15 点を図示した。162,165 が曲輪2から、その他は曲輪1から出土した。15 点のうち、32,91,92,165 は小野分類 B 群、87,90,96,97 は小野分類 C 群で、その他は小野分類 E 群である。94 は内湾する胴部を持つ、つぼ皿の口縁部であると考える。

青花碗 : 9点を図示した。99 は底部の形状が平らの碗である。6,99,164 は内底の見込み部が隆起するいわゆる饅頭心碗で、16 世紀中葉から後葉に盛期があるとされる小野分類 E 群である。

88,101,163 は内底の見込みがくぼむ蓮子碗で、小野分類 C 群III類に属する。

(6) その他の遺物

漆楓

曲輪2から1点出土しているが、細片に崩れて図化することはできなかった。朱による文様が認められた。

石製品・石造品

硯 : 曲輪2から1点出土している。

墓石 : 曲輪1・2から合計4点出土している。

その他 : 図化には至らなかったが、曲輪1から一石五輪塔や石臼、砥石が曲輪2から出土した。

近世以降の遺物

曲輪1に存在した稻荷神社関連の瓦、狛の土人形を含む遺物や近世の遺物、さらに戦時下の統制陶器が出土した。統制磁器は、底部高台内に緑色釉で「岐 394」と表示する。

第2節 曲輪1出土遺物（図 47～49）

(1) 遺構・東登城道・土壘（図 47）

SX01003 1は器高が低く浅いが土師器皿 C 類に属する。

SD01001 2は土師器皿 B 類で、口縁部内面にわずかに煤化痕が認められる。

SD01004 3は土師器皿の底部のみである。回転糸切りで切り離したのち、ナデ消す。

4は瀬戸・美濃焼皿である。5は陶器楓で、高台以外は緑灰色の釉が施されており、瀬戸・美濃系の可能性がある。

6の青花碗は、見込みが盛り上がる饅頭心で、見込みには花草をモチーフにしたと思われる文様が描かれ、高台内面にはノッキング痕が残る。

SD01005 7は丹波焼鉢の体部である。

SD01016 土師器皿、丹波焼甕、瀬戸・美濃焼天目茶碗、白磁皿、青花碗などが出土地で出土している。

9は土師器皿で、磨滅が著しく体部外面にユビオサエが確認できるのみである。

10,11 は瀬戸・美濃焼皿である。11 の疊付けは露胎している。

8は外側には波濤文帯と芭蕉文を描いた青花皿である。13 は青花碗である。外側には牡丹と思われる草花文が描かれている。17 は染付と考えられる小碗である。草花をモチーフにした文様が外側に施されている。

14,15 は同一個体と思われる丹波焼甕である。14 の口縁部は三角形に肥厚し、上端は水平に切られ3条の沈線が巡る。肩部はカキ目が著しい。

16 は、瀬戸・美濃焼天目茶碗である。高台周辺の鉄錆は薄い。高台際で欠損している。

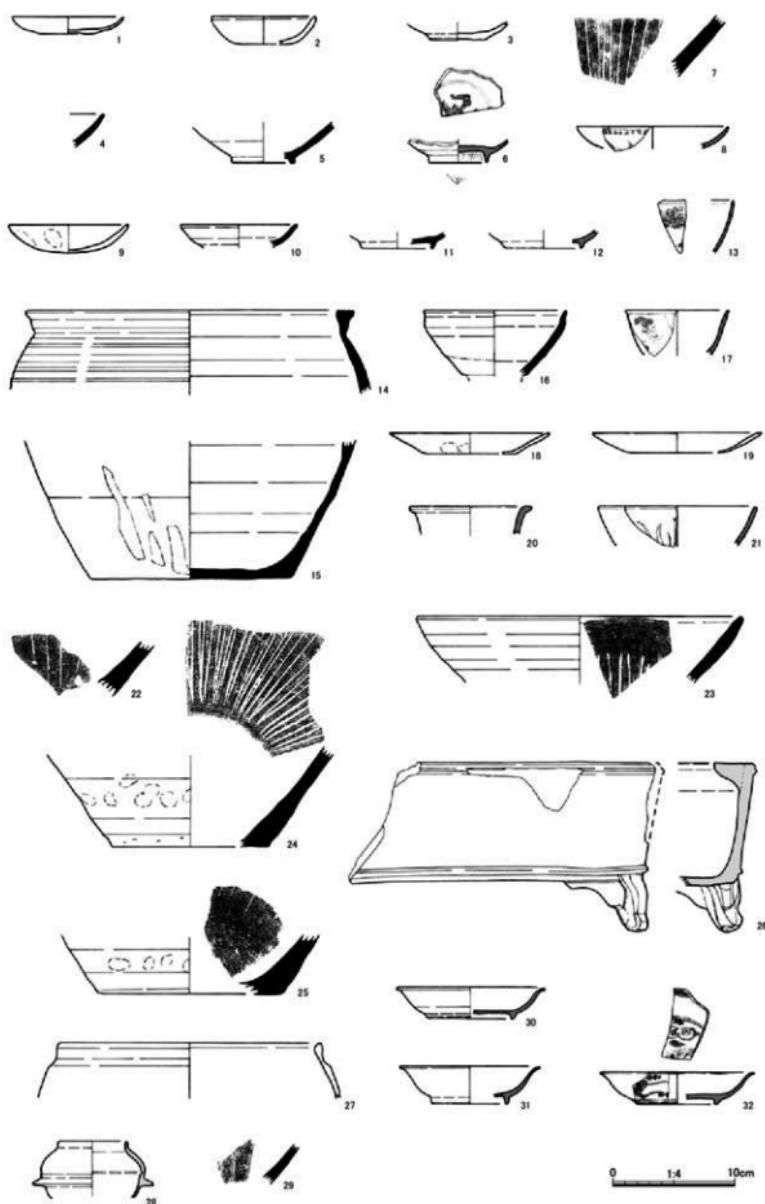


図47 曲輪1 遺構・東登城道・土壘出土遺物

東登城道 土師器皿 D 類、丹波焼擂鉢、瓦質土器鉢、青磁、青花が出土している。

18,19は土師器皿である。18の外面にユピオサエのような痕跡が見られるが、全体的に磨滅しているため調整は不明である。19の内面はナデが見られるが、外面は磨滅のため不明である。

20は青磁壺と思われる。21は青磁碗で、外面に彫りを施すが、小片のため詳細は不明である。

22～25は丹波焼擂鉢である。22は使用のため磨耗が著しい。23は口縁端部からやや下がった位置からスリ目が始まる。磨耗は見られない。24もよく磨耗する。スリ目の明瞭な割付線は認められないが、3～4本単位でヘラ描きのスリ目が施されたことがうかがえる。25はスリ目が消えるほど使用による磨耗が著しい。外面には指頭圧痕が認められる。

26は瓦質土器方形浅鉢である。角部分のみであるため長さ、幅は不明であるが、残存長は24.8cm、脚部も入れた高さは13.9mを測る。鉢部上端は内側へ庇状に突出する。脚部は面取りをして整形している。外面は口縁部と鉢部下端に1条の突帯が巡るがスタンプは確認されなかった。内面は煤が付着する。

土壘 曲輪1からは断ち割り中に土師器鍋、瓦質土器、丹波焼擂鉢、磁器、青花が出土している。27は土師器鍋である。体部から口縁部にかけて内湾し、強いナデにより口縁部は肥厚するが、ナデの下はごく弱い突帯状になる。口縁端部は内傾する面を持つ。

28は瓦質のミニチュア羽釜である。

30,31は白磁皿で、小野分類 C 群である。

32は口縁部が端反りする青花皿である。外面には草花、見込み部には草花か動物の毛並のような文様が描かれる。疊付には浅黄橙色の釉がかかる。小野分類（小野 1982）B 群に属し、15世紀後葉から16世紀前葉とされる。

(2) 遺構外（図 48・49）

遺構面検出および精査中に出土した遺物である。土師器皿・鍋・擂鉢・須恵器、陶器皿・椀・壺・甕・擂鉢、青磁、白磁、青花が出土している。

33～35は土師器皿である。33はB類で口縁部に煤化痕が見られる。内面は平滑である。35はE類で、器壁が厚い。36～38は土師器鍋で、36は岡田・長谷川分類（岡田・長谷川 2003）の甕形 III 類であれば14世紀後半の資料となる。ただし III 類よりは口縁端部のつまみ出しが弱い。突帯はなくナデ間がわずかに膨らむ。37は「く」字形に開く口縁、端部は肥厚し上方に摘まみ上げるように先端はとがる。肩部以下に平行タタキが見られる。38は断面三角形の突帯が巡る。39～41は土師器擂鉢である。39,40はスリ目を確認できなかつたが、口縁部の形態と内面横方向のハケ目および焼成から擂鉢と判断した。39は口縁下に突帯がめぐり、内面は粗い横方向のハケ目。突帯が明瞭であることから萩原城分類（神戸市教育委員会 2001）の a 類に相当すると考えられる。40は口縁部を強くナデ、段がある。内面は横方向のハケ目を施す。41は体部から屈折して口縁が伸びる部分が段状になっており、三角形を呈す。口縁端部は欠損しているが、スリ目が確認できた。萩原城分類の b 類に相当する。萩原城分類では a 類は16世紀前半、b 類は16世紀中頃の資料となる。

42は須恵器椀である。曲輪南部の曲輪3側斜面周辺で出土した。

43,44は施釉陶器である。43は釉は口縁部に施されているだけで、ほぼ露胎している。底部中央が上方へ押しあがっている。時期は近世である。44は内面は釉を薄くかけており、外面は回転ヘラケゼリで調整し微量の釉薬が付着している。46は口縁が外反する皿である。釉の痕跡があるが表面に光沢はなく、色も飛んでいる。荒れた表面には多量の小孔があり、二次焼成を受け

た可能性が高い。47は受付皿である。48は高台内をのぞいた全体に、明緑灰色の厚い釉がかかっているが光沢はない。表面は荒れて内面には滲んだ黒斑が広がっており、二次焼成を受けた痕跡と思われる。やや直立気味の口縁部から胴部にかけては薄手だが、底部と高台は厚く作られている。

瀬戸・美濃焼天目茶碗は5点出土している。52は高台際で欠損している。高台周辺の鉄鏽は比較的濃い。53は高台周辺の鉄鏽は薄い。54は高台周辺の鉄鏽は濃いが、釉は灰白色がまじり濁る。55はわずかに丸みをもつて体部が開き、口縁直下の器壁が厚くなる。高台は内反りで高台周辺の鉄鏽は比較的濃い。56は釉薬が飛んでしまっており、高台周辺もほぼ露胎に近い。内反り高台である。

57～62は陶器壺である。57,58は短く直立に立ち上がる口縁部を持つ。58は外面肩部の一部に煤が付着している。59は短くやや外方に立ち上がる口縁部を持つ。60は注口付小壺である。底部は糸切りで口縁部に片口を付ける。61は口縁部が歪んでおり、端部はナデによりやや面を持つ。外面は回転ナデのあとユビオサエをしている。62は丹波焼壺で、内面に強い回転ナデを施しているが、底部は未調整である。

63は丹波焼甕で、内外面に僅かな成形痕が見られる。

64は陶器鉢で、内面口縁部直下に窯印が入る。スリ目は見られないが下端部にわずかな摩滅が認められる。口縁端部はナデによって面を持つ。

65～76は丹波焼擂鉢である。65はC類で使用痕が認められない。66のスリ目部分は磨耗が見られる。見込み部の中央は空白で分割線はないが、上から見て反時計周りに3～4本単位でスリ目が入れられている。67は底部に十字に分割線を入れるが、スリ目はそれには係わりなく施される。片口右側に窯印が入る。磨耗はあまり見られない。68,69はC類で、68の口縁部直下に窯印が入る。69の内面には、明瞭な使用痕は認められない。73はおそらく8分割の割付線が入る。74は見込みまでスリ目が及ぶようである。76も見込み縁辺にはスリ目が及ぶが、中央部は空白となる。

77は備前焼擂鉢で、10本単位の櫛描きスリ目がまっすぐ入る。

78～82は口縁部が端反りする白磁皿である。78の疊付は若干の釉が付着しているが露胎している。80は内面の見込み部分には蛇の目釉剥ぎがされている。81は腰部からやや外反気味に立ち上がり、口縁部で端反りする。疊付に一部砂が付着しているもの露胎しており、器壁は薄い。

83は施釉陶器皿である。明緑灰色の釉がかかるが、底部外面は露胎する。

84,85は連弁文が施された青磁碗である。口縁部直下に花弁の先端を緩やかな波状に描き、花弁は放射状に底部へと線をのばしている。上田分類B～III類に属するものと考えられる。

86～102は明青花である。

86は蓋と思われる。破片のため、つまみの有無は不明である。全体に薄く釉が施されているが、裏面の先端部、下方に隆起している部分は露胎している。文様は草花のように見えるが、不明である。

87は外面に波濤文帯と芭蕉文が描かれており、おそらく碁笥底皿と思われる。89は花草文が描かれ、低く内湾した体部を持つが口縁端部が外反しない皿である。91,92は端反り皿である。92は外面に花唐草文が描かれており、内面見込みにも文様が描かれていた痕跡がある。94は、内湾する体部を持つ、つば皿の口縁部と考えられる。内外面にモチーフは不明だが文様が描か

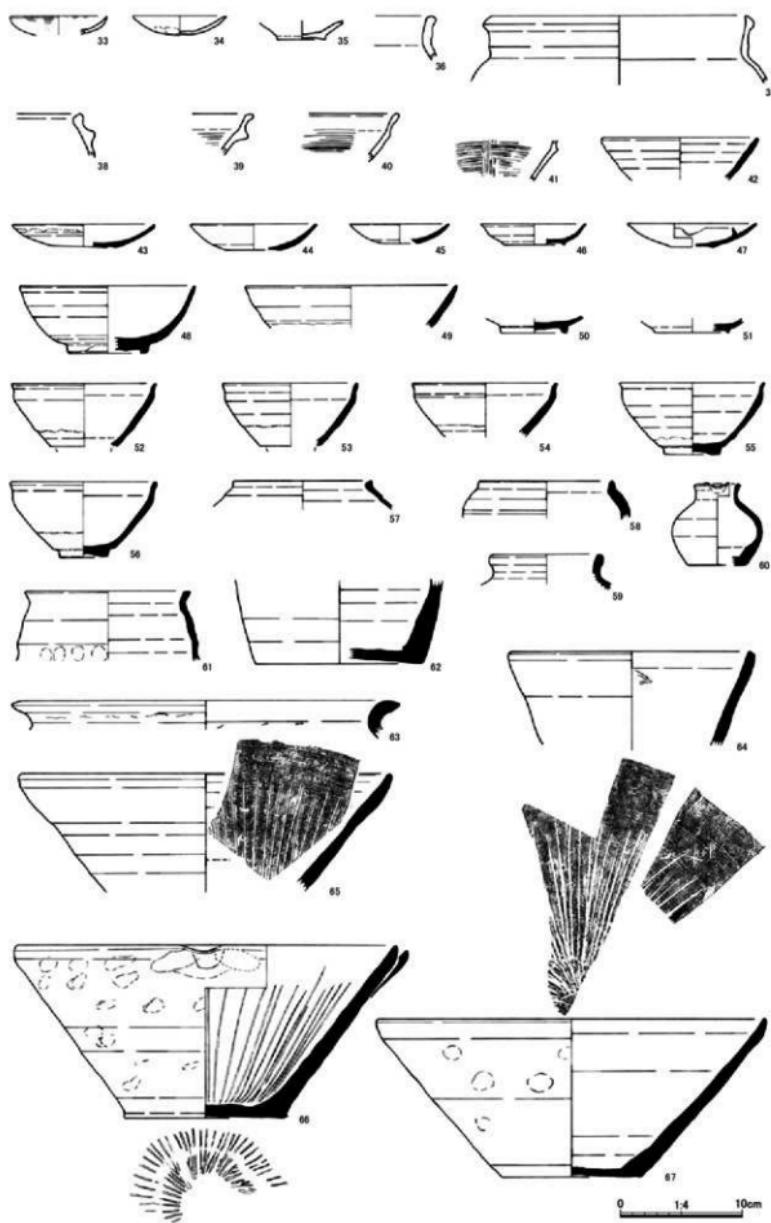


図 48 曲輪1 遺構外出土遺物 (1)

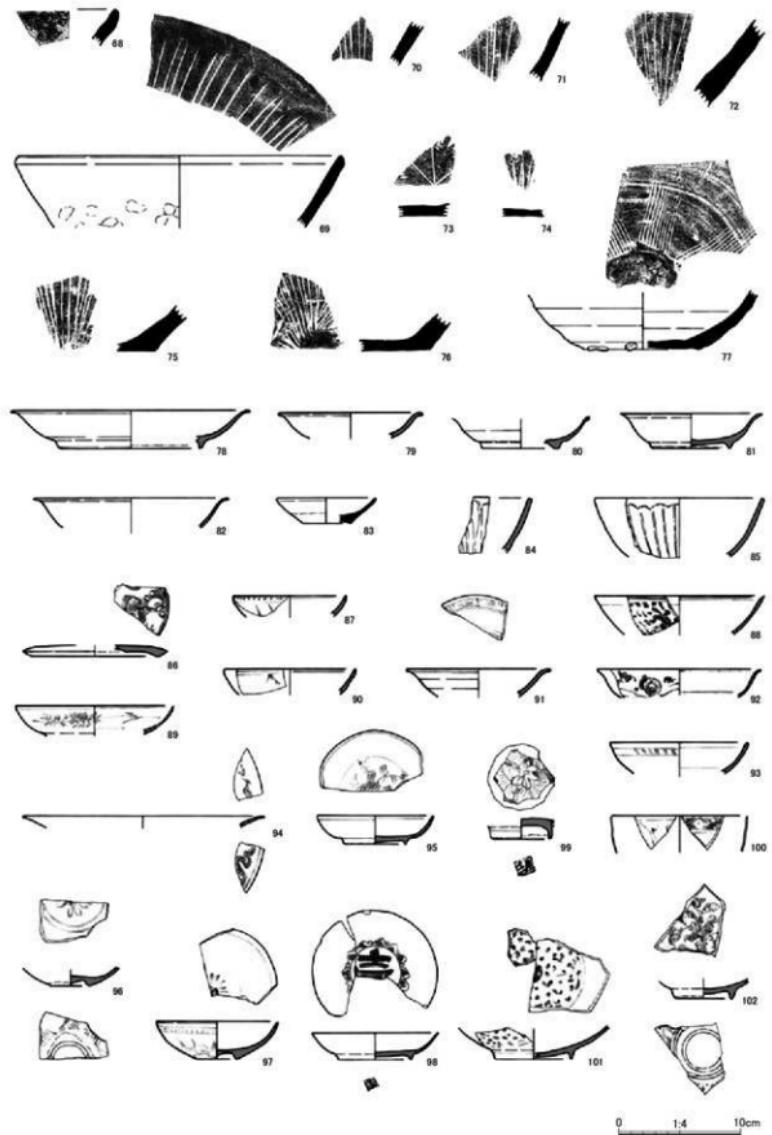


図49 曲輪1 遺構外出土遺物（2）

れている。95は、低く内湾した体部を持つが口縁端部は外反せずに立ち上がる皿である。内面見込み部には、花唐草文が描かれており、疊付は露胎している。96,97はいわゆる碁笥底皿である。96の捻花の花弁は線描きである。97の外面には波瀬文帯と芭蕉文、内面見込みには捻花が描かれている。同様のモチーフの皿が三田城からも出土している（兵庫県教育委員会2000）。98は内面見込みに寿字文を描く。高台内にも文様があるが不明である。おそらく99のような文字印ではないかと考える。疊付は露胎している。低く内湾した胴部を持つが口縁端部が僅かに外反する。99は饅頭心碗である。内面見込み部には花草文、高台内には文字印が描かれている。88,101は蓮子碗で、三田城跡で同様のモチーフを確認している。三田城例は線描き、松原城の資料は筆で点描が施されている。兵庫津遺跡第62次調査においても16世紀前半の青花列点文碗が確認されている。102は内外面に草花文が施され、高台外面には厚く釉がかかっている。

第3節 曲輪2出土遺物（図50～56）

（1）遺構（図50）

SP02106 103は丹波焼壺である。本遺構からの出土であるが、下層包含層の破片とも接合している。

SP02108 104は土師器皿A類に属し、外面は摩滅している。

石敷遺構 106、107は丹波焼擂鉢で、最上層から出土した。107は本遺構周辺で出土した150と同一個体と思われる。

SX02101 土師器皿・鍋、丹波焼擂鉢、青磁碗が中層・下層・SP02124から出土している。土師器皿はA・B・C・E類が存在する。丹波焼擂鉢はC類である。

108～113は手づくね土師器、114～117は回転台成形の土師器である。

108はA類で、内外面ともに摩滅し、底部がやや凹んでいる。遺構の下層から出土した。

109～112はB類でSX02101内のSP02124から出土している。113はC類で、中層から出土している。114～117はE類である。116は中層から、それ以外は下層から出土した。114～116は残存状態が悪く糸切りによる切り離しかは不明である。117は外面が摩滅しているが、成形痕のようなものが見える。底部は糸切りと思われる。いずれも摩滅により調整が不明瞭である。

118は耳皿でSP02124から1点出土している。全体の1/4ほどの残存で全容は不明であるが、非常に薄いづくりである。119は土師器鍋で強く内傾する口縁部とやや台形気味の突帶を持つ。

120～122は丹波焼擂鉢である。120,121はC類に属する。120の外面はユビオサエがされ、内面下部はやや摩滅している。121の外面は回転ナデの後、丁寧な調整が施されている。

123は青磁碗である。外面に連弁文が施され、内面にヘラ彫りによる施文と福字印を施す。

SX02204 105はB類に属する土師器皿である。歪みが大きく、内面口縁部から体部にかけて回転ナデが施されているが体部から底部にかけて摩滅している。

（2）第1遺構面（図51）

第1遺構面検出に伴う遺物である。須恵器壺、瓦質土器羽釜、陶器椀・小壺・擂鉢・徳利、青磁が出土している。

124は須恵器壺である。内面は回転ナデ、外面はヘラ削りで調整し、底部は未調整である。

125は瓦質土器羽釜である。口縁端部・鋤端部は残存しないが、鋤部分は水平に伸び、口縁部は内傾する。

126は施釉陶器で、薄い底部はやや隆起し、内面にのみ釉がかかっている。127は瀬戸・美

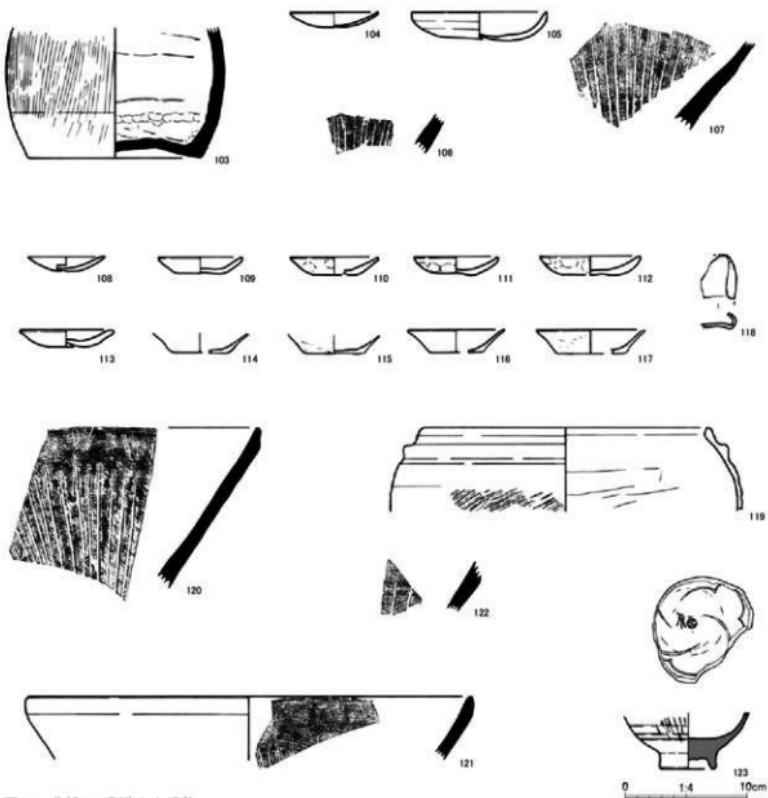


図50 曲輪2 遺構出土遺物

濃焼小壺である。強く内湾した体部を持ち、口縁部は短くやや直立気味に外反する。内外面に鉄軸をかけているが、両面とも一部露胎している。

128は丹波焼小壺である。底部は回転糸切りで、一部ナデの調整を施している。内面の底部外周にはヘラ押さえと思われる成形痕が残り、黒色の付着物がある。

129～133は丹波焼擂鉢である。129,131はC類である。器壁は厚いが、口縁部内面はやや窪んでいる。端部内面が使用により摩滅している。109は口縁部外面がナデにより窪んでいる。130はA類で、外面にわずかな成形痕が残る。口縁端部からスリ目までの距離が長い。133は端部が刺突気味のスリ目を持つ。

134は備前焼徳利で、内面に絞り成形痕が明瞭に残る。細い頸部から口縁部が外反しながら開き、口縁端部には弱い面をもつ。

135は青磁碗である。外面に文様は見られない。136は青磁皿である。体部が腰折れた稜花皿と思われる。

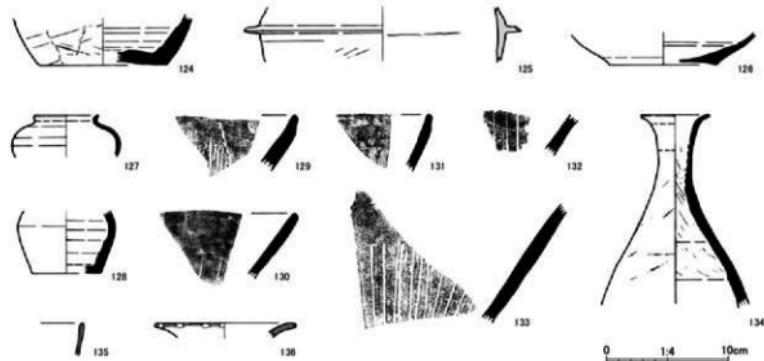


図 51 曲輪2 第1遺構面出土遺物

(3) 第2遺構面(図52)

第2遺構面検出に伴う遺物である。土師器皿・鍋、須恵器椀・甕、陶器壺、丹波焼擂鉢、瀬戸・美濃焼皿、白磁、青花が出土している。

137はB類に属する土師器皿で底部からやや直線気味に外方へ立ち上がる。内外面とも摩滅している。

138,139は土師器鍋である。138は強い回転ナデが施された「く」の字状の口縁部を持つ。外面には横方向のタタキ痕が残る。139は口縁部はまっすぐに立ち上がり、端部は肥厚し丸みをもつ。外面には右斜め上方向のタタキ痕が残る。

140～142は虎口周辺で出土した須恵器である。140,141は須恵器椀で、体部から口縁部は直線的に開く。須恵器甕142は、外面にのみタタキ痕がある。

143は丹波焼壺で、短く受口状になる口縁を持つ。外面は縦方向の条線がある。

144～156は丹波焼擂鉢である。144～146はC類である。144はスリ目の部分に窯印を入れている。145,146は口縁部に強いナデを施され、窪んでいる。150,151,152は石敷遺構周辺から出土した。150のスリ目は見込み部にも連続しており、よく摩耗している。また、体部の下半分には、工具痕と思われる上から下への凹みが反時計回りに巡っている。151,152はC類である。口縁部が強いナデによって窪んでおり、端部は沈線状に凹む。152は口縁部がナデによって窪んでいる。153,154はB類である。口縁部端面は凹線状に窪んでいる。体部下半分は、やや摩耗している。154は歪みが強く、器径は体部の直径で割り出している。スリ目直上に窯印が入る。口縁部端面は弱い凹線が巡る。内面は使用による摩耗はあまり認められない。155はC類である。片口の下方に窯印を入れている。口縁部はナデによって窪んでおり、片口部分は凹線により段状になっている。156は内面下半分がやや摩耗しており、見込み部の上方には重ね焼きの痕跡と思われる痕が見られる。スリ目は上から下、向かって右から左へ施している。外面は回転ナデとユビオサエ、体部下方はヘラ削りを施している。147と同一個体の可能性が高い。

157,158は石敷遺構南西部から出土した瀬戸・美濃焼皿である。157の体部は内湾し、口縁部はやや外反する。口縁端部と墨付けは露胎しており、高台内も基本的には釉はかかっていない。

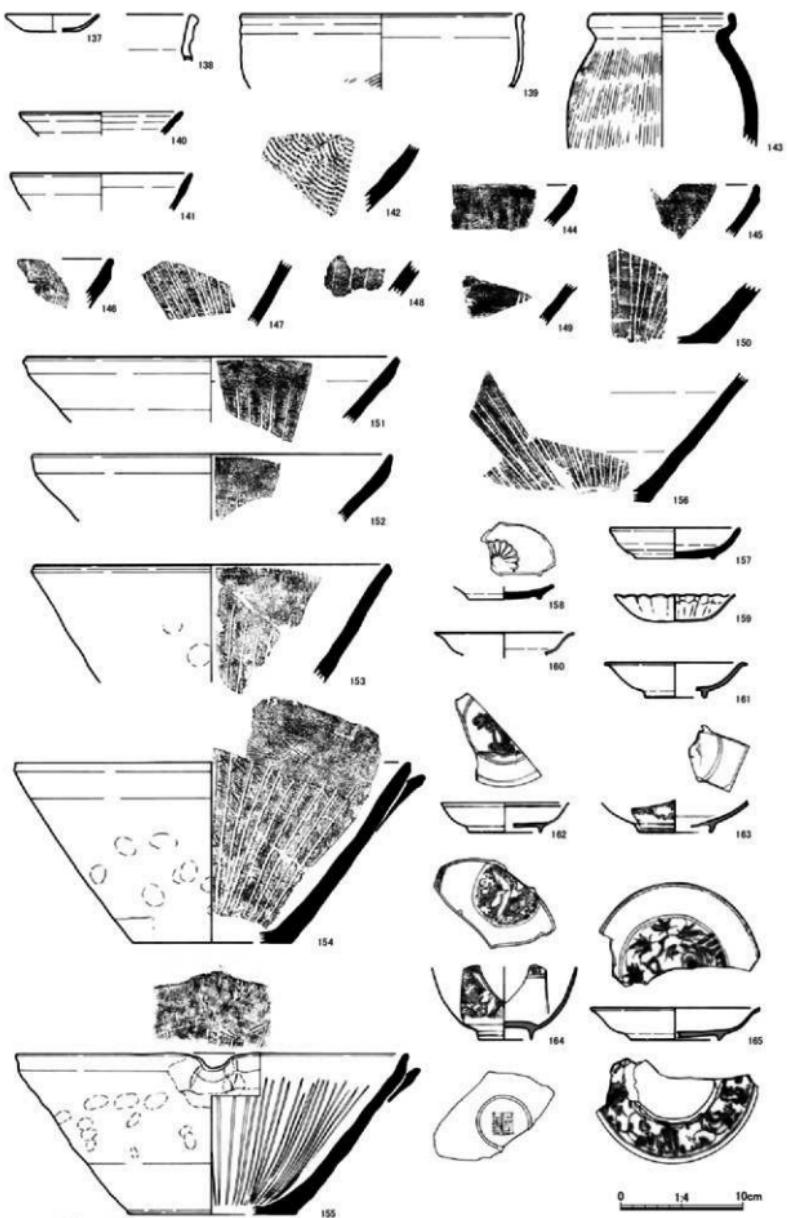


図 52 曲輪2 第2遺構面出土遺物

底部には粘土目が3カ所見られる。158は、見込み部分に菊花が施された印花皿である。内外面と高台周辺が施釉されており、底部にはロクロによる成形痕と粘土目が見られる。

159～161は白磁皿である。159は菊花皿で、口縁部は端反りしている。161は端反り皿で、口縁部内面下方に砂目が見られる。

162～165は青花である。162は小野分類E群の青花皿である。見込み部に花草の文様が施されている。165は口端反り皿で、高台内部にまで施釉がされている。また、疊付には砂が付着し、外面と見込み部には唐草文が描かれている。礎石建物の礎石周辺で出土した。163はいわゆる蓮子碗である。外面と見込み部に文様が描かれているがモチーフは不明である。164は見込み部が盛り上がる饅頭心碗で、見込み部と外面には同じ構図・文様で鶴と鷺が描かれる。

(4) 斜面(図53)

曲輪2からの投棄または土壘からの流出の遺物である。

166は土師器皿で口縁部に煤化痕が認められる。167～169は土師器鍋である。167は内湾する口縁部をもち、口縁部外面はナデによりごく弱い段が形成される。外面下半からタタキが認められる。168,169は内湾する体部と口縁部直下に断面三角形の突帯をもつ。内面は丁寧なナデで仕上げられている。

170,171は須恵器椀で、171は器高が低い。

173は備前焼擂鉢で断面三角形の口縁を持ち、端面はナデにより若干くぼむ。174～179は丹波焼擂鉢である。176,177はC類であるが、176は口縁端部直下から粗密が混在するスリ目を

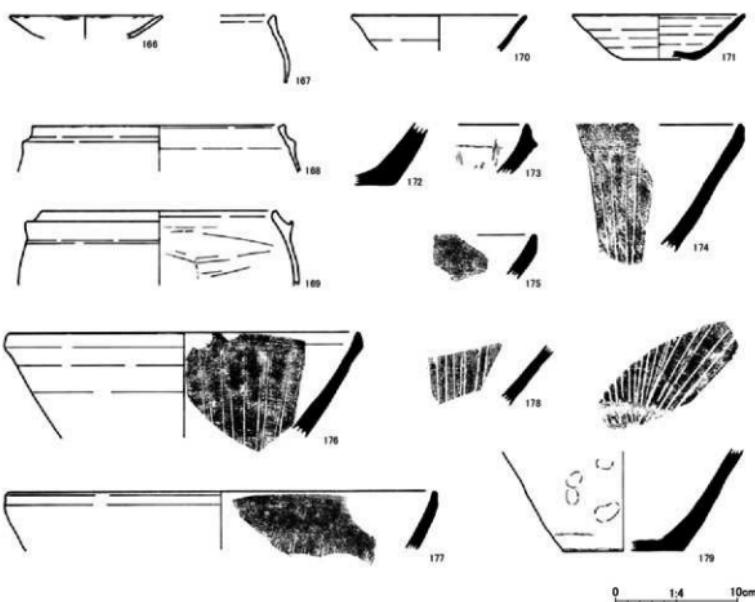


図53 曲輪2 斜面出土遺物

施す。179は見込み部にもスリ目が及ぶ。

(5) 上層土壙（図54）

上層土壙の検出中の遺物である。図示した土師器皿は、いずれも北東土壙からの出土である。182～189,199,201は表土の掘削後に上層土壙検出地点でまとめて出土した。

土師器皿はほとんどがC類で、回転糸切りのE類は200の1点のみである。180～193はC類である。いずれも底部中央が上方へ押し上げられ、内面はナデ、外面はユビオサエやナデによる調整を施している。底部が未調整のものも見られる。180,181のように器高は低く、体部の器壁もやや薄いものもある。また、表面が摩滅または剥離しているものも少なくない。191の外面は摩滅により不明瞭だが、ヘラ削りが見られる。しかし、調査中の作業道具による痕跡の可能性もある。194,197,198はD類である。197は底部から直線的に開き、口縁部がやや肥大している。196はA類で、口縁部内外面には煤化痕が認められる。200は外面に成形痕が残るが、全体的に摩滅している。201は土師器鍋で、底部を除きほぼ完形に復元できた。底部から屈曲して体部が立ち上がり、内湾して口縁部にいたる。口縁部直下には強いナデに伴って断面三角形の突帯が巡る。口縁端部はわずかに肥厚し、端面は内傾する。体部下半はタタキが施され、口縁端部と突帯以下に煤が付着する。

202はスリ目がないが口縁部形態や焼成などから丹波焼擂鉢と判断した。

203,204は丹波焼擂鉢である。204は内面が摩耗している。

205は備前焼擂鉢で、8本以上の櫛引きスリ目である。北西土壙から出土した。

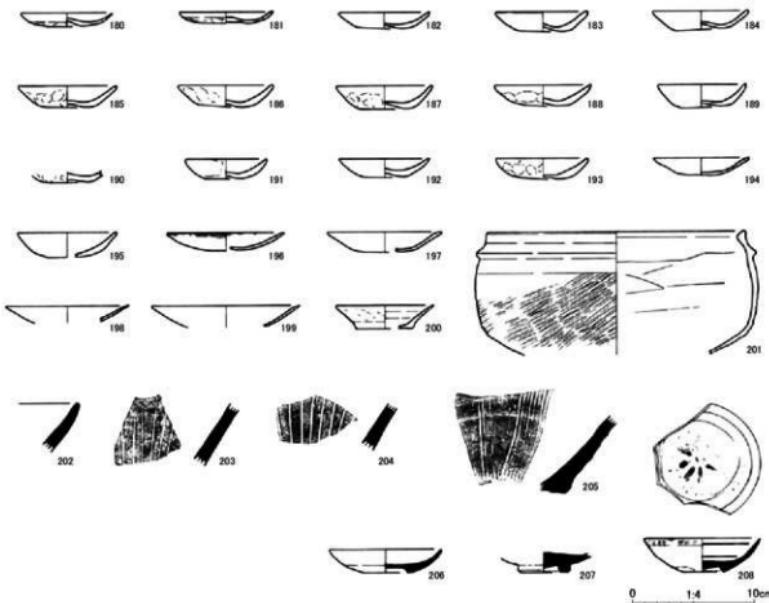


図54 曲輪2 上層土壙出土遺物

206は南西土壙から出土した基筒底皿である。施釉はされていないが、見込み部が摩滅している。

207,208は施釉陶器である。207は底部と高台の器壁が厚く、内面と体部に釉がかかっている。北西土壙から出土した。208は基筒底皿で、見込み部に捻花を描いている。

(6) 下層土壙（図 55・56）

下層土壙の検出中、下層土壙直上の炭層や焼土層などから出土した遺物である。

209～225は土師器皿である。その多くがE類であり、上層部とは様相が異なる。209はA類である。口縁部内外面に煤化痕が認められる。南西下層土壙から出土した。210～212は北東土壙の焼土層から出土した。210はC類で、全体的に歪である。211,212はB類である。212は底部がやや丸みを持つ。213～224はE類で、北東土壙の炭層・焼土層から出土した。いずれも底部からハの字状に立ち上がる。いくつか摩滅は見られるが、体部は回転ナデで調整し、底部は糸切り痕が残る。223の内面には、粘土紐と思われる成形痕が残る。224はE類であるが体部は直線的に開く。南西土壙から出土した。225はD類で、口縁端部は強く外反する。北東土壙の断ち割り中に出土した。226は土師器鍋で、口縁部は内傾する。突帯は崩れた台形で、端部は内傾する面を持つ。227は土師器擂鉢で、外方に開く口縁部は、強いナデにより段状の突帯を持つ。

228～230は須恵器甕である。外面にのみ綾杉文タタキが見られ、内面はナデ消す。231～233は須恵器捏鉢である。231は長く直立した口縁部を持ち、体部の下2/3はやや摩滅している。SD02301の石積み下から出土した。232は片口付きで、体部の下2/3は摩耗している。233は、短く立ち上がる口縁部を持ち、外面は凹線により段状になっている。内面は底部から体部の下2/3まで、外面は底部の外側が摩滅している。

234～236は備前焼擂鉢である。234,235の内傾した口縁端部は弱い面を持ち、234の内面は使用によって摩滅している。236は擂鉢の片口部である。やや外傾した口縁部には条線が2条あり、端部は面を持つ。間壁編年V期に属する。

237～240,242,243は丹波焼擂鉢である。237はC類で、口縁部の下部がやや窪む。北東土壙と北西土壙から出土した破片同士が接合した。238はD類である。口縁端部に使用痕が見られ、擦れて平滑になり且つ小さく波打っている。口縁部までスリ目が認められる。また、体部下半部のスリ目も使用による摩滅のため消えている。243のスリ目は見込み部から連続しており、内面は摩耗している。底部は未調整で、外面はヘラ削りの調整を施す。

241は陶器擂鉢で、備前焼の可能性がある。

244～247は常滑焼甕である。全形をうかがえるものではないが、244の折り曲げられる口縁部形態から15世紀前半の資料と考えられる。245～247は、体部片には横方向の枠内に「大十代」の押印が認められる。

248は南西土壙から出土した施釉陶器碗である。

249は青磁碗で、体部外面に連続する山形と縦線で幅の狭い蓮弁文を施す。

250は丹波焼甕である。ゆるやかに内湾する体部に短く屈曲する口縁部が付く。口縁部内面には沈線が巡る。

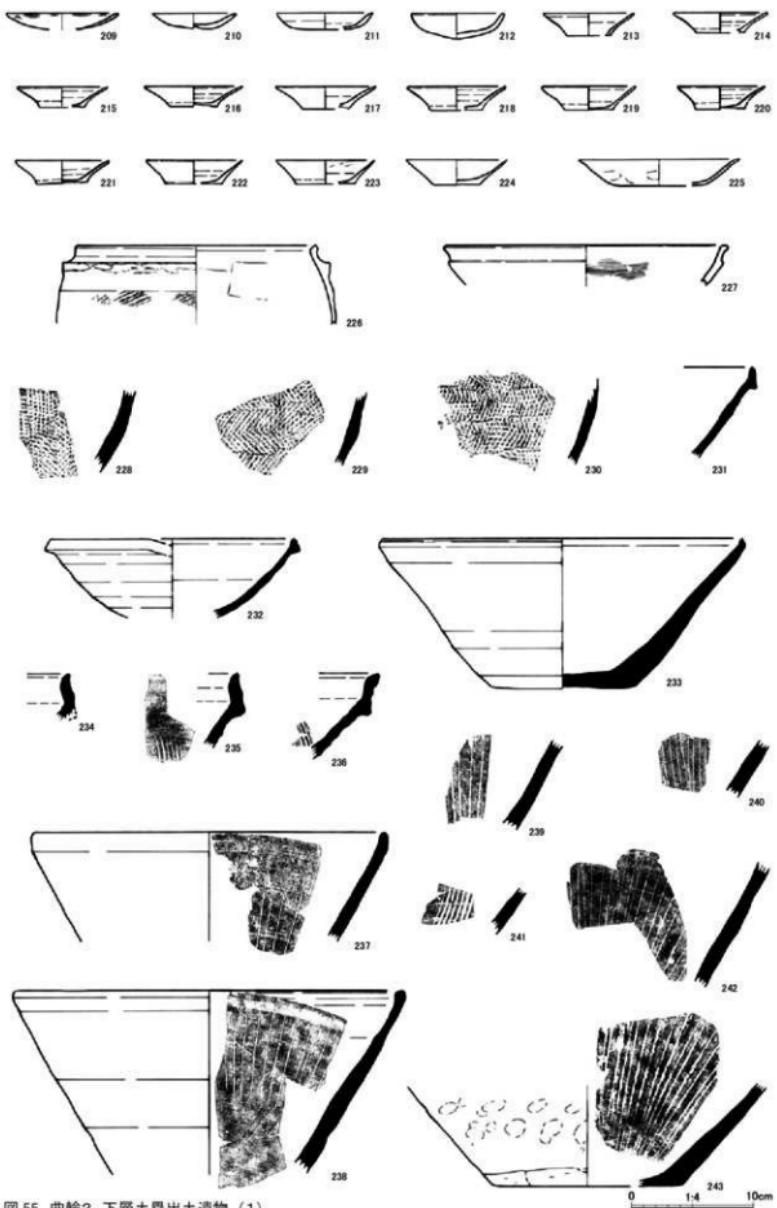


図 55 曲輪2 下層土塁出土遺物（1）

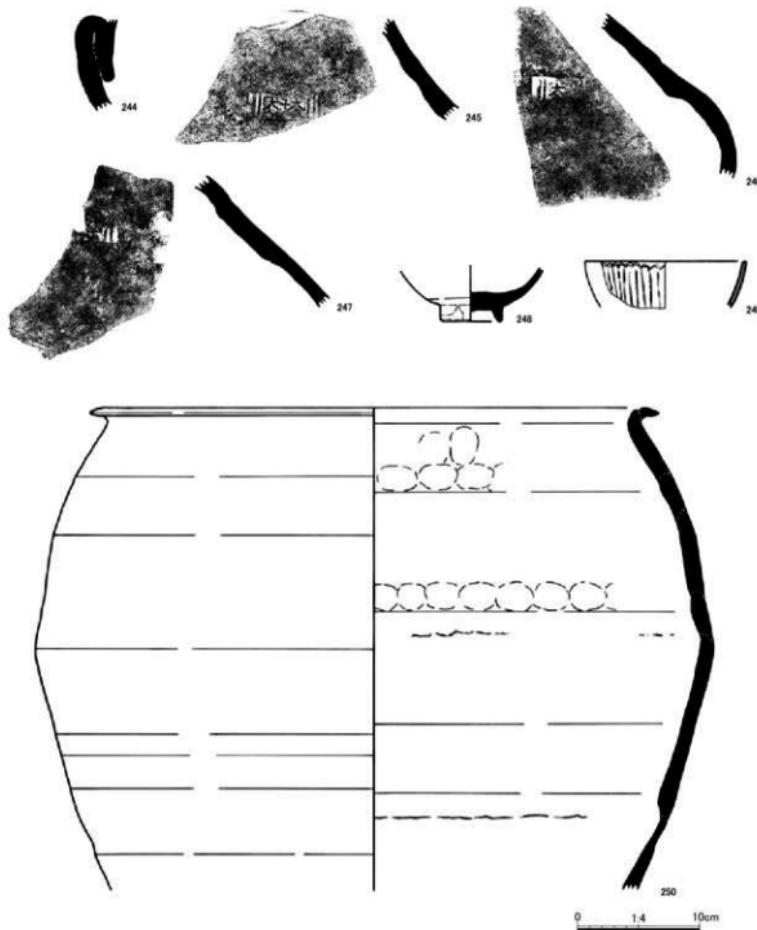


図 56 曲輪2 下層土壙出土遺物（2）

第4節 その他の曲輪出土遺物（図 57・58）

（1）曲輪3（図 57）

251は土師器皿E類で内外面とも磨滅している。曲輪3の北半部から出土した。

（2）曲輪4（図 57）

土師器皿・鍋、陶器壺・擂鉢、白磁、青磁が出土している。

252～259は土師器皿である。252,253はB類である。252は丸みを帯びた体部を持ち、口縁部はやや外傾しながら立ち上がる。底部は直径1.4cmほどの穿孔が見られる。口縁部の外面に煤化痕が認められる。253は内面にハケ目が見られる。兵庫県小野市豊地城で類例が確認されている（兵庫県立考古博物館2014）。254,255,256はD類である。254,255の口縁部内外面には煤化痕が認められる。254は丸みを持つ底部から体部は外傾し、厚みのある口縁部は端反りする。255,256は直線的に外方へと開き、口縁部はやや外反する。257はF類で、平らな底部から体部が短く立ち上がる。底部には僅かな糸切り痕が認められる。258,259はE類である。258の底部は糸切りと工具痕が認められ、外面には粘土紐由来のヒビが見られる。259は底部から口縁部まで外反しながら立ち上がり、やや厚い器壁を持つ。

260,261は土師器鍋である。260は内傾する口縁部と台形の突帶を持つ。261は内傾する口縁部と弱い突帶を持ち、強いナデが口縁部を巡る。端部は内傾する面を持つ。

262は丹波焼甕である。内傾した体部から短く外反する口縁部を持つ。口縁端部外面には弱

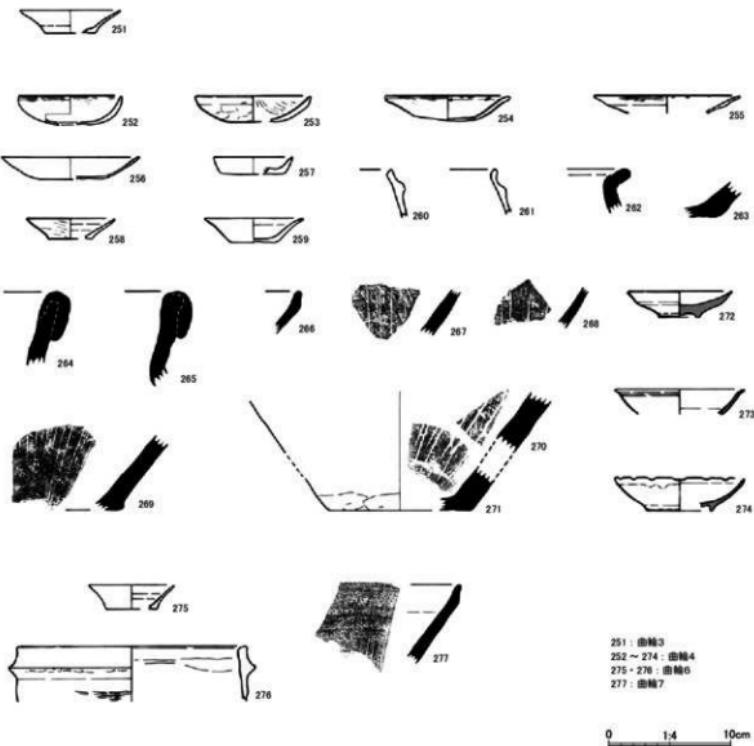


図57 曲輪3・4・6・7 出土遺物

い沈線が巡り、内面も沈線により口縁部が窪んでいる。

263～265は備前焼である。264,265の甕は口縁端部を折り曲げて玉縁状にしている。264は曲輪4の炭だまりから出土した。

266～271は丹波焼擂鉢である。269はスリ目がよく摩耗しており、下半分はほとんどすり消されている。体部外面の下部にはヘラ削りが見られる。270,271は同一個体と思われる。器壁は非常に厚く、内面のスリ目は摩耗している。体部外面の下部にはヘラ削りが見られる。

272,273は白磁皿である。272は厚い器壁を持つが口縁部は薄くなり、端部は肥厚して丸みを持つ。曲輪4の炭だまりから出土した。273は端反り皿である。口縁部の外面下方に沈線が1条見られる。

274は青磁皿である。体部が型押しにより花弁状になり、口縁部は内湾している。削り出し高台の内部は、くの字になっている。

(3) 曲輪6（図57）

275は土師器皿E類である。

276は土師器鍋で、直立気味の口縁部に断面三角形の突帯が付く。外面は横方向のタタキがある。小片のため口径も含めて不正確な部分がある。

(4) 曲輪7（図57）

277は丹波焼擂鉢である。口縁端部をやや摘まみ上げるような形状で、C類に相当する。スリ目は口縁端部から下がった位置から始まり、磨耗は見られない。

(5) 曲輪14（図58）

278～280は土師器皿である。279,280は回転ナデが認められるが、278は摩滅により調整は

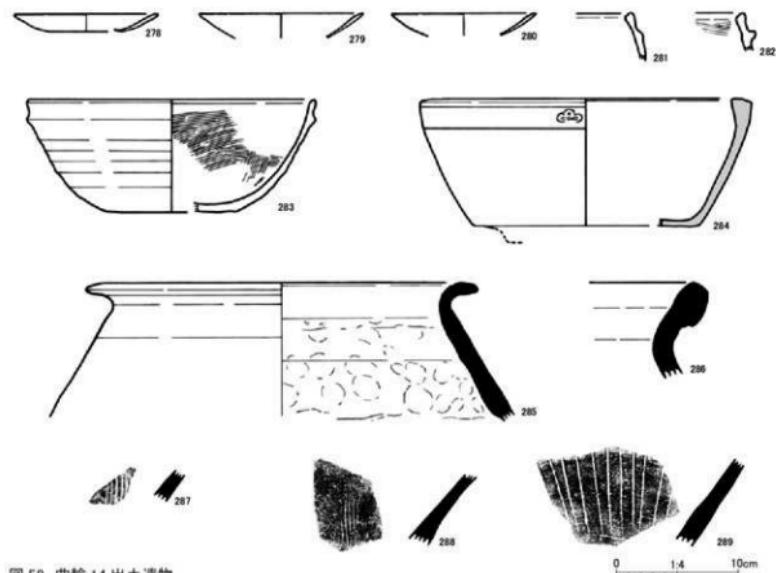


図58 曲輪14出土遺物

確認できない。このうち、279と280は曲輪4側の北斜面からの出土であるが、その他は横堀あるいは西側斜面部からの出土で、曲輪1からの流出と考えられる。

281,282は土師器鍋である。281はごく弱い突帶を持ち、強いナデにより口縁端部が肥厚し、端部は内傾する面を持つ。282は台形気味に突出した突帶を持つ。口縁端部は面を持ち、内傾している。

283は土師器擂鉢で、内湾しながら体部が立ち上がり、口縁部外面のナデの下に断面三角形の突帶を巡らす。内面は横法のハケ目の後に縦方向のスリ目を施す。見込み部にも放射状・圓線状に薄くスリ目が薄く残存する。外面の体部と底部の境界にはヘラ削りが施される。萩原城跡分類のa類に相当する。

284は瓦質土器鉢で浅鉢形で口縁部は肥厚する。底部には脚が接合していた痕跡があり、口縁部外面には2条の沈線間にスタンプが入る。時期は15世紀代と思われる。

285は丹波焼甕で、短く水平に折り曲げて口縁部となし、内面上面には沈線を巡らす。

286は備前焼甕で、口縁部は折り曲げて玉縁状となる。色調は赤褐色である。間壁編年IV期である。擂鉢では289は丹波焼であるが、287,288は櫛描きのスリ目で288は備前焼である。

第5節 堀切出土遺物（図59）

堀切からは土師器皿、丹波焼甕、備前焼擂鉢・徳利、陶器壺、青磁が出土した。堀切底からの出土ではなく曲輪1・2からの流入である。292,294～296は閉塞土塁から出土している。

290は土師器皿で、D類に属する。器壁は厚く、体部から口縁部にかけてやや外反する。

291は備前焼擂鉢である。外傾した体部から直立した口縁部を持つ。292は備前焼徳利で、曲輪2南と堀切端の閉塞土塁からの破片が接合した。頸部は絞り成形である。若干の焼け歪がみられる。293,294は備前焼甕と思われる。294は底部に脚のような突起が付き、外面には沈線が1条巡る。

295の丹波焼甕は底部からの体部立ち上がり部分はユビオサエで成形し、体部はナデで整形するが一部板状工具痕が残る。曲輪2北東土塁から出土した250と同一個体と思われる。

296は青磁碗である。体部までは内湾し、外方へと立ち上がるが、口縁端部はやや外反する。外面に蓮弁文を施す。

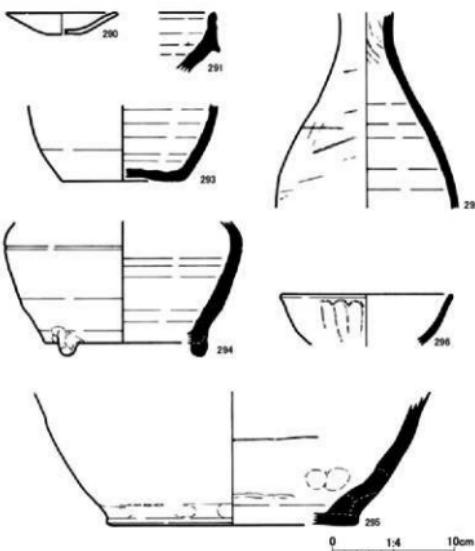


図59 堀切出土遺物

第6節 その他の出土遺物（図 60～67）

(1) 石製品（図 60）

S1 は曲輪2から出土した硯である。海から陸にかけて墨痕が認められる。硯陰も縁をやや太く残して若干のくぼみがあり、磨耗はしているが墨痕は確認できなかった。下半部に切断痕とみられる筋が幾本かみられ、意識的に断ち割られたと考えられる。

碁石は4点出土した。黒石のみで材質はいずれも黒色粘板岩と思われるが、S3 は若干色調が淡い。S2,S3 は曲輪1から、S4,S5 は曲輪2からの出土である。

団化には至っていないが、砥石が曲輪2石敷上部の暗褐色土から出土している。長さ 9.4cm、幅 5.5cm の長方形で、厚さ 0.9cm である。表面・側面も共に磨耗がみえる。石材は粘板岩である。

石臼の上臼と下臼が曲輪1平坦面からと曲輪1東登城道から出土した（写真図版 30）。上臼は直径約 27.0cm、高さ約 11.5cm で、供給口は直径 5.0cm で表裏両面から穿孔されて断面は鼓形を呈する。挽き木の挿入口は供給口と対角の位置にあり、横 3.5cm、縦 3.0cm で、深さは 4.0cm である。芯棒受けは直径 1.5cm、深さ 1.5cm である。目立ては 8 分割で若干の磨耗が認められる。ふくみは約 1.0cm である。下臼は直径約 27.5cm、高さ約 14.0cm で、芯棒孔は直径 4.0cm、深さ 4.5cm で貫通していない。裏面は 4.0cm ほど大きくくぼむ。目立ては観察できずふくみもないが、下臼と判断している。直径に対して高さがあり調整も雑であることから、製作途上の可能性もある。曲輪1東登城道から出した。石材はいずれも花崗岩である。

茶臼は、はんぎり部から台部が残る1点と、はんぎり部のみの1点がいずれも曲輪1北部から出土している（写真図版 30）。内面と台部の接地部分に磨耗がみられる。三田市中尾城跡に類例がある（兵庫県教育委員会 1989）。

一石五輪塔が曲輪1から出土した（写真図版 30）。埋立式で、空輪・風輪ではなく火輪と地輪の一部を欠く。現存高は約 55.0cm、幅は約 12.0cm、水輪高約 9.0cm、火輪の軒反の高さは約 5.5cm である。梵字・銘文ともに見られない。側面に火を受けた痕跡が観察される。

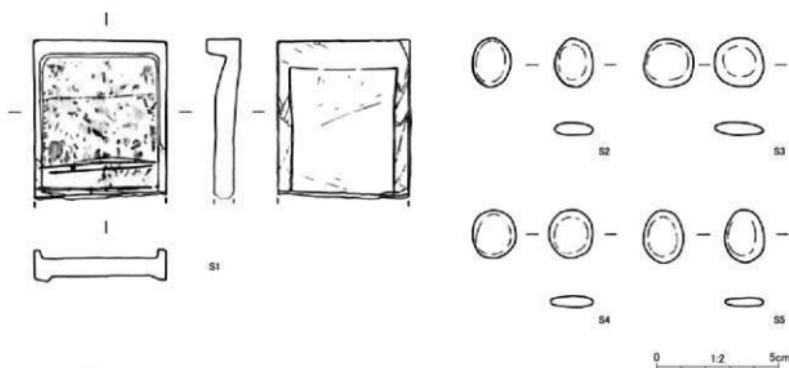


図 60 石製品

(2) 金属製品

金属製品には釘、武器、容器、刃物・工具、錢貨などがあり、合計 304 点が出土した。

釘類：釘や金具は合計 210 点が出土しており、曲輪 1・2 からの出土が大半である。このうち、53 点を図示した。角釘は、熱した棒状素材の一端を叩き延ばし、これを手前に巻き込んで頭部とした巻頭釘（頭巻釘）が大半で、全長 1~3 寸前後におさまる（M1 ~ 46）。頭部は打撃やサビによる欠損・変形を経ているので、これを類型化することは避けたが、全長 1 寸前後の小型品には頭部の巻き込みが弱く手前に折り曲げる程度のもの（M37 ~ 42）や、叩き延ばしてはいるが巻き込みがほとんどないもの（M43 ~ 46）がある。このほか、端部を叩き延ばさずに折り曲げて頭部とした皆折釘（M47）や、両端部を尖らせた合釘（M48・49）、頭部を作り出さない切釘（M50・51）などがあり、M52 は掛物を掛けるために用いられる折釘の欠損品とみられる。M53 は平丸頭の鉢で、胴部断面は円形を呈す。M54 は円形孔をもつ板状の金具で、留金具とみられる。M55 は壺金で、煽止などに接続するものであろうか。

武器類：鎌 14 点、鉄砲玉 1 点がある。鎌は鎌身部が三角形を呈する尖根鎌（M56 ~ 65）が 10 点、二股に分かれる雁股鎌（M66 ~ 69）が 4 点ある。尖根鎌はさらに鎌身部の断面形が円～方形のもの（M56・57・59・61）と、方～長方形のもの（M58・60・62 ~ 65）があり、後者には先端部が撃状に近いものも含まれる。雁股鎌はすべて二股部が平面 U 字形を呈す。これらの鎌はいずれも小型・軽量品の範疇にあり、東国を中心とした編年（津野 1990）によれば小型の尖根鎌は 15 ~ 16 世紀の戦国時代以降に盛行するようである。

容器類：鋳鉄鋸物片は合計 15 点が出土しており、容器と判断できるものが 7 点ある。このうち口縁部 5 点を図示した。M71 は口縁部に半円形の加工があり、端部内面には凹部をめぐらせる。M72 ~ 74 はいずれも内・外に断面三角形～帯状の突帯をもつ。M75 は皿に復元できる個体で、端部内面に突帯をめぐらせる。復元径は 26.2 cm を測る。

刃物・工具類：短刀・鉈・鎌・刀子・鑓がある。短刀（M76）は曲輪 2 の北西斜面から出土した。反りがなく、刀身の残存長は 11.05 cm を測る。鎌は船製で、柄には目釘穴が穿たれる。鉈（M77）は刃と柄を一体鍛造した刃部長 9.20 cm の共柄鉈で、ほぼ全形を窺い得る。刃部のクラックの観察から、両刃・割込み刃金で製作された可能性が高く、先端部には刃をつけない。柄には木質が遺存し、半裁した小径木で挟み込んでいたようである。民俗例では、両刃・割込み刃金のハナ付鉈が中国山地に分布しており（朝岡 1998・2000）、本例もその範疇だが、出土事例に乏しく年代的な位置づけは難しい。M78 は刀子で、柄に木質を残す。M79・80 は刃物の柄、M81 は鎌の破片である。M82 ~ 84 は一端をやや尖らせた棒状品で、鑓とした。

その他：針状鉄製品（M85 ~ 88）、棒状鉄製品（M89 ~ 91）、環状金具（M92・93）、延板状鉄製品（M94 ~ 96）、小札（M97）、薄板状金具（M98・99）、不明鉄製品（M100・101）などがある。M94 ~ 96 は形状から刃物の柄の可能性がある。M97 は札幅 1.65cm を測る小札である。M100 は結合具であろうか。M102 は延べ煙管で、雁首と吸口は真鍮製、羅宇は鉄製である。

銅製品：錢貨を除く銅製品には、笄（M103）・筒状銅製品（M104）・釘（M105）・飾金具（M106）がある。笄（M103）は首部～耳搔部を欠く。凹部に 5 連の円形文様を配すが、家紋か否かは判断できない。M106 は傘の内側に環状の金具が連接される。仏具の一部であろうか。

錢貨：鉄錢 5 枚、銅錢 45 枚が出土している。曲輪 2 を中心に、渡来錢が 8 種 10 枚（祥符通寶・天聖元寶・景祐元寶・嘉祐通寶・熙寧元寶・元豐通寶・政和通寶・洪武通寶）ある。その他は寛永通寶（古寛永・新寛永）である。

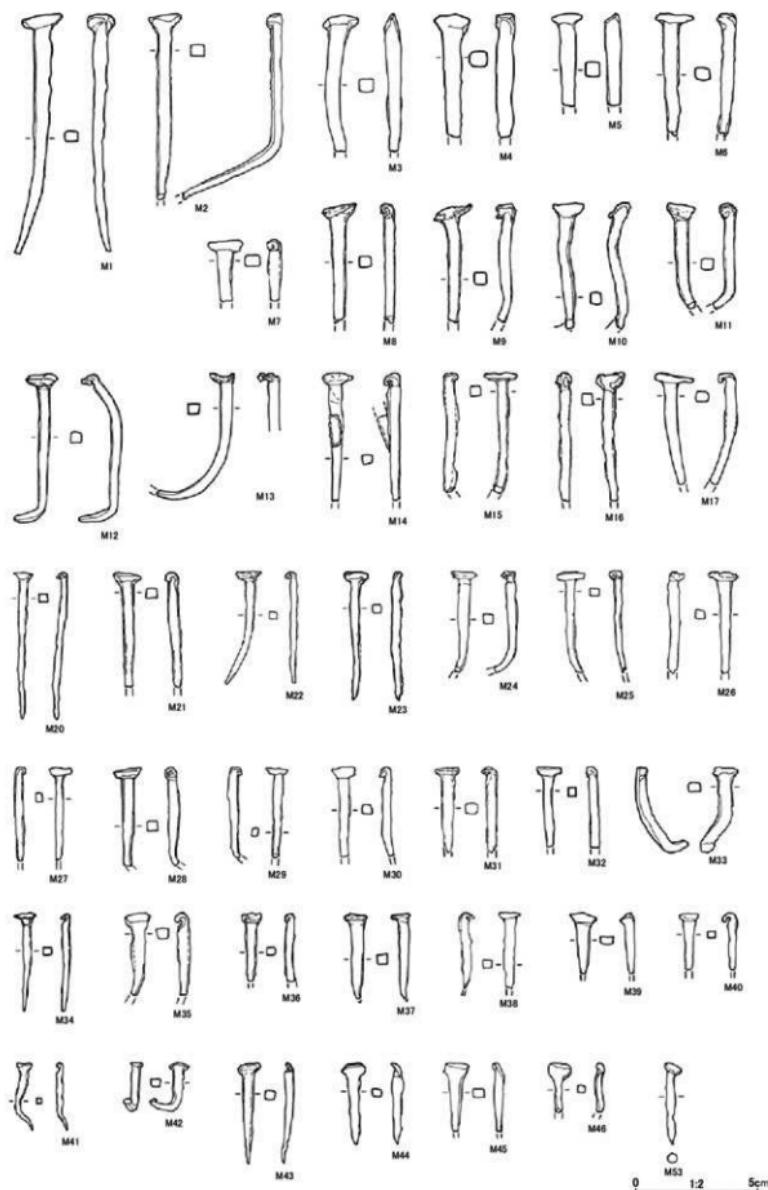


図 61 金属製品（金具類①）

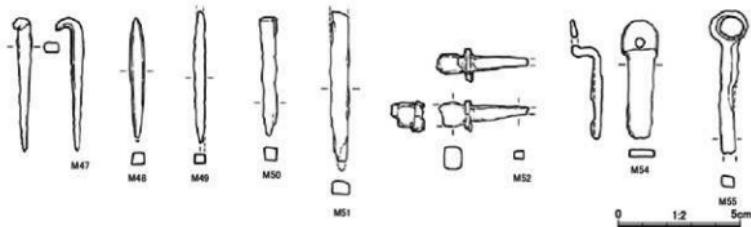


図 62 金属製品（金具類②）

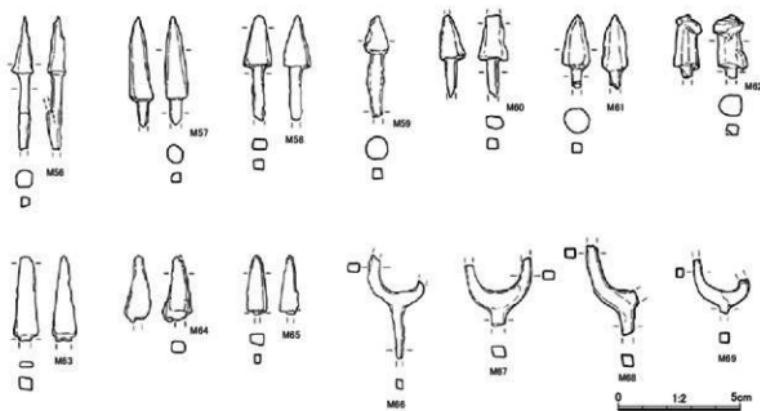


図 63 金属製品（金具）

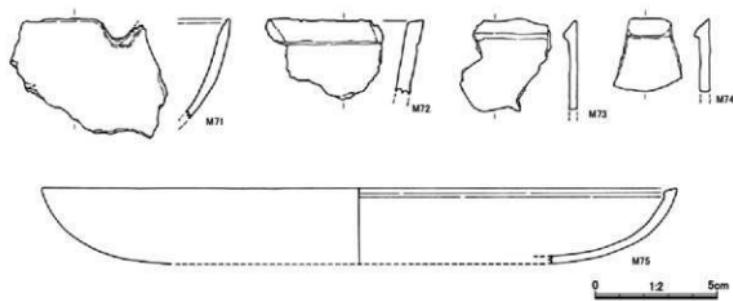


図 64 金属製品（容器類）

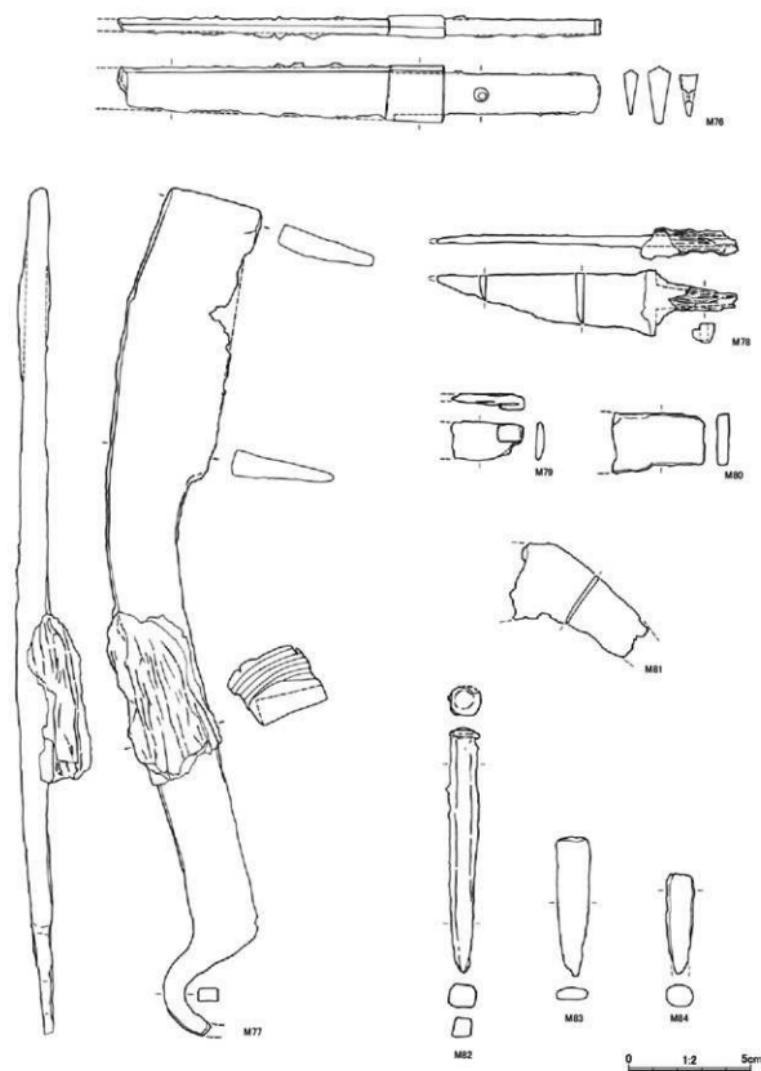


図 65 金属製品（刃物・工具類）

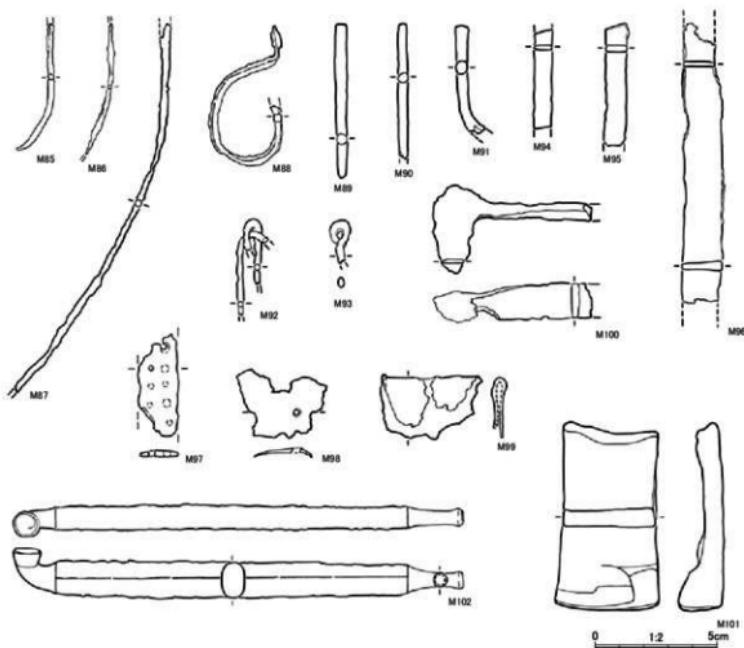


図 66 金属製品（その他）

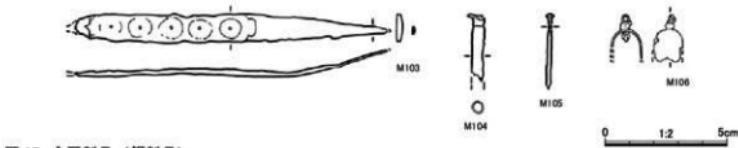
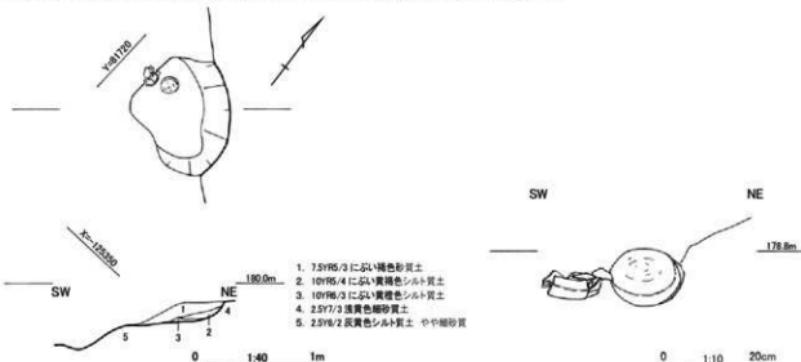


図 67 金属製品（銅製品）

第7節 古墳時代の遺構・遺物

ST02001 曲輪2の北東土塁中の炭層を取り除いたのち旧表土上面より検出した、残存長 0.98 m、残存幅 0.80 m、深さ 0.16 m の遺構である。本遺構は本来、南西ないし南側へと続いていたものと考えられるが、土塁造営以降に削平されたため、規模や形状は不明である。埋土は褐色粘質土、にぶい黄褐色シルト質土、にぶい黄橙色シルト質土の順で堆積する。底面は南西方向へと下るスロープ状をなす。このため、本来の最深部は現状よりも深かった可能性が高い。底面でいずれも完形の蓋と身とが合わさった状態の須恵器壺が出土した(297と300)。また、この西隣でも破碎した須恵器壺蓋と身が出土しており(298と301)、本来は2セット以上を並べていたものと推測される。須恵器壺の北東側では、散らばった状態の赤色顔料を検出した。本遺構は周辺に溝などの遺構は伴わないものの、古墳の埋葬施設もしくは土坑墓の一部と考えられる。297と300内部からは土砂以外のものはみつからず、当初より空の状態で配置したものと考えられる。本遺構の年代は、出土した須恵器からTK10型式並行期と考えられる。



須恵器(図70・71)297~327はいずれも須恵器である。297~299は壺蓋である。297は稜より下部はやや内湾してのび、口縁端部内面は段を設ける。298は稜より下部は真っすぐにのび、口縁端部内面に明瞭な段を設ける。299は稜が明瞭であるものの口縁部は内湾し、口縁端部内面はややくぼむ程度である。300~302は壺蓋である。いずれ口縁部は内傾しつつも真っすぐにのびる。300はややくぼむ程度、301は口縁端部に明瞭な段をもつが、302は丸くおさまる。このうち、297は300と、298は301とST02001よりセット関係の状態で出土した。しかし、297と300は合わせた状態でも若干の隙間ができ、それぞれのセット関係には胎土・焼成・色調に相関関係がみえない。このため、少なくとも焼成時からのセット関係ではなく、遅くとも遺構内(ST02001内)に収める段階で見繕った品々である蓋然性が高い。壺の年代は、297, 298, 300~302がTK10型式、299がTK43型式と考えられる。303は壺蓋である。口径に比して器高が高い。稜線をもたないが、かわりに沈線を2条巡らす。TK217型式のものと考えられる。304は壺蓋もしくは壺蓋である。稜をもたず、口縁部へ端部にかけては外側にやや外反する。305, 306はいずれも壺蓋と考えられるが、全形は不明である。307は高壺である。端部は面取り行き、真っすぐに下って接地に至る。308は壺である。稜は鋭く、口縁端部は丸く收める。口縁部径や形状

からTK43型式以前のものと考えられる。309は広口壺である。頸部と口縁部との境で大きく外反し、口縁端部は緩く面取りを行う。頸部外面に8条の櫛描波状文を施す。310は短径壺である。頸部で鋭く立ち上がり、口縁部まで真っすぐのびる。外面は肩部のみ自然釉がかかるが、これより上部は蓋を被せた状態で焼成を行ったため、降灰はみられない。311は壺の胴部である。外面に平行タタキのちカキ目、内面に同心円文を施す。肩部がみえることから小型の壺と考えられる。312は壺または甌である。胴部外面は沈線で区画を行い、間に9条の櫛描波状文を施す。313と314は瓶類片と考えられる。外面に平行タタキを施し、内面はナデ消しを行う。器壁の薄さから提瓶もしくは横瓶の一部と推測される。315～327は甌片である。これらは施文方法でわけることができ、外面に太い平行タタキ、内面に粗い同心円文を施すもの(315,319～322,324,326,327)と、外面に前者よりも細かい平行タタキのちカキ目、内面に細かい同心円文を施すもの(316～318,323,325)の二者が確認できた。

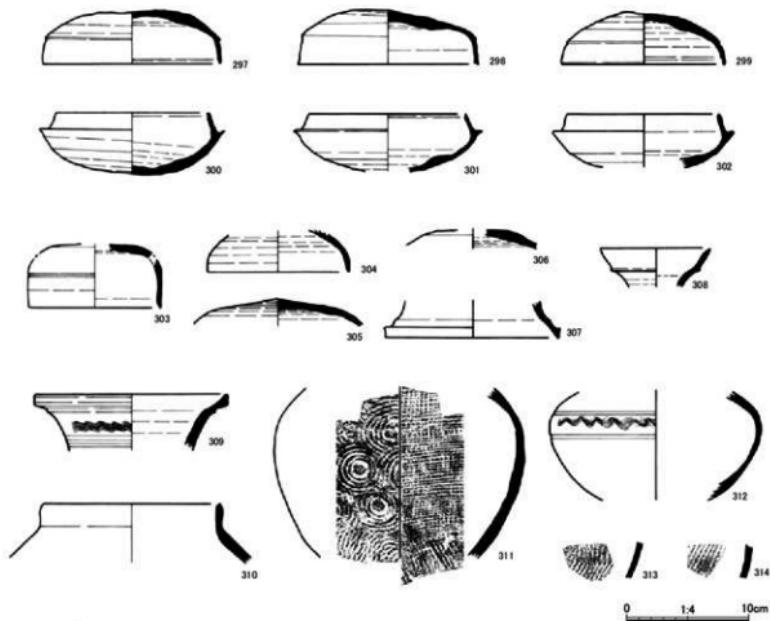


図70 須恵器(1)

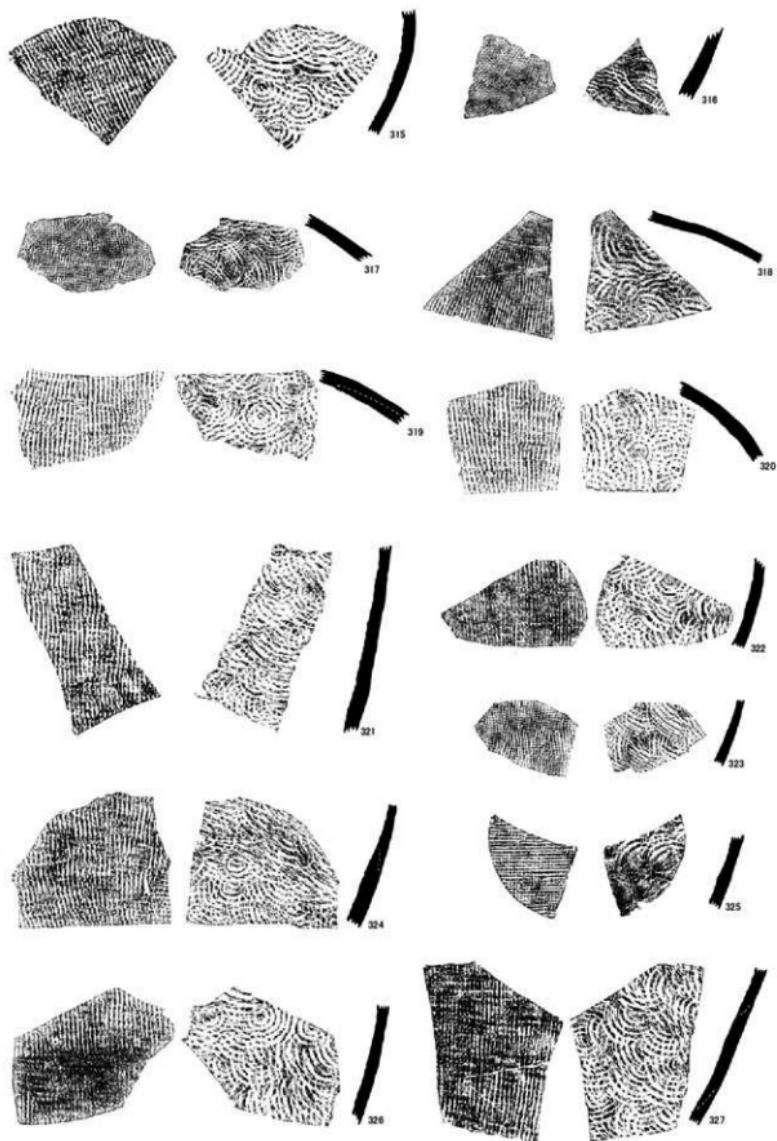


図 71 須恵器 (2)

0 1:4 10cm

表1 出土遺物観察表（土器）

()は口径・底径において復元値、器高において残存値を示す。

遺物番号	遺物名	出土地区	出土遺構	型式	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
1	土師器皿	曲輪1	1トレンチSX03	C類	(9.3)	1.4	(4.3)	
2	土師器皿	曲輪1東	SD01001	B類	(9.5)	2.3		保化痕あり
3	土師器皿	曲輪1東	SD01004	E類		(1.6)	(4.6)	
4	漸戸・美濃焼皿	曲輪1	SD01004					
5	陶器碗	曲輪1西	SD01004			(3.4)	(5.2)	漸戸・美濃焼か
6	青花碗	曲輪1	SD01004	小野E群		(1.9)	(4.9)	鶴頭心窓
7	丹波焼振跡	曲輪1東	SD01005					
8	青花皿	曲輪1南	SD01016		(12.6)	(1.8)		
9	土師器皿	曲輪1南	SD01016	A類	(10.1)	(2.5)		
10	漸戸・美濃焼皿	曲輪1南	SD01016		(9.6)	(2.0)		
11	漸戸・美濃焼皿	曲輪1南	SD01016			(1.4)	(5.6)	
12	白磁皿	曲輪1南	SD01016			(2.0)	(6.2)	染付の可能性あり
13	青花碗	曲輪1南	SD01016			(4.4)		
14	丹波焼甕	曲輪1南	SD01016		(26.2)			15と同一個体か
15	丹波焼甕	曲輪1南	SD01016				(11.4)	14と同一個体か
16	漸戸・美濃焼天目茶碗	曲輪1南	SD01016		(11.6)	(5.4)		
17	染付？小瓶	曲輪1南	SD01016		(8.6)	(3.7)		
18	土師器皿	曲輪1東登城道		D類	(13.1)	1.8		
19	土師器皿	曲輪1東登城道		D類	(13.8)	1.7	(8.0)	
20	青磁甕	曲輪1東登城道			(9.8)			口縁部
21	青磁碗	曲輪1東登城道		上田B-II類?	(12.8)	(3.3)		
22	丹波焼振跡	曲輪1東登城道		A	(26.5)	(5.5)		東斜面寄り
23	丹波焼振跡	曲輪1東登城道				(7.6)	(13.0)	
24	丹波焼振跡	曲輪1東登城道				(4.9)	(15.2)	
25	丹波焼振跡	曲輪1東登城道				13.9		方形浅跡
26	瓦質土器火鉢	曲輪1東登城道				(21.4)	(4.5)	
27	土師器皿	曲輪1北西土墨				(5.4)	(4.6)	
28	瓦質ミニチュア羽釜	曲輪1北西土墨	1トレンチ					
29	丹波焼振跡	曲輪1北西土墨						
30	白磁皿	曲輪1南西土墨	4トレンチ	小野C群	(12.0)	2.6	(7.0)	
31	白磁皿	曲輪1北西土墨	1トレンチ	小野C群	(11.6)	3.1	(6.2)	
32	青花皿	曲輪1北西土墨	1トレンチ	小野B群	(12.8)	2.7	(6.6)	陽反彫
33	土師器皿	曲輪1北		B類	(7.9)	(1.5)		保化痕あり
34	土師器皿	曲輪1南	3トレンチ	A類	7.8	1.6		
35	土師器皿	曲輪1北		E類				
36	土師器皿	曲輪1南斜面						
37	土師器皿	曲輪1南			(20.8)	(5.3)		
38	土師器皿	曲輪1南斜面						
39	土師器皿	曲輪1		萩原城分類a類				
40	土師器皿	曲輪1北						
41	土師器皿	曲輪1北		萩原城分類b類				
42	須恵器碗	曲輪1南			(12.8)	(3.5)		
43	施釉陶器皿	曲輪1北			(11.6)	(2.0)	(5.3)	
44	施釉陶器皿	曲輪1北			(10.2)	2.2	(4.4)	
45	陶器皿	曲輪1南			(8.0)	1.7		
46	陶器皿	曲輪1南			(8.6)	1.8	(5.0)	二次焼成をうけた施釉陶器か
47	陶器灯明皿	曲輪1北			(10.6)	2.0	(3.6)	受付皿・近世遺物
48	施釉陶器碗	曲輪1北・東			(14.4)	5.6	(6.5)	施釉陶器か
49	施釉陶器碗	曲輪1南			(17.3)	(3.5)		
50	陶器碗?	曲輪1東				(1.5)	5.2	
51	施釉陶器皿	曲輪1南				(1.2)	(6.0)	
52	漸戸・美濃焼天目茶碗	曲輪1北			(11.8)	(5.2)		
53	漸戸・美濃焼天目茶碗	曲輪1北			(11.0)	(4.6)		
54	漸戸・美濃焼天目茶碗	曲輪1南	3トレンチ		(11.8)	(4.5)		
55	漸戸・美濃焼天目茶碗	曲輪1南			(11.8)	6.0		
56	漸戸・美濃焼天目茶碗	曲輪1北・東			11.8	6.3	4.1	
57	陶器壺	曲輪1南	近現代盛土		(11.3)			漸戸・美濃焼?
58	陶器無頭蓋	曲輪1	2トレンチ		(10.8)	(3.1)		保付着
59	備前燒小壺	曲輪1北西斜面			(8.4)	(3.9)		
60	備前燒（丹波？）水注	曲輪1北			3.9	6.7	(4.6)	
61	陶器壺	曲輪1北	1トレンチほか		(13.6)	(5.6)		
62	丹波焼壺	曲輪1南斜面				(6.8)	(13.6)	
63	丹波焼甕	曲輪1東			(29.8)	(3.1)		
64	陶器甕	曲輪1南	4トレンチ		(20.3)	(7.8)		窓印あり
65	丹波焼振跡	曲輪1	1トレンチ	C	(30.2)	(9.6)		
66	丹波焼振跡	曲輪1北	SX01004ほか	C	31.1	14.2	13.4	

遺物 番号	種別・器種	出土地区	出土遺構	型式	口径 [cm]	器高 [cm]	底径 [cm]	備考
67	丹波焼埴輪	曲輪1北		C	(31.8)	13.0	(11.4)	窓印あり
68	丹波焼埴輪	曲輪1北		C				窓印あり
69	丹波焼埴輪	曲輪1西		B	(26.5)	(6.0)		
70	丹波焼埴輪	曲輪1南斜面						体部
71	丹波焼埴輪	曲輪1						
72	丹波焼埴輪	曲輪1北						
73	丹波焼埴輪	曲輪1北						底部
74	丹波焼埴輪	曲輪1北						底部
75	丹波焼埴輪	曲輪1北西斜面						底部
76	丹波焼埴輪	曲輪1						
77	備前焼埴輪	曲輪1～3間斜面				(4.7)	(9.4)	
78	白磁皿	曲輪1西		小野C群	(19.8)	3.2	(11.4)	
79	白磁皿	曲輪1		小野C群	(11.6)	(2.2)		
80	白磁皿	曲輪1東		小野C群		(2.7)	(6.4)	蛇の目軸刺ぎ
81	白磁皿	曲輪1北		小野C群	(11.8)	2.9	(6.4)	砂高台
82	白磁皿	曲輪1東		小野C群	(16.0)	(2.5)		
83	籠筒陶器皿	曲輪1北			(8.1)	2.2	(3.9)	
84	青磁碗	曲輪1南	4トレンチ	上田B-Ⅲ類		(4.6)		
85	青磁碗	曲輪1南		上田B-Ⅲ類	(13.7)	(4.9)		
86	青花盞？	曲輪1西			(12.0)	(1.0)		
87	青花盞	曲輪1		小野C群	(9.3)	(1.8)		基筒底皿
88	青花碗	曲輪1西		小野C群	(13.9)	(3.3)		蓋子碗
89	青花盞	曲輪1		小野E群	(13.0)	(2.5)		
90	青花盞	曲輪1	2トレンチ	小野C群	(10.8)	(2.2)		基筒底皿
91	青花盞	曲輪1		小野B群	(12.0)	(2.4)		端反皿
92	青花盞	曲輪1北		小野B群	(13.6)	(2.4)		端反皿
93	青花盞	曲輪1北			(11.4)	(2.5)		基筒底皿？
94	青花盞	曲輪1北		小野F群	(20.0)	(0.8)		つば皿
95	青花盞	曲輪1北		小野E群	(9.6)	2.4	(5.0)	
96	青花盞	曲輪1東		小野C群		(1.6)	(3.2)	基筒底皿
97	青花盞	曲輪1南		小野C群	(10.0)	3.1	(3.4)	基筒底皿
98	青花盞	曲輪1西	SX01006ほか	小野E群	(10.4)	2.3		
99	青花碗	曲輪1		小野E群		(1.7)	2.2	饅頭心碗
100	青花碗	曲輪1東			(11.2)	(3.1)		
101	青花碗	曲輪1西		小野C群		(2.9)	(6.2)	蓋子碗
102	青花碗？	曲輪1北				(1.7)	(4.6)	蓋子碗？
103	丹波焼壺	曲輪2東	SF02106			(10.7)	(14.2)	
104	土師器皿	曲輪2東	SF02108	A類	(7.3)	1.3		
105	土師器皿	曲輪2西	SX02204	B類	(11.1)	2.4		
106	丹波焼埴輪	曲輪2西	S002125					
107	丹波焼埴輪	曲輪2西	S002125					
108	土師器皿	曲輪2	SX02101下層	A類	(6.3)	1.3		岩盤下
109	土師器皿	曲輪2	SX02101(SP02124)	B類	(6.9)	1.4		
110	土師器皿	曲輪2	SX02101(SP02124)	B類	(7.1)	1.5		
111	土師器皿	曲輪2	SX02101(SP02124)	B類	(6.9)	1.5		
112	土師器皿	曲輪2	SX02101(SP02124)	B類	(8.2)	1.6		
113	土師器皿	曲輪2	SX02101中層	C類	(7.5)	1.5		
114	土師器皿	曲輪2	SX02101下層	E類				岩盤下
115	土師器皿	曲輪2	SX02101下層	E類				岩盤下
116	土師器皿	曲輪2	SX02101中層	E類	(8.1)	1.9		
117	土師器皿	曲輪2	SX02101下層？	E類	(8.9)	2.0		
118	土師器耳皿	曲輪2	SX02101(SP02124)					
119	土師器鍋	曲輪2	SX02101下層		(23.4)	(6.8)		岩盤下
120	丹波焼埴輪	曲輪2	SX02101中層	C		(13.1)		
121	丹波焼埴輪	曲輪2	SX02101中層	C		(5.2)		
122	丹波焼埴輪	曲輪2	SX02101中層					
123	青磁碗	曲輪2	SX02101中層	上田B-IV類		(4.8)	4.3	
124	須恵器壺	曲輪2				(5.2)	(10.6)	
125	瓦質土器羽釜	曲輪2東						
126	陶器皿？	曲輪2西				(2.7)	(8.8)	
127	獣耳・美濃燒小壺	曲輪2南	虎口		(5.2)	(3.5)		
128	丹波焼小壺？	曲輪2北				(5.2)	(5.4)	
129	丹波焼埴輪	曲輪2西		C		(4.6)		
130	丹波焼埴輪	曲輪2東		A		(5.4)		
131	丹波焼埴輪	曲輪2		C		(4.8)		
132	丹波焼埴輪	曲輪2						
133	丹波焼埴輪	曲輪2東						

遺物番号	種別・器種	出土地区	出土遺構	型式	口径 [cm]	器高 [cm]	底径 [cm]	備考
134	備前燒徳利	曲輪2南	虎口		(5.6)	(13.8)		
135	青磁碗	曲輪2南						
136	青磁皿	曲輪2北			(11.1)	(1.1)		
137	土師器皿	曲輪2南		B類	(7.7)	1.4		
138	土師器皿	曲輪2	虎口			(3.8)		
139	土師器鍋	曲輪2	虎口		(13.0)	(6.2)		
140	須恵器椀	曲輪2	虎口		(13.4)	(1.9)		
141	須恵器椀	曲輪2	虎口		(14.8)	(3.0)		
142	須恵器甌	曲輪2	虎口					
143	丹波焼壺	曲輪2東			(11.4)	(10.9)		
144	丹波焼壺跡	曲輪2北		C		(3.5)		窓印あり
145	丹波焼壺跡	曲輪2北		C		(4.3)		
146	丹波焼壺跡	曲輪2東		C		(4.1)		
147	丹波焼壺跡	曲輪2						156と同一個体か
148	丹波焼壺跡	曲輪2東						
149	丹波焼壺跡？	曲輪2						
150	丹波焼壺跡	曲輪2西	石敷遺構			(4.9)		167と同一個体か
151	丹波焼壺跡	曲輪2西	石敷遺構	C	(30.4)	(5.4)		
152	丹波焼壺跡	曲輪2西		C	(29.4)	(5.5)		
153	丹波焼壺跡	曲輪2東		B	(29.0)	(9.7)		
154	丹波焼壺跡	曲輪2東		B	(32.1)	14.8	(13.0)	窓印あり
155	丹波焼壺跡	曲輪2西		C	(32.0)	13.2	(14.0)	窓印あり
156	丹波焼壺跡	曲輪2南	石敷遺構			(10.6)		147と同一個体か
157	漸戸・美濃焼丸皿	曲輪2西	石敷遺構			(1.3)	(5.8)	
158	漸戸・美濃焼印花皿	曲輪2西	石敷遺構		(10.5)	2.6	(6.4)	印花皿
159	白磁皿	曲輪2西		小野C群	(12.9)	(2.3)		菊花皿
160	白磁皿	曲輪2北		小野C群	(11.4)	(2.1)		
161	白磁皿	曲輪2西		小野C群	(11.2)	(3.0)	(4.8)	
162	青花皿	曲輪2南西斜面		小野E群	(10.5)	2.5	(5.8)	
163	青花碗	曲輪2北		小野C群	(2.7)	(6.0)		蓮子碗
164	青花碗	曲輪2南・西		小野E群	(6.1)	4.4		鶴頭心碗
165	青花皿	曲輪2西		小野B群	(14.0)	2.7	7.0	瑞反皿
166	土師器皿	曲輪2南西斜面		D類	(12.5)	1.9		保化張あり
167	土師器皿	曲輪2北西土塁						150と同一個体か
168	土師器鍋	曲輪2北西斜面			(20.6)	(3.9)		
169	土師器鍋	曲輪2北西斜面			(19.2)	(6.2)		
170	須恵器椀	曲輪2北西斜面			(14.2)	(3.0)		
171	須恵器椀	曲輪2北西斜面			(14.0)	3.8	(6.0)	
172	備前焼甌	曲輪2南西斜面				(6.2)		
173	備前焼壺跡	曲輪2北西斜面				(4.0)		
174	丹波焼壺跡	曲輪2南西斜面		C		(10.4)		
175	丹波焼壺跡	曲輪2南				(3.6)		
176	丹波焼壺跡	曲輪2壁際		B	(28.6)	(8.6)		
177	丹波焼壺跡	曲輪2北西斜面		C	(34.9)	(4.8)		
178	丹波焼壺跡	曲輪2西斜面						
179	丹波焼壺跡	曲輪2南東斜面				(8.2)	(10.0)	
180	土師器皿	曲輪2北東土塁		C類	(7.5)	1.2		
181	土師器皿	曲輪2北東土塁		C類	(7.7)	1.1		
182	土師器皿	曲輪2北東土塁		C類	7.4	1.5		
183	土師器皿	曲輪2北東土塁		C類	7.5	1.8		
184	土師器皿	曲輪2北東土塁		C類	(7.8)	1.7		
185	土師器皿	曲輪2北東土塁		C類	8.0	1.9		
186	土師器皿	曲輪2北東土塁		C類	(7.6)	2.0		
187	土師器皿	曲輪2北東土塁		C類	(7.8)	2.0		
188	土師器皿	曲輪2北東土塁		C類	7.9	1.9		
189	土師器皿	曲輪2北東土塁		C類	7.2	2.1		
190	土師器皿	曲輪2北東土塁		C類			(3.9)	
191	土師器皿	曲輪2北東土塁		C類	(6.7)	1.7		
192	土師器皿	曲輪2北東土塁		C類	(7.5)	1.6		
193	土師器皿	曲輪2北東土塁		C類	7.5	1.8		
194	土師器皿	曲輪2北東土塁		D類				
195	土師器皿	曲輪2北東土塁		B類	(8.0)	2.1		
196	土師器皿	曲輪2北東土塁		A類	(9.6)	1.6		
197	土師器皿	曲輪2北東土塁		D類	(9.4)	1.7		
198	土師器皿	曲輪2北東土塁		D類	(10.2)	1.4		
199	土師器皿	曲輪2北東土塁		D類？	(12.2)	(1.8)		
200	土師器皿	曲輪2北東土塁		E類	(8.0)	2.0		

遺物 番号	種別・器種	出土地区	出土遺構	型式	口径 [cm]	器高 [cm]	底径 [cm]	備考
201	土師器皿	曲輪2北東土壘			(21.0)	(10.2)		
202	丹波焼埴輪	曲輪2北東土壘		C		(4.0)		
203	丹波焼埴輪	曲輪2北東土壘						
204	丹波焼埴輪?	曲輪2北東土壘						
205	備前焼埴輪	曲輪2北東土壘				(6.4)		
206	瀬戸・美濃焼丸皿	曲輪2南西土壘			9.2	2.0	3.6	基筒底皿
207	施釉陶器	曲輪2西土壘				1.7	(3.9)	
208	施釉陶器皿	曲輪2北東土壘			(9.5)	2.8	(3.4)	基筒底皿。見込み部に焼花
209	土師器皿	曲輪2南西下層土壘		A類	(9.2)	(1.4)		保化痕あり
210	土師器皿	曲輪2北東下層土壘	燒土層	C類	(6.9)	1.3		
211	土師器皿	曲輪2北東下層土壘	燒土層	B類	(7.9)	1.4		
212	土師器皿	曲輪2北東下層土壘	燒土層	B類	(7.5)	(2.2)		
213	土師器皿	曲輪2北東下層土壘	灰層	E類	(7.5)	1.9	(3.6)	
214	土師器皿	曲輪2北東下層土壘	燒土層	E類	(7.7)	1.7	(4.0)	
215	土師器皿	曲輪2北東下層土壘	燒土層	E類	(7.5)	1.7	(3.9)	
216	土師器皿	曲輪2北東下層土壘	燒土層	E類	(8.0)	1.7	(3.9)	
217	土師器皿	曲輪2北東下層土壘	灰層	E類	(8.3)	1.9	(3.8)	
218	土師器皿	曲輪2北東下層土壘	燒土層	E類	(8.1)	2.0	(4.3)	
219	土師器皿	曲輪2北東下層土壘	灰層	E類	(7.7)	2.0	(4.0)	
220	土師器皿	曲輪2北東下層土壘	燒土層	E類	(7.1)	1.9	4.2	
221	土師器皿	曲輪2北東下層土壘	燒土層	E類	(7.8)	2.0	4.2	
222	土師器皿	曲輪2北東下層土壘	燒土層	E類	(7.9)	2.0	(4.7)	
223	土師器皿	曲輪2北東下層土壘	燒土層	E類	(8.1)	2.0	(4.8)	
224	土師器皿	曲輪2南西土壘		E類	(8.3)	2.1	(3.8)	
225	土師器皿	曲輪2北東土壘		D類	(13.3)	2.3		
226	土師器皿	曲輪2北東下層土壘			(19.5)	(6.5)		
227	土師器皿	曲輪2北東下層土壘			(23.0)	(3.4)		
228	須恵器甕	曲輪2北東下層土壘						
229	須恵器甕	曲輪2北東下層土壘						
230	須恵器甕	曲輪2北東下層土壘						
231	須恵器鉢	曲輪2北西下層土壘	SD02301			(7.5)		
232	須恵器壺	曲輪2南西土壘			(20.0)	(6.5)		
233	須恵器鉢	曲輪2南西下層土壘			(29.6)	12.4	(5.9)	13C半ば
234	備前焼埴輪	曲輪2北東土壘				(3.8)		
235	備前焼埴輪	曲輪2北東土壘				(6.2)	16C前半	
236	備前焼埴輪	曲輪2北東下層土壘				(7.1)		開墾毎年V期
237	丹波焼埴輪	曲輪2北東土壘		C	(28.8)	(9.0)		
238	丹波焼埴輪	曲輪2南西下層土壘		D	(31.4)	(15.0)		
239	丹波焼埴輪	曲輪2南西土壘						
240	丹波焼埴輪	曲輪2南西土壘						
241	陶器鉢	曲輪2北東下層土壘						備前焼か
242	丹波焼埴輪	曲輪2北東土壘						
243	丹波焼埴輪	曲輪2北東下層土壘						
244	常滑焼甕	曲輪2北東下層土壘	燒土層			(8.4)	(15.6)	
245	常滑焼甕	曲輪2北東下層土壘						押印文
246	常滑焼甕	曲輪2北東下層土壘						押印文
247	常滑焼甕	曲輪2北東下層土壘						押印文
248	施釉陶器碗	曲輪2南西下層土壘				(4.6)	(4.7)	
249	青磁碗	曲輪2北東土壘下層	燒土層	上田B-IV類	(13.1)	(3.9)		
250	丹波焼甕	坂切・曲輪2北東土壘			(44.4)			295と同一個体か。
251	土師器皿	曲輪3		E類	(8.3)	2.0	(4.3)	
252	土師器皿	曲輪4		B類	8.4	2.4		焼化痕あり
253	土師器皿	曲輪4		B類	(9.4)	2.2		内面にハケ目
254	土師器皿	曲輪4		D類	(10.2)	2.1		焼化痕あり
255	土師器皿	曲輪4		D類	(12.0)	(1.5)		焼化痕あり
256	土師器皿	曲輪4		D類	(11.4)	1.9		
257	土師器皿	曲輪4		F類	(6.4)	1.5	(5.0)	
258	土師器皿	曲輪4	焼だまり	E類	(7.2)	1.8	(3.6)	
259	土師器皿	曲輪4	焼だまり	E類	(8.1)	2.1	(3.6)	
260	土師器皿	曲輪4				(4.0)		
261	土師器皿	曲輪4				(3.7)		
262	丹波焼甕	曲輪4						
263	備前焼甕?	曲輪4						
264	備前焼甕	曲輪4	焼だまり					
265	備前焼甕	曲輪4						
266	丹波焼埴輪	曲輪4						

遺物番号	種別・器種	出土地区	出土遺構	型式	口径 [cm]	器高 [cm]	底径 [cm]	備考
267	丹波燒搗鉢	曲輪4						
268	丹波燒搗鉢	曲輪4						
269	丹波燒搗鉢？	曲輪4			(6.2)			
270	丹波燒搗鉢	曲輪4						底部～体部 271と同一個体か
271	丹波燒搗鉢	曲輪4					(11.6)	270と同一個体か
272	白磁小皿	曲輪4	庚だより		(8.4)	(3.4)	(2.2)	
273	白磁皿	曲輪4		小野C類	(10.6)	(2.1)		
274	青磁皿	曲輪4			(10.6)	2.8	5.4	
275	土師器皿	曲輪6		E類	(7.0)	2.1	(4.2)	
276	土師器皿	曲輪6			(18.8)	(4.5)		
277	丹波燒搗鉢	曲輪7		C類			(6.5)	
278	土師器皿	曲輪14 横堀		D類	(11.8)	1.5		
279	土師器皿	曲輪14 北斜面		D類？	(13.5)	(2.1)		
280	土師器皿	曲輪14 北斜面		D類？	(11.9)	(1.8)		
281	土師器皿	曲輪14				(4.0)		
282	土師器皿	曲輪14 横堀				(3.2)		
283	土師器皿	曲輪14 横堀		萩原城分類a	(23.5)	9.3	(10.8)	
284	瓦質土器火鉢	曲輪14			(27.2)	10.5	(19.0)	浅鉢
285	丹波燒甕	曲輪14 横堀			(29.6)	(11.4)		
286	備前燒甕	曲輪14 北斜面						開塙年IV期
287	陶器搗鉢	曲輪14 北斜面						
288	備前燒甕	曲輪14						
289	丹波燒搗鉢	曲輪14						
290	土師器皿	堰切		D類	(9.0)	1.8		
291	備前燒搗鉢	堰切				(4.9)		
292	備前燒拂利	曲輪2南・南窓土壘						
293	備前燒甕？	堰切				(6.3)	(10.0)	
294	備前燒甕？	南窓土壘				(11.0)	(12.8)	
295	丹波燒甕	堰切・閉塞土壘					(20.8)	250と同一個体か
296	青磁碗	堰切閉塞土壘		上田B-II類	(13.9)	(4.3)		
297	須恵器壺蓋	曲輪2北東土壘下	ST02001		14.6	4.5		
298	須恵器壺蓋	曲輪2北東土壘下	ST02001		14.8	4.5		
299	須恵器壺蓋	曲輪2南	壇成土		(13.4)	4.2		
300	須恵器壺身	曲輪2北東土壘下	ST02001		12.5	5.2		
301	須恵器壺身	曲輪2北東土壘下	ST02001		(12.8)	(4.8)		
302	須恵器壺身	曲輪2南平坦面～整地斜面			(12.4)	(4.4)		
303	須恵器壺蓋	曲輪2南	虎口下層		(10.8)	(5.3)		
304	須恵器壺蓋か・蓋蓋	曲輪2南登城道			(13.6)	(3.4)		
305	須恵器壺蓋	曲輪2南登城道			(10.8)	(5.3)		
306	須恵器壺蓋	曲輪2南	虎口下層			(1.7)		
307	須恵器高杯	曲輪4				(3.1)	(14.2)	
308	須恵器罐	曲輪1	1トレンチ		(9.3)	(3.3)		
309	須恵器広口壺	曲輪4			(15.6)	(4.7)		
310	須恵器包頭壺	曲輪2南西斜面			(14.4)	(4.9)		
311	須恵器壺	曲輪2北東土壘				(14.0)		
312	須恵器壺小罐	曲輪4				(9.0)		
313	須恵器瓶類？	曲輪4						
314	須恵器瓶類？	曲輪4						
315	須恵器壺	曲輪1北東斜面						
316	須恵器壺	曲輪1斜面						
317	須恵器壺	曲輪2北西斜面						
318	須恵器壺	曲輪2南西斜面						
319	須恵器壺	曲輪2南西斜面						
320	須恵器壺	曲輪2						
321	須恵器壺	曲輪2北西～南西土壘	下層土壘検出中					
322	須恵器壺	曲輪2南西斜面						
323	須恵器壺	曲輪2南	虎口					
324	須恵器壺	曲輪2南	壇成土					
325	須恵器壺	曲輪2						
326	須恵器壺	曲輪2						
327	須恵器壺	曲輪4						

表2 出土遺物観察表（石製品）

遺物 番号	遺物名	出土地区	出土遺構	長 [cm]	幅 [cm]	高 [cm]	重 [g]	備考
S1	硯	曲輪2南		(6.65)	5.50	1.40	75.66	表面に墨跡あり
S2	基石	曲輪1東		2.15	1.65	0.55	3.00	
S3	基石	曲輪1東		2.00	2.05	0.55	3.91	
S4	基石	曲輪2南西土壘		2.00	1.85	0.45	2.88	
S5	基石	曲輪2東		2.18	1.65	0.40	2.78	

表3 出土遺物観察表（金具類）

遺物 番号	遺物名	出土地区	出土遺構	材質	頭部 形状	法量 [cm]			備考
						長	幅	厚	
M1	角釘	曲輪1北		鉄	卷	9.79	0.69	0.64	完形
M2	角釘	曲輪1南		鉄	卷	(9.65)	0.61	0.50	先端部欠
M3	角釘	曲輪1東	SX01002	鉄	卷	[5.70]	0.64	0.59	頭部・先端部欠
M4	角釘	曲輪1北		鉄	卷	[5.08]	0.79	0.66	先端部欠
M5	角釘	曲輪1北		鉄	卷	[3.82]	0.72	0.70	頭部・先端部欠
M6	角釘	曲輪1北		鉄	卷	[4.97]	0.56	0.64	先端部欠
M7	角釘	曲輪1北		鉄	卷	[2.46]	0.64	0.49	頭部下半欠
M8	角釘	曲輪2		鉄	卷	[4.77]	0.66	0.44	先端部欠
M9	角釘	曲輪2 虎口北側		鉄	卷	[4.66]	0.55	0.59	先端部欠
M10	角釘	曲輪2 南西下層土壘(南)		鉄	卷	(5.05)	0.60	0.49	先端部欠
M11	角釘	曲輪1北		鉄	卷	(4.50)	0.58	0.46	先端部欠
M12	角釘	曲輪2 南西斜面		鉄	卷	7.35	0.39	0.46	完形
M13	角釘	曲輪1 東登城道		鉄	卷	(6.20)	0.48	0.47	先端部欠
M14	角釘	曲輪6	SK06001	鉄	卷	(5.26)	0.42	0.47	先端部欠
M15	角釘	堰切東端		鉄	卷	(4.93)	0.43	0.43	先端部欠
M16	角釘	曲輪2 北西斜面北部		鉄	卷	(5.18)	0.45	0.44	先端部欠
M17	角釘	曲輪1北		鉄	卷	(4.37)	0.55	0.41	先端部欠
M18	角釘	曲輪2		鉄	卷	(5.75)	0.55	0.40	先端部欠
M19	角釘	曲輪1北		鉄	卷	(5.45)	0.59	0.42	頭部・先端部欠
M20	角釘	曲輪1南	SP01064	鉄	卷	6.03	0.38	0.29	完形
M21	角釘	曲輪2 北西下層土壘(北)		鉄	卷	(4.62)	0.49	0.40	先端部欠
M22	角釘	曲輪2北 土壘		鉄	卷	4.74	0.39	0.29	完形
M23	角釘	曲輪1北		鉄	卷	(5.14)	0.43	0.41	頭部・先端部欠
M24	角釘	曲輪1 東登城道		鉄	卷	(4.45)	0.44	0.42	先端部欠
M25	角釘	曲輪2東 北東土壘東端		鉄	卷	(4.16)	0.35	0.32	先端部欠
M26	角釘	曲輪2 東北側南端		鉄	卷	[4.01]	0.56	0.47	頭部・先端部欠
M27	角釘	曲輪2東 北東土壘東端		鉄	卷	(3.81)	0.33	0.34	先端部欠
M28	角釘	曲輪4		鉄	卷	(3.94)	0.44	0.37	先端部欠
M29	角釘	曲輪2 登城道		鉄	卷	(3.61)	0.43	0.41	先端部欠
M30	角釘	曲輪1北		鉄	卷	[3.67]	0.44	0.43	先端部欠
M31	角釘	曲輪2南	SX02101 下層	鉄	卷	[3.49]	0.54	0.45	先端部欠
M32	角釘	曲輪2東 北東土壘東端		鉄	卷	[3.27]	0.35	0.36	先端部欠
M33	角釘	曲輪1北		鉄	卷	4.40	0.52	0.39	完形
M34	角釘	曲輪14		鉄	卷	4.05	0.37	0.29	完形
M35	角釘	曲輪1南		鉄	卷	[3.25]	0.54	0.47	先端部
M36	角釘	曲輪14		鉄	卷	[2.78]	0.43	0.35	先端部欠
M37	角釘	曲輪2 北東土壘(北)		鉄	卷	(3.47)	0.49	0.44	先端部
M38	角釘	曲輪2東 北東土壘東端		鉄	卷	(3.08)	0.44	0.34	先端部欠
M39	角釘	曲輪1北		鉄	卷	(2.43)	0.55	0.34	先端部
M40	角釘	曲輪1～3斜面		鉄	卷	[2.26]	0.42	0.36	先端部
M41	角釘	曲輪7		鉄	卷	3.00	0.33	0.28	完形
M42	角釘	曲輪2西	SK02301	鉄	卷	2.95	0.40	0.34	完形
M43	角釘	曲輪1西	石敷土	鉄	卷	(4.05)	0.43	0.36	頭部
M44	角釘	曲輪1北		鉄	卷	[3.29]	0.46	0.36	頭部・先端部欠
M45	角釘	曲輪1北		鉄	卷	(2.80)	0.46	0.38	頭部・先端部欠
M46	角釘	曲輪1北		鉄	卷	[2.00]	0.33	0.31	先端部
M47	角釘	曲輪2東 北東土壘東端		鉄	折	5.36	0.55	0.44	完形
M48	合釘	曲輪2東 北東土壘(南) 中段		鉄	—	4.89	0.53	0.52	完形
M49	合釘	曲輪1北		鉄	—	(5.35)	0.48	0.43	片端部欠
M50	切釘	曲輪2南	SK02102	鉄	—	(4.84)	0.60	0.59	先端部欠
M51	切釘	曲輪1北 土壘		鉄	—	(6.16)	0.68	0.55	先端部欠
M52	折釘	曲輪1 東登城道		鉄	—	[3.70]	0.59	0.56	頭部・先端部欠
M53	鉗	曲輪1 西斜面		鉄	平丸	3.10	0.36	—	完形
M54	金具	曲輪2～曲輪9斜面		鉄	—	4.78	1.48	0.26	円形孔あり
M55	壹金	曲輪1南		鉄	—	[5.77]	1.54	0.73	彌止等に接続か

参考 M18・19 は写真のみを掲載。

参考の長さにおける 0 は、欠損しているが全形を大きく損なっていないと考えられる計測値。[] は、全形を著しく損なっている計測値。

表4 出土遺物観察表（鐵）

遺物番号	遺物名	出土地区	出土遺構	材質	形態	躰身部法量 [cm]		茎格 [cm]		重量 [g]
						最大長	最大幅	断面形	最大径	
M56	鐵	曲輪1西		鉄	実根	2.94	0.87	円～方形	0.41	(4.16)
M57	鐵	曲輪1東	SX01005	鉄	実根	3.47	0.84	円形	0.41	(5.20)
M58	鐵	曲輪7		鉄	実根	2.08	1.16	長方形	0.43	(7.08)
M59	鐵	曲輪1南		鉄	実根	1.52	1.02	円～方形	0.43	(5.07)
M60	鐵	環切東端		鉄	実根	(1.89)	1.24	長方形	0.45	(5.01)
M61	鐵	曲輪2 虎口		鉄	実根	2.31	1.16	円～方形	0.41	(4.13)
M62	鐵	曲輪2南	SX02101 下層	鉄	実根	(2.10)	1.20	方形	0.48	(4.21)
M63	鐵	曲輪1南		鉄	実根	(3.29)	1.12	長方形	(0.53)	(7.36)
M64	鐵	曲輪2 登城道		鉄	実根	2.10	1.01	方形	—	(4.03)
M65	鐵	曲輪1 東登城道		鉄	実根	2.25	0.80	長方形	0.39	(3.02)
M66	鐵	曲輪2～曲輪9斜面		鉄	彎股	(2.15)	(2.27)	方形	0.38	(2.39)
M67	鐵	曲輪1西		鉄	彎股	(2.20)	(2.72)	方形	0.52	(3.02)
M68	鐵	曲輪1東		鉄	彎股	(2.10)	(2.12)	方形	0.45	(3.22)
M69	鐵	曲輪2 南西斜面		鉄	彎股	(1.98)	(2.28)	方形	0.43	(1.60)

表5 出土遺物観察表（鉄砲玉）

遺物番号	遺物名	出土地区	出土遺構	材質	径 [cm]	重量 [g]
M70	鉄砲玉	曲輪4中央		鉄	1.10	6.95

表6 出土遺物観察表（その他金属製品） ※（）は、欠損しているが全形を大きく損なっていないと考えられる計測値。

遺物番号	遺物名	出土地区 / 出土遺構	材質	法量 [cm]			備考
				長	幅	寸	
M71	容器片	曲輪2	鉄	(4.80)	—	0.30	
M72	容器片	曲輪1 東登城道	鉄	(3.10)	—	0.55	
M73	容器片	曲輪1北	鉄	(3.83)	—	0.29	
M74	容器片	曲輪1北	鉄	(2.97)	—	0.40	
M75	皿	曲輪2北	鉄	3.10	26.2	0.30	器高・器径は図上復元
M76	短刀	曲輪2 北西斜面	鉄	残存長 (19.78)	身幅 2.11	身厚 0.69	鍔は鉄製で装飾なし、柄部に目釦穴あり
M77	鉈	曲輪4	鉄	刃部長 9.20	身幅 4.52	身厚 0.99	両刃／削込刃金の共柄鉈、先端部は刃がぐくややハナ状、柄部に木質遺存
M78	刀子	曲輪14	鉄	(12.31)	2.71	0.31	
M79	刀物（柄）	曲輪2 石垣遺構	鉄	(2.94)	1.58	0.61	
M80	刀物（柄）	曲輪2東 北東土堀東端 / 壁土層	鉄	(3.80)	2.43	0.45	
M81	鍔（柄）	曲輪2南 / SX02101 中層	鉄	(6.06)	(3.07)	0.27	
M82	鑿	曲輪2南 / SX02101 中層	鉄	9.90	1.08	0.97	
M83	鑿	曲輪2 北東下層土堀（西） / 炭層	鉄	5.63	1.43	0.88	
M84	鑿	曲輪2東	鉄	(4.04)	1.01	0.96	
M85	針状鉄製品	曲輪7	鉄	(5.24)	0.26	—	
M86	針状鉄製品	曲輪7	鉄	(5.54)	0.27	—	
M87	針状鉄製品	曲輪2～曲輪9斜面	鉄	(16.29)	0.38	—	
M88	針状鉄製品	曲輪2北	鉄	—	0.38	—	
M89	棒状鉄製品	曲輪1北	鉄	(6.30)	0.48	—	
M90	棒状鉄製品	曲輪1北	鉄	(5.56)	0.42	—	
M91	棒状鉄製品	曲輪1北	鉄	(4.48)	0.55	—	
M92	環状金具	曲輪1南	鉄	—	0.26	—	
M93	環状金具	曲輪1	鉄	—	0.34	—	
M94	延板状鉄製品	曲輪1北	鉄	(4.06)	0.75	0.26	柄？
M95	延板状鉄製品	曲輪1南	鉄	(5.01)	0.88	0.38	柄？
M96	延板状鉄製品	曲輪2西	鉄	(11.51)	1.69	0.44	柄？
M97	小札	曲輪1東 / SD01005	鉄	—	—	0.20	円孔8ヶ所
M98	薄板状金具	曲輪1南 / SD01016	鉄	—	—	0.12	円孔1ヶ所
M99	薄板状金具	曲輪1 東登城道	鉄	—	—	0.13	折り曲げ
M100	不明鉄製品	曲輪2西	鉄	—	—	0.40	結合用の金具？
M101	不明鉄製品	曲輪1北	鉄	(7.63)	4.14	1.75	
M102	煙管	曲輪4 東側斜面	真鍮 / 鉄	全長 18.48	羅字幅 1.42	羅字厚 0.96	羅首・吸口は真鍮製、羅字は鉄製、喧嘩煙管？
M103	筈	曲輪1西 / SD01004	銅	(12.70)	1.14	0.25	音部～耳横部欠
M104	筒状銅製品	曲輪2北	銅	(2.67)	0.53	—	
M105	釘	曲輪1南 / SD01016	銅	3.02	0.15	—	
M106	飾金具	曲輪2東	銅	(2.12)	(1.35)	0.09	

表7 出土遺物観察表（錢貨）

遺物番号	遺物名	出土曲輪（周辺含）	銭種	細別	国・王朝 (初年)	計測値 (法徳mm, 質量g)						出土状態
						外縁 外径	外縁 内径	内郭 外径	内郭 内径	外縁厚	質量	
M107	銅錢	曲輪2	祥符通寶	一	北宋 (1009)	24.82	19.48	7.47	6.39	1.15	1.34	單
M108	銅錢	曲輪2	天聖元寶	真書	北宋 (1023)	21.81	18.86	8.94	6.90	1.28	1.47	單
M109	銅錢	曲輪2	景祐元寶	真書	北宋 (1034)	24.91	20.44	9.43	8.43	1.00	1.48	單
M110	銅錢	曲輪7	嘉祐通寶	真書	北宋 (1056)	24.34	19.90	8.86	7.41	0.99	4.46	複 (2)
M111	銅錢	曲輪2	熙寧元寶	真書	北宋 (1068)	24.31	19.78	8.24	7.09	1.16	2.45	單
M112	銅錢	曲輪2	元豐通寶	行書	北宋 (1078)	24.22	17.73	8.37	6.46	1.10	3.02	單
M113	銅錢	曲輪6	元豐通寶	行書	北宋 (1078)	24.52	18.34	8.24	6.68	1.05	(1.50)	單
M114	銅錢	曲輪1	政和通寶	分摺	北宋 (1111)	24.27	20.43	7.83	6.63	1.16	2.21	單
M115	銅錢	曲輪2	洪武通寶	無背	明 (1368)	23.22	17.22	6.94	5.79	1.56	1.89	單
M116	銅錢	曲輪2	寛永通宝	古寛永	—	23.99	19.57	7.07	5.48	1.25	3.12	單
M117	銅錢	曲輪2	寛永通宝	古寛永	—	23.57	18.45	7.10	5.76	1.04	2.37	單
M118	銅錢	曲輪1	寛永通宝	古寛永	—	23.29	18.86	7.31	5.96	1.08	2.77	單
M119	銅錢	曲輪1	寛永通宝	古寛永	—	24.08	18.62	7.01	5.35	1.14	2.31	單
M120	銅錢	曲輪2	寛永通宝	新寛永	—	23.06	19.26	7.65	6.60	1.13	1.47	單
M121	銅錢	曲輪2	寛永通宝	不明	—	23.74	18.66	7.45	6.67	0.82	1.45	單
M122	銅錢	曲輪2	寛永通宝	不明	—	22.94	19.68	8.35	7.16	1.00	1.37	單
M123	銅錢	曲輪2	寛永通宝	不明	—	—	—	—	—	—	—	單
M124	銅錢	曲輪2	寛永通宝	新寛永	—	22.93	17.66	8.78	6.81	1.11	2.36	單
M125	銅錢	曲輪4	寛永通宝	新寛永	—	22.37	19.18	7.54	6.25	1.07	1.57	單
M126	銅錢	曲輪2	寛永通宝	新寛永	—	22.53	16.95	7.71	6.70	0.92	1.84	單
M127	銅錢	曲輪1	寛永通宝	新寛永	—	22.61	17.15	8.12	6.31	0.90	1.62	單
M128	銅錢	曲輪2	寛永通宝	新寛永	—	22.87	18.90	7.89	6.44	0.84	2.00	單
M129	銅錢	曲輪1	寛永通宝	新寛永	—	23.67	18.50	7.55	5.96	1.24	3.37	單
M130	銅錢	曲輪1	寛永通宝	新寛永	—	23.64	19.02	7.79	6.68	0.97	1.95	單
M131	銅錢	曲輪1	寛永通宝	新寛永	—	24.88	20.10	7.25	5.98	0.95	2.09	單
M132	銅錢	曲輪1	寛永通宝	新寛永	—	22.69	17.14	7.98	6.38	0.95	1.63	單
M133	銅錢	曲輪1	寛永通宝	新寛永	—	20.67	17.59	7.97	6.87	0.99	0.93	單
M134	銅錢	曲輪1	寛永通宝	新寛永	—	22.05	18.15	7.22	6.12	0.94	1.22	單
M135	銅錢	曲輪1	寛永通宝	新寛永	—	22.35	18.67	8.67	7.22	1.00	1.71	單
M136	銅錢	曲輪1	寛永通宝	新寛永	—	22.08	17.17	7.98	6.75	1.04	1.82	單
M137	銅錢	曲輪1	寛永通宝	新寛永	—	21.91	16.89	6.93	5.74	1.03	1.35	單
M138	銅錢	曲輪1	寛永通宝	新寛永	—	21.57	16.96	6.68	5.73	0.82	1.03	單
M139	銅錢	曲輪1	寛永通宝	新寛永	—	23.48	18.59	7.64	6.16	1.30	2.61	單
M140	銅錢	曲輪1	寛永通宝	新寛永	—	20.98	17.96	8.07	6.52	1.05	1.52	單
M141	銅錢	曲輪1~3	寛永通宝	新寛永	—	22.22	17.31	7.92	6.26	1.12	2.55	單
M142	銅錢	曲輪1	寛永通宝	新寛永	—	—	18.61	8.02	6.50	1.11	2.00	單
M143	銅錢	曲輪2	寛永通宝	新寛永	—	24.36	19.96	7.93	6.91	0.87	2.15	單
M144	銅錢	曲輪2	寛永通宝	新寛永	—	22.85	18.75	7.50	6.30	1.06	1.81	單
M145	銅錢	曲輪1	寛永通宝	新寛永	—	24.10	19.25	7.59	6.39	1.15	1.78	單
M146	銅錢	曲輪2	寛永通宝	新寛永	—	22.19	16.87	8.06	6.48	1.06	2.01	單
M147	銅錢	曲輪2	不明	—	—	—	—	—	6.82	0.87	(0.87)	單
M148	銅錢	曲輪2	不明	—	—	24.06	18.84	9.47	7.00	1.34	5.68	複 (3)
M149	銅錢	曲輪1	寛永通宝	—	—	24.15	19.30	8.38	6.25	1.33	2.90	單
M150	銅錢	曲輪1	寛永通宝	—	—	24.86	20.12	8.80	6.70	1.70	2.99	單
M151	銅錢	曲輪1	寛永通宝	—	—	—	—	—	—	1.94	(0.86)	單
M152	銅錢	曲輪2	不明	—	—	—	—	—	—	1.41	(0.47)	單
M153	銅錢	曲輪1	寛永通宝	—	—	24.86	20.21	8.76	6.84	1.46	1.44	單

第5章 まとめ

第1節 遺構の検討

(1) 調査成果の概要

松原城跡の調査では土壘で囲まれた主要な曲輪のほか、切岸、堀切、横堀、礎石建物などを確認し、想像以上に堅固に築造されていたことが判明した。また、斜面部への盛土・整地や土壘のかさ上げなど複数の遺構面を確認し、城郭の築城時から改修を経て廃城に至るまでの流れを読みとることができた。築城時の土壘は地山を削り出し、あるいは斜面部へ盛土してから築造されていた。改修時には元の土壘上に一気に盛土してかさ上げされており、丁寧な築盛は見られなかった。短期間のうちに防御性を高める必要に迫られたものと思われる。また、堀切には閉塞土壘を設けるなど、より侵入が困難になるように工夫が施されている。

曲輪2では築城以前のⅠ期、築城時のⅡ期、改修時のⅢ期、廃城後のⅣ期の4時期を確認した。曲輪1は後世の改変が著しく、改修後あるいは廃城後の遺構面のみ確認した。

(2) 築城造成過程

城山は眺望の効く独立丘陵で、規模も適度にあるため城域として選地されたのであろう。まず曲輪1・2の平坦面を確保する造成工事が行われたと思われる。造成工事前の丘陵頂部の状態は削平されてうかがいしれないが、西側の丘陵と同様、緩やかな頂部であったと推定される。

曲輪1の造成工事は、北東側斜面は自然地形が残り人為的な改変は見受けられない。南東の曲輪3側斜面についても、下部で切岸している以外は上半部での整地・盛土は確認できなかつた。南西部は崖線が直線的であるため、削り取って切岸していると思われる。大きく造成されているのは平坦面と曲輪2側斜面で、堀切のラインに沿うように整形されている。曲輪2側斜面の中段地山面には、堀切中央地点から曲輪14までの間に小さな平坦面が存在した。平坦面上には表土層はなく、その上に水平堆積が見られ最終的に流土で覆われている。帯曲輪とも考えられるが、最終的には堀切に対する広大な斜面として存在していたようである。

曲輪2は方形を意識して造成されている。南部縁辺部では暗灰色粘質土上に黒褐色の旧表土が確認された。この部分は傾斜が10度前後と緩く、暗褐色粘性シルト・黒褐色粘性細砂まじりシルト・ぶい黄褐色粘性シルトなどを10cm前後の厚さで曲輪内部から外側に向かって盛土している。また凝灰質砂岩礎も放り込まれていた。この上に20～30cmの厚さで整地土を盛って造成面を形成している。

南西斜面では、斜面部に対して灰白色シルトブロックまじりの暗褐色シルト・黄褐色シルトの斜め堆積が見られた。斜面部外側に押し出すような形で平坦面を広げる盛土をしつつ切岸を形作っている。また、平坦面から約3m下で、横堀状の窪みをもつ段が存在する。改修時には、この段を基底部として版築状の盛土で斜面部を一体として整形し、上層土壘の基盤としている。この版築状堆積は平坦面造成の盛土とは逆に内側に傾いており、土圧を考慮した積み方と考えられる。ただ層序を詳細に観察すると、斜面部盛土と拡張造成土とに対応すると思われる土層が高低差をもって見られ、元の造成盛土の一部が自然的要因でずれた可能性もある。なお、北東土壘でも、外側は若干ずれており、傾斜に対する強度不足かずれを生じさせるほどのなんらかの力が働いたと考えられる。また、土壘への盛土は内側が基本であり、外側への盛土はあまり見られないという指摘もいただいた。この段が築城当時のものであるならば、横堀あるいは小曲輪と傾斜のきつい

切岸を捨てて、斜面にした意味を問わなければならないが、明確な解答は得ていない。

西部では、ごく緩い傾斜をもつ旧表土を検出した。北西辺南半では旧表土に伴う石列を検出している。石列の大小はあるが約50cm間隔で一列に並べられ、それ上方に平坦面を描えている。あたかも階段状に並ぶため、築城直前の登坂路であった可能性がある。

北東辺は、曲輪4に続く切岸となる。平坦部の整地はほとんど見られず、土壘は斜面部に直接構築されるようである。旧地形復元ラインから、切岸を造った凝灰質砂岩を含む土砂で曲輪4の外側へ盛土し、平坦面を広げていることがわかる。

(3) 土壘構築

第3章で既述のとおり、曲輪2の土壘は既存の下層土壘に盛土をして上層土壘を構築していることが判明した。基本的には薄く土を重ねていき盛土していたようで、縦断面の観察では北東土壘から構築し、徐々に北西側へ盛土を伸ばしていく過程がうかがえる。他の調査事例でみられるような小規模な土饅頭を並べ、その間を埋めていく工法は取られていない。

築城に係る土量に関しては、西脇市水尾城跡（西脇市郷土資料館1992）、西紀町（現丹波篠山市）内場山城跡（兵庫県教育委員会1993）などで土量計算が試みられている。松原城跡では、特に曲輪2の上層土壘に伴う土砂がどこから搬入されたのかを考える上で、土量計算を行うことが解決の糸口となると思われる。

そこで、各土壘の断ち割り断面図から嵩上げ部分の土量を算出していくことにすると、ごく一部分の数値を基準に全体を推量することとなり、誤差が大きく推定の上に推定を重ねた概算的な結果であることをあらかじめ断っておきたい。

まず、南西・北西・北東土壘の各断面図で上層土壘構築に伴う土層の面積を算出した。そこにそれぞれの土壘の長さを掛けて体積を求めた。土壘の長さは便宜上、土壘上面の端およびコーナー部分の中心を基点に土壘中心線で計測した。

その結果、南西土壘は断ち割り断面での面積は5.59 m²、土壘の長さは19.58 m、体積は約109.5 m³となる。同様に北西土壘は面積9.03 m²、長さ33.86 mで体積は305.8 m³、北東土壘は面積2.26 m²、長さ28.98 mで65.5 m³となる。土量の総合合は約480 m³である。

ここで、曲輪2の土壘に対する改修後の盛土は、濁りの少ない地山由来と思われる白色系のシルトであったことを想起すると、改修時に最も手近な地山土の入手先は平坦面と堀切であると推定される。

まず北西土壘断ち割り断面を検討すると、下層土壘に対応する平坦面が石敷遺構を含む遺構

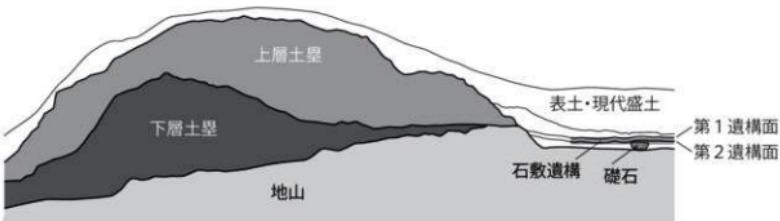


図 72 土壘断面模式図

面に削平されていることがうかがえる。その深度は約 0.3 m であり、曲輪2平坦面の面積 750 m²を掛けると、土量は約 225 m³と算出される。

次に堀切が当初の V 字形から箱型へと改修されたと推論してみる。堀切中央部分では上端約 5m、下端約 2m、深さ約 2.4 m の台形を呈しており、堀切の長さは約 38 m である。ここから読み取れる土量は約 317.5 m³ である。同じ堀幅・深度で V 字形であった場合は、掘削に伴った土量は約 226.8 m³となる。すなわちその差約 90.7 m³が、形状の違いによる土量となる。

両者の合計は 315.7 m³となり、土壌嵩上げの盛土量との差は約 165 m³と乖離が大きい。しかし、供給先の大半は平坦面の削平土であり、その他不足分は別の個所からの掘削土で賄われたと考えることも可能ではないだろうか。北西土壌断面では、新たな盛土の下半は若干汚れた（土壤化した土が混ざった）土層で、上半は濁りのない白灰色シルト層の堆積が観察できる。このことは、表土まじりの削平土が最初に積み上げられ、その後さらに掘削した混じりけのない地山土が積み上げられた結果とみることもできよう。

(4) 下層土壌沿いの溝 (SD02301)

松原城跡では下層土壌の曲輪内部側に沿って、溝が検出された。同じ神戸市北区に存在する淡河城跡の第2次調査では、土壌基底部の曲輪内側に沿って幅 1m 前後、深さ 0.30m 前後の溝が平行して掘削されていた。堆積状況から滯水状態も考えられている（神戸市教育委員会 2006）。

また、三木市二位谷奥付城跡 C における発掘調査では、T1 で土壌の両側裾から幅 1.3 ~ 1.9 m、深さ 0.65 ~ 0.8 m の溝を検出している。報告では、溝の掘削に伴う排土をかき上げて土壌を造成したと推定されている（三木市教育委員会 2013）。

松原城跡の事例は、土壌下に位置することから溝としての機能ではなく、土壌の位置を決定するための区画溝であると思われるため上記の例とは若干異なるが、土壌に平行に伴う溝の存在は今

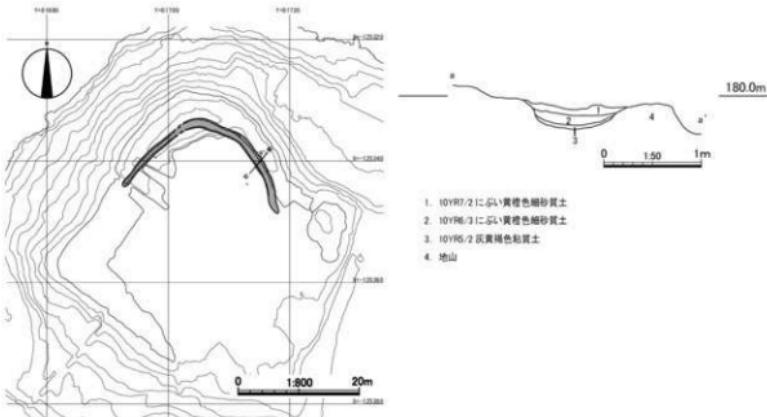


図 73 SD02301 の位置と断面図

後留意する必要があろう。

(5) 建物・施設

曲輪内からの建造物は、曲輪2の礎石建物1棟以外は確認できていない。ただ、建物に伴う遺構であろう石敷遺構は曲輪1の他に曲輪2でも検出しており、石敷遺構のみである曲輪1においても建物が存在した可能性は高い。その他、曲輪1では被熱が認められる方形の小さな高まりや同規模の石組みなどもあり、何らかの施設があったと思われる。その他、土星上や縁辺部では、櫓や堀に伴う柱穴など構造物が設けられた痕跡は確認できなかつた。また、虎口や登城道も調査で確定できず、門などの施設も未検出である。

礎石建物は柱間が1.95 mを測り、尺貫法で換算すると6尺4寸強となる。

(6) 閉塞土塁

松原城跡では特徴的な防御施設として、閉塞土塁が確認された。閉塞土塁は曲輪1と曲輪2間の堀切の東端に位置し、曲輪4からの侵入を阻止する機能が考えられる。城域全体から見れば小さな施設ではあるが、有効な防御力を發揮する。

周辺では、松原城跡の北東に位置する立石城跡で確認されている。方形に近い曲輪が南北に並び、曲輪間には堀が存在する。堀が東側の横堀に向かって開口する箇所に閉塞土塁が設けられている。立石城跡は荒木村重謀反の際に、三田城攻めの陣城として築かれたと推定されている。

また、播磨地域に目を広げると、加古川市野村城跡や加西市満久城跡などが知られる。野村城跡は西側に主郭が位置し、東側曲輪は堀によって南北に分割される。閉塞土塁はこの堀の外堀側端に設置されている。野村城跡は三木城攻めに際しての付城と推定されている(兵庫県教育委員会 1991)。満久城跡では、曲輪間のL字状に屈折した堀の北側斜面側端に閉塞土塁が設置されている。満久城跡もまた織田方の城郭と考えられている(河内城・満久谷遺跡調査会ほか 1989)。

閉塞土塁は戦国末期から織豊期の築城技術とされており、野村城跡など既存の城郭の改修によって設置された例も存在している。

松原城の閉塞土塁は北西の三田側を向いており、同方向からの攻撃に備えたものと推測される。これは、松原城が築城当初は三田城の支城として築かれたこととは整合をなさないものといえる。また、閉塞土塁内から出土した丹波焼甕は、15世紀代のものであり、前代の遺物を含んだ土砂を用いて構築したものと考えられる。これらのことから、松原城の閉塞土塁は、改築によつて設けられた16世紀代において、当城に期待された役割が築城当初とは異なっていたことを推測させる遺構ともいえる。

第2節 遺物の検討

(1) 調査成果の概要

遺物は土師器皿、陶器擂鉢、天目茶碗、輸入磁器、鉄鏃、鉄砲玉、釘、錢貨などが出土した。時期は15～16世紀のものが多く含まれる。

(2) 分布状況

遺物の出土位置に関しては、曲輪の面積が広い曲輪1と曲輪2は東西南北の4区画に分割し、また金属製品や錢貨だけでなく時期の特定が可能な遺物などは出来る限り座標を落として取り上げた。掘削中に原位置が動いた資料も少なくないが、遺物の分布状況や出土傾向、接合関係などから以下の様相が見えた。各器種における点数は、観察表(表1～7)および器種組成表(表8)の通りである。なお、未報告を含めた資料といふのは報告書掲載点数を含めたすべての出土総数である。

土師器

図示した土師器皿75点のうち、52点は曲輪2から出土し、36点は北東土塁から出土した。未報告の資料も含めても、圧倒的に曲輪2からの出土が多く、北東土塁からの出土数が顕著である。また、土塁の上層と下層では器種の傾向が異なる。上層では手づくね皿のC類が占めており、下層ではE類の糸切り皿が占めている。他の曲輪や曲輪2の平坦面では見られない傾向である。

次いで曲輪1(未報告108点)、曲輪4(未報告53点)の順に出土が多い。未報告のものも含め、C・E類のほとんどは土塁およびSX02101内からの出土であり、分布に偏りがみられる。

表8 松原城跡器種組成表

器種		報告書 掲載個体数	%	未報告含む 個体数	%
土師器	A	6	2.03%	535	43.32%
	B	13	4.39%		
	C	17	5.74%		
	D	15	5.07%		
	E	23	7.77%		
	F	1	0.34%		
	耳皿	1	0.34%		
須恵器	鏡	17	5.74%	52	4.21%
	擂鉢	5	1.69%	15	1.21%
	その他	0	0.00%	73	5.91%
	中世	13	4.39%	13	1.05%
瓦質土器	羽釜	1	0.34%	11	0.89%
	ミニチュア羽釜	1	0.34%	1	0.08%
	火鉢	2	0.68%	2	0.16%
	壺	4	1.35%	5	0.40%
丹波焼	甕	7	2.36%	11	0.89%
	擂鉢	64	21.62%	69	5.59%
	德利	0	0.00%	1	0.08%
	その他	1	0.34%	1	0.08%
備前焼	壺	2	0.68%	2	0.16%
	甕	5	1.69%	7	0.57%
	擂鉢	8	2.70%	13	1.05%
	德利	2	0.68%	2	0.16%
常滑焼	その他	2	0.68%	2	0.16%
	甕	4	1.35%	23	1.86%
	皿	6	2.03%	7	0.57%
	天目茶碗	6	2.03%	7	0.57%
瀬戸・美濃焼	椀	0	0.00%	2	0.16%
	その他	1	0.34%	4	0.32%
	甕	7	2.36%	8	0.65%
	擂鉢	5	1.69%	9	0.73%
	壺	3	1.01%	30	2.43%
	甕	0	0.00%	157	12.71%
	その他	4	1.35%	78	6.32%
陶器	皿	2	0.68%	2	0.16%
	碗	7	2.36%	17	1.38%
	その他	1	0.34%	5	0.40%
	皿	13	4.39%	15	1.21%
青花	その他	0	0.00%	2	0.16%
	皿	15	5.07%	21	1.70%
	碗	9	3.04%	13	1.05%
	蓋	1	0.34%	7	0.57%
磁器	合計	296	100.00%	1235	100.00%
	碗	1	0.34%	1	0.08%

*未実測を含む須恵器は、古墳時代と中世を分別するのが難航したため掲載個体数と同じにしている。

土師器鍋は、主に曲輪1と曲輪2から出土している。曲輪4からも若干出土しているが、生活の拠点は曲輪1と曲輪2であったと思われる。

丹波焼、備前焼、常滑焼、瀬戸・美濃焼

丹波焼は主に曲輪1と曲輪2で出土しているが、最も多いのは曲輪2である。曲輪1では北部や北西土塁からが多く、曲輪2は全体的に出土しているだけでなく、他の曲輪の破片と接合関係を持つものがある。丹波焼擂鉢 242 は、曲輪4(曲輪2側斜面裾、炭だまり直上)、曲輪2北東土塁南端(旧表土層)、曲輪2北東下層土塁南半(炭層)から出土したものが接合した。

曲輪4においては、曲輪2と接する南西斜面側に厚く堆積した土が北東土塁からの流入と推察していた。曲輪4の破片が曲輪2側斜面裾かつ炭だまり直上からの出土であったことから、曲輪2から曲輪4への明確な流入例である。曲輪4に土師器皿が多いのも、曲輪2で土師器皿が多く出土した北東土塁の土が流出していた証左ではないだろうか。それだけでなく、曲輪4の炭だまりは、北東土塁の焼土・炭層である可能性が非常に高い。この他にも、曲輪2北東土塁と堀切から出土した破片が接合した丹波焼甕 250 を確認している。

備前焼は丹波焼と比較すると出土量は1/4ほどだが各場所で出土している。備前焼徳利 292 は、曲輪2南部と堀切閉塞土塁出土の破片と接合している。堀切内の遺物が近接する曲輪からの流入物であることが分かる。広域流通品である備前焼が丹波焼より少ないなりに全体的に出土している一方で、常滑焼は曲輪2の土塁からしか出土していない。

瀬戸・美濃焼は曲輪1、曲輪2から出土している。曲輪2の出土場所は、南西部に偏りが見られる。また、天目茶碗だけは曲輪1のみの出土である。

中世須恵器

曲輪1から 42 の1点のみ出土しているが、他はすべて曲輪2からの出土である。特に北西斜面・土塁、南西土塁からの出土であり、西半に集中することがうかがえる。いずれも築城前の資料と思われる。

輸入磁器

白磁は主に曲輪1と曲輪2からの出土であるが、曲輪1の方が多い。また、曲輪2においては第2遭構面検出以降に限られる。青花は、曲輪1・曲輪2のみの出土である。特に曲輪1からの出土が多く、曲輪2はその半数しか出土していない。青磁は各所で出土しているが、曲輪1・2からの流入である可能性が高い。

武器・銭貨・金属製品

武器類は鎌、短刀、鉄砲玉が出土した。鎌は尖根と雁股の2種類である。一括での出土は無かつたが、いずれも主に曲輪1、曲輪2からであり、曲輪2においては、南～西部側に偏って出土している。曲輪4出土の鉄砲玉も曲輪2北西斜面出土の短刀も出土位置から曲輪2からの流出である可能性が高い。曲輪4は位置的に敵を迎撃つ武者溜まり用の曲輪であると考えられるが、曲輪1や曲輪2に武器類が保管または持ち込まれていたと考えられる。

銭貨は北宋銭、明銭、その他不明銭貨が出土した。まとまりなく各所で確認されたが、特に曲輪2においては、第2遭構面検出中(礎石建物南西側)で北宋銭 M107、M109、M111 と明銭 M115 が一括で出土した。北宋銭 M108 は上層石敷遭構周辺で出土している。このように古い時期の銭貨は、礎石建物・石敷遭構周辺で出土している。

小結

全ての器種、分布などについて触ることは出来なかつたが、特定の傾向が見られるものを挙

げ、次の通りにまとめたい。

まず、接合関係では、曲輪4—曲輪2、堀切—曲輪2間のものが多数確認されており、曲輪4・堀切は曲輪2からの流入が多いと言える。また、曲輪4の炭だまりは、曲輪2北東土塁焼土・炭層からの流入と考えるのが妥当だろう。

次に、既述の通り曲輪1に建物跡を根拠づける遺構は確認できなかったが、大規模な改修を行った曲輪2ではなく曲輪1にのみ天目茶碗が出土したことや、青花類も多いことなどの出土状況から建物が存在していた可能性は非常に高い。特に北部から東部にかけて金属製品類が多く出土している。しかし、後世の神社建設における造成を考慮しなければならない。また、曲輪2東部の土塁裾でも遺物の密集地帯が存在する。規則的なピット列も隣接することから、建物があった可能性が少なからず考えられる。

最後に、分布や器種ごとの出土傾向から見ると、居住していたのは曲輪1、2、4であると言える。曲輪3においては後世の削平により検証が不可能である。皿や碗といった磁器類の出土数は圧倒的に曲輪1が多く、擂鉢や甕といった陶器は曲輪2で多い。このことから、曲輪1は城主の拠点で、曲輪2は倉庫や城主に仕える人々の拠点だったと考えられる。

(3) 遺物の組成

試掘調査を含めると28tコンテナ23箱分の遺物が出土しており、器種ごとに数量処理を行った。また、1個体として認識できる報告書掲載遺物だけでは、偏りが生じてしまうため、報告書に掲載しなかった未実測資料も含めた数量処理も行った。しかし、破片数を単純に計算しただけであり、正確な個体数を試算できているわけではないことを留意しなければならない。遺物の大半は土師器で、次に丹波焼などの陶器、輸入磁器が占めている。

土師器のなかでは、皿が最も多く、特に手づくね皿が占めている。回転台土師器皿(糸切り皿)は、未実測を含めても手づくね皿の半数には届かないが、割合としては一定数を占めている。回転台土師器皿は、北播や北摂での出土例が知られている。周辺の遺跡では、萩原城跡、三田城跡、三木城跡、南僧尾遺跡などで同様の遺物が知られる。萩原城跡出土資料では、16世紀中頃のものと考えられている。しかし、三田市釜屋城跡からは土師器皿が10数片出土し、そのうち9点図示されているが回転台土師器は存在していないなど(兵庫県教育委員会1983)、近隣でも様相が異なる遺跡が存在する。

土師器皿の法量分布は、豊池城跡のグラフに類似していた。口径8cm弱では器高は1.5~2.0cmに収まる部分に集中し、それより口径が大きいものは1.5cm~2.5cmに散在している。

陶器は擂鉢、甕、壺、壺といつた構成になっており、産地別に比較すると、広域流通品の備前焼よりも丹波焼が多い。

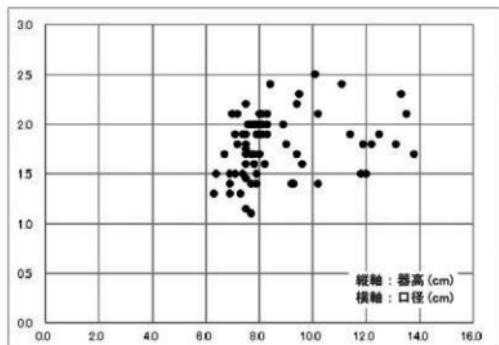


図74 松原城跡出土土師器皿計測図

未報告分を含めた項目の「陶器」に判別出来なかつた丹波焼や備前焼が混じつてゐる可能性もあるが、調査中の段階から備前焼が圧倒的に少ない印象だった。これは、丹波焼の産地に近く、松原城跡が武庫川流域にあることが、備前焼よりも在地産の丹波焼が多いことの要因と思われる。しかし、三田城跡のように、備前焼と丹波焼の数が拮抗している例もある。

以上のように、土師器では皿・鍋、陶器では擂鉢や壺、甕といった調理・貯蔵具などの雑器類で構成されている。また、輸入磁器は皿と碗を中心に構成されており、複数の瀬戸・美濃焼天目茶碗や、状態が悪く詳細は不明ながらも漆器椀も出土している。

しかし、香炉や茶器といったものは出土しておらず、やや多様性に乏しい傾向にあり、立地や城郭の性格に左右された組成を示している。

(4) 丹波焼擂鉢

丹波焼擂鉢については、先述のとおり口縁形態から分類を行つたが、スリ目や調整、手印について若干説明を加えておきたい。

城跡の時期に属する丹波焼擂鉢のスリ目は、内面のナデ調整後にヘラ描きにより施される。176 や 238 など口縁端部直下からスリ目が施される資料もあるが、多くは口縁端部より2~3cm下がった位置から施される。口縁形態によるスリ目の粗密の差はほとんどなく、上端での幅は1cm前後を測る。また、176 は2本1セット、44 は4本1セットでスリ目が入れられるなど、作業単位がうかがえる資料が存在する。例えば 66 はほぼ完形に近く復元できた資料で、スリ目同士の切り合い等から、全体を 16 分割して4本単位のセットを時計回りに施している。

使用痕は、口縁部のみであるため見受けられない資料も存在するが、下半が残存する資料は磨滅度の違いはあれ観察できる。特に 238 はスリ目の下半が摩耗により消えるほどまで使い込まれ、口縁端部にも擂粉木が当たつとも思われる使用痕が観察された。

手印（窯印）は5点確認している。67 は口縁部内面の片口右側に「×丶」、68 でも若干離れた位置に「丶×」が見られる。144 は口縁部内面にスリ目に被つて「入」字状、154 は口縁部内面の片口左側に「4」字状のものが確認できる。155 は口縁部内面の片口部に「×丶」を刻むが、角度は 67・68 とは異なる。これらは中尾城跡でも確認されている手印と同様のものである。

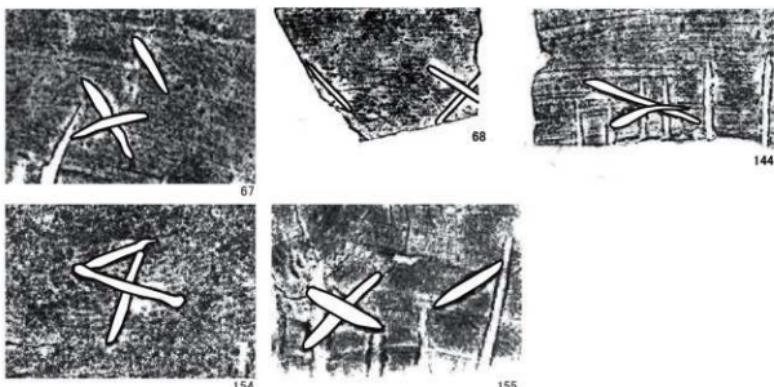


図 75 手印（窯印）一覧

第3節 松原城跡の総合的検討

(1) 古墳時代

松原城跡は、中世の城郭として周知されていたものの、今回の調査によって古墳時代の遺物・遺構が確認された。

古墳時代に関わる遺物として須恵器の出土がある。器種としては甕片が多く、この他に壺身・蓋、高坏、瓶、壺、壺、瓶類などを確認した。遺構としては、曲輪2の北東土塁下で検出した ST02001において、完形の須恵器壺が合わさった状態で出土したことが特筆される。本遺構に関連するものとして、平成元年度（1989）の下二郎遺跡第1次調査の調査成果が上げられる。本調査では、2個体の須恵器壺蓋が伏せて並べられた状態で出土した土坑が検出されており、これらを土器枕とする可能性が指摘されている。今回の調査で出土した須恵器はいずれも壺身を伴うものであるが、土器枕であるかは別として下二郎遺跡出土例に類するものとも考えられる。

出土した須恵器の器種構成や、松原城跡の周囲では複数の古墳群が周知されることなどから、本遺跡内においても古墳ないし墓坑群が存在した蓋然性が高い。須恵器が出土した地点ごとにみると、曲輪2の虎口から平坦面で最も多く、次いで曲輪4で多く出土し、曲輪1ではさほどの量は確認できなかった。当然、山城造成時も含めて後世の改変による影響が大きいため一概には言えないものの、南側の丘陵に比して、西側の丘陵で墓所を営んだ可能性も想定できる。年代は6世紀中頃～後半と考えられる。時期的には、松原城跡の西側の丘陵上に築造された北神ニュータウン内遺跡第2・3地点古墳と同時期に営まれたものといえる。松原城跡に営まれた墓域については、北神ニュータウン内の古墳時代遺跡と絡めて検討が行われることに期待したい。

(2) 平安～鎌倉時代

築城前段階に相当するこの時期は、主に曲輪2の北西部において旧表土を確認した。当初の丘陵形状を復元することはかなわないが、旧表土の斜面角度から類推すると、曲輪2部分の頂部は標高182m程度であったと思われる。

(3) 戦国時代

城跡の構造・曲輪の機能

主要な方形の曲輪が二つ並び、周りに小規模の曲輪を配置する構造である。類似する構造をもつ三田市大原城跡は「天正初年の在地領主層による築城技術の標準的指標」（『図解近畿の城郭III』）とされる。三田市域周辺の城館形態に照らし合わせれば、有馬氏被官の国人層の支配拠点として機能していたと思われる。

元来の山城の中心は最高所を占める曲輪1であろう。遺物の分布状況からも、天目茶碗が曲輪1からのみ出土すること、青花は曲輪1からの出土が圧倒的に多いことなどから、他の曲輪より優越していると考えられる。逆に土師器皿や土師器鍋の出土は曲輪2からが多い。曲輪1は城主の生活空間も伴っていたと思われる。甕は曲輪2が目立ち、ここに貯蔵施設があつたと思われる。

その後、より堅固にされた土塁が物語るように、時代の変遷とともに曲輪2が主要な曲輪として利用された可能性がある。礎石建物の存在もそれを裏付けるものであろう。

主要な曲輪周辺には腰曲輪が造成されていた。岩盤を削り出して平坦部を拡張した武者溜まりと考えられる曲輪4や、隣接する曲輪より高く盛土し侵入を遮断し、防御の要となる曲輪5などが見られた。

曲輪4は中規模の曲輪である。現在はコンクリート擁壁の影響や崩落により不明であるが、外側縁辺部に土塁が存在した可能性は十分に考えられる。曲輪2~4間は、廃城後に土塁などからの流入土が堆積していたが、曲輪の斜面部は急傾斜な切岸となっていた。

曲輪1と曲輪2間には堀切を設け、分断されている。土橋や木橋は確認できなかつたため、曲輪1と曲輪2は直接の通行ができない状態であったのではないだろうか。

また、堀切は通路的な機能も果たしていたと思われる。なお、当初はV字形をしていた可能性もあるが、調査では確認できなかつた。

横堀は一部分にしか認められず、堅堀は確認していない。

通常の生活でも籠城戦でも必要な水源であるが、明確な井戸は確認できなかつた。縄張図では曲輪1・2に井戸記号が見られたが、曲輪1のものは井戸側石材だけが組まれていて掘り込みではなく、曲輪2のものは約90cmで地山に到達し搅乱であることが判明した。唯一可能性があるとすれば、曲輪2で検出されたSX02101である。地山岩盤をぐり抜いてまで掘削しているが、調査では湧水点を確認できなかつた。井戸曲輪と称されていた下段の曲輪に存在したか、有野川から取水していた可能性もある。

城郭の北西～北側は土塁を高く築くとともに、曲輪2と4の間は切岸とする。また比較的規模の大きい曲輪を配置し、曲輪1の下には横堀も設ける。東側は急斜面で、南東側も有野川に面した急な崖面で防御の一翼を担っていた。このように北側の防御の厚さに比べ、現状では南側は幾分手薄の感がある。しかし、当時の有野川の流路は若干西側へ振っていた可能性もあり、少なくとも湿地が広がる自然地形を最大限に利用したとも推定できる。

築城時期

古墳時代を除くと城跡関連の出土遺物で最古の時期を示す資料は、東播系須恵器 233 である。この土器は曲輪2南西土塁下層の盛土造成以前の旧表土面から出土しており、築城時期は13世紀半ばを遡ることはない。その後は14世紀後葉～15世紀前葉と考えられる青磁碗 21 が存在するぐらいで、14世紀代の遺物は寡少である。

曲輪2北東土塁出土の常滑焼甕 244 や丹波焼甕 250 などが15世紀代に属する。その他、曲輪14出土の瓦質土器火鉢 284 も15世紀前半と考えられるなど、15世紀に入ると遺物が目立つようになる。

曲輪1から出土した遺物は、青磁碗には15世紀代の資料も見られるが、青磁・白磁・青花は16世紀代が主体のようである。

土師器鍋は15世紀代とやや古い様相を見せる資料もあるが、土師器擂鉢は萩原城分類のa類とb類が見られ、16世紀前半から中頃の時期が与えられる。丹波焼擂鉢も16世紀中頃を前後する資料であろう。

また、曲輪1からのみ瀬戸・美濃焼天目茶碗が出土している。既存の編年に照らし合わせると、天目茶碗E類第2段階に該当すると考えることができそうである。年代的には16世紀中頃となる。

曲輪2平坦面からの出土遺物では、輸入磁器は曲輪1と同様の状況を示す。土師器鍋は16世紀前半から後半の資料も含む。丹波焼や備前焼などは16世紀中頃を中心とする時期である。

曲輪2土塁出土遺物は、常滑焼が15世紀代に入るが、丹波焼や備前焼は16世紀前半～中頃と考えられる。土師器皿は当地域での編年が確立されていないため詳細な時期は不詳とせざるを得ないが、回転台土師器に関して言えば、三田城跡・萩原城跡・三木城跡などの類例から判

断ると 16 世紀後半が妥当といえようか。

曲輪4出土の土師器皿 252 は 16 世紀代と考えられ、出土位置から曲輪2の切岸が機能していた時期が推定できる。

曲輪 14 出土の遺物はほとんどが曲輪1からの流入であり、曲輪平坦面造成時期を決定づける資料はない。

堀切・閉塞土塁では、古い要素を示す青磁碗を除けば、16 世紀中頃の備前焼播鉢などが出土している。また、堀切と閉塞土塁から出土する遺物が接合しているが、閉塞土塁構築に伴う時間差あるいは同時性を証明するものではない。

以上から、松原城跡は 15 世紀から遺物が目立ち始めるが、遺物が示す時期の中心は 16 世紀代であり、この時期からより活発に居住空間としても使用されたことがうかがえる。

文献史料からみた松原城

松原城に関する古文書などの文献史料はほとんど残されておらず⁶、築城主体も不確実である。「摂津国有馬郡草下部村明細帳写」(享保 12 年 (1727))⁷⁾ に「古城山（中略）城主松原右近大夫と申候」、また『摂津名所図会』(寛政 8 年 (1796))⁸⁾ には「松原古城 道場川原にあり。伝へ云ふ、松原越前守貞元、同苗右近・左近・外記・山城等在城す。」などの記述があり、松原城に松原氏が居城したと伝える。

松原氏は、有馬郡の郡主であった有馬氏の被官として活動していた。「摂津国有馬郡守護有馬氏奉行人連署奉書」(応永 25 年 (1418))⁹⁾ に松原六郎左衛門尉の名が見られるほか、「室町幕府奉行人連署奉書案」(長禄 4 年 (1460))¹⁰⁾ では嘉慶元年 (1387) に有馬郡八多庄内の松原弥三郎家貞跡に関する訴訟があるなど、松原氏が八多や上津を領有あるいは支配していたことがうかがえる。これらのことから、松原氏の拠点は松原城である蓋然性が高いと言えるだろう。

松原城の名称は、『摂陽群談』(元禄 14 年 (1701))¹¹⁾ に「松原古城」と見えるのが初見と思われるが、『祇園執行日記』¹²⁾ の応安四年 (1371) 十月七日条に「(前略) 次畠庄、道場河原、自湯山二リ、松山城ヲ右ニ見、次家原、(後略)」にある「松山城」を松原城の誤記とみる向きもあり、そうすれば 14 世紀後半には松原城は存在していたことになる。

その他の史料として、避けて通れないのが『信長公記』¹³⁾ である。天正 6 年 (1578) の十二月十一日条に以下の記述がある

(前略) かくのごとく所々に御番手の御人数仰付けられ、羽柴筑前に相加へ、佐久間・惟任・筒井順慶、播州へ差遣され、有馬郡の御敵さんだの城へ差向ひ、道場河原・三本松二ヶ所足懸り格へ、羽柴筑前守秀吉人数入置き、是より播州へ相働き、別所居城三本への取出城々へ兵糧・鉄炮・玉薬・普請等申付け帰陣候なり

播磨三木城攻めのさなか、天正 6 年 (1578) に荒木村重が織田信長に謀反を起こした。有馬郡の三田城には荒木平太夫重堅が居城していたと言われ¹⁴⁾、織田方はこれに対抗するため道場河原と三本松に足懸りを設けた。この道場河原の足懸りを松原城であると比定する考えと、松原城は三田側の支城であり松原城に対する付城のことを道場河原の足懸りとする考えがある¹⁵⁾。また近年、足懸りを付城のなかでも兵站確保のために設けられた付城とし、前線に設置された付城とは区別していたとする考えが出されている。この考えに沿って、足懸り = 兵站基地と位置付けるならば、街道に近く道場河原の町も眼下に從える松原城の方が物資調達・運搬の点で適地であると言えるだろう。同じく足懸りである三本松は、神戸市北区八多町深谷に存在したと推定されており、

こちらも三木へ通じる街道沿いの立地となる。

三田城がいつ降服したか不明であるが、天正7年（1579）11月には道場河原の住民に対して秀吉による縦住書¹⁰⁾がでているので、この時期までには三田での戦闘が落ち着いていたのである。

以上、新たな史料の発見もない現在では先学により紹介された域を超えるものではなく、浅薄な内容に終始したが、若干の史料を紹介して松原城の歴史の参考とした。

廃城後

戦国時代末期の戦乱の世を経た後、松原城に対していわゆる城割が行われ廃城した時期は定かではない。しかし、閉塞土塁の石積が崩されていたこと、堀切がある程度埋められていたことなどから、廃城に伴う行為があった可能性は十分に考えられる。

曲輪1には信仰関係の建物が建築され、昭和時代までは曲輪内の広場で盆踊りも開催されたと聞く。また、曲輪2は盛土をしてコンクリート基礎の住居が建ち、水道管が土塁を横断、堀切も池泉として再利用されていた。

しかし、土塁を大きく削平することなく、景観を一定程度保持したまま後世に利用していた。城跡は地元住民の中に潜在意識として生き続けた故に、現代までその姿をほぼ留めていたのではないだろうか。

この度の発掘調査を通じて、松原城跡は北摂地域の中世後半の城郭として、貴重な資料を提供してくれた。築城・改修主体、特に天正期（1578年前後）の近隣城郭群のなかでの位置付けなど残された課題は多いが、今後さらに検討を加える必要性を痛感している。

この度の感染症の影響で整理作業も制約を受け、資料の検討を十分に果たせたとは言い難い。また、発掘調査中あるいは整理作業中に多くの方々から助言とご教示をいただいたにもかかわらず、咀嚼できず十分に活かしきれなかったのは担当者の不勉強と怠慢の結果である。ご叱責は甘んじて受けたいと思う。

註

- 新修神戸市史編集室 1983「新修神戸市史編集資料（一）北神地域の村明細帳」『神戸市史紀要 神戸の歴史』第8号 財団法人神戸都市問題研究所
- 秋里離島著 大日本名所団会刊行会編 1919『摂津名所団会』
- 兵庫県史編集専門委員会 1993「醍醐寺文書」『兵庫県史 史料編 中世7』兵庫県
- 兵庫県史編集専門委員会 1997「美相院文書」『兵庫県史 史料編 中世9・古代補遺』兵庫県
- 岡田義志 1701『摂陽群談』
- 「紙園執行日記」7『八坂神社記録上』
- 太田牛一；奥野高廣・岩沢恵彦 1984校注『信長公記』卷11 角川文庫
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編 2000『三田城跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会 ほか
- 道場町誌編集委員会編 2004『道場町誌』道場町連合自治会
- 兵庫県史編集専門委員会 1983『道場河原町文書』『兵庫県史 史料編 中世1』兵庫県
- 秀吉による縦住書

参考文献

【書・論文】

- 愛知県 2007『愛知県史 別編 築城 2 中世・近世 漢口系』
- 愛知県陶磁資料館 1997『道路にみる城下・桃山の茶道具』
- 朝同廣二 1996『野鍋治』法政大学出版
- 朝同廣二 2000『鎌治の民俗技術』慶應会
- 五十川伸次 1992『古代・中世の鍛鉄物』『国立歴史民俗博物館研究報告』第 46 集
- 上田秀夫 1984『14~16 世紀の青磁碗の分類』『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 上田秀夫 1991『16 世紀末から 17 世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察』『関西近世考古学研究』1
- 大國正美 2013『軍事拠点としての近世兵庫城と尼崎の再検討』『尼崎市立地城研究史料館記要 地城史研究』第 113 号
- 大綱 伸 1977『丹波・世界陶磁全集 3 日本国宝』小学館
- 岡田翠一・長谷川真 2003『兵庫津道出土の土製煮炊具』『兵庫県埋蔵文化財研究記要』第 3 号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 岡寺 良 1999『兵庫県勢能郡の城郭跡にみる城下・改修の画期一在地社会の中央権力との関わり』『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室
- 研究 10 周年記念論集第一』大阪大学考古学研究室
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2008『平成 19 年度企画展 首里城京の内路出土品展~青花の文様で見る~』
- 小野正敏 1982『15~16 世紀の染付碗・皿の分類と年代』『貿易陶磁研究』No.6 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1985『出土陶磁豆皿 15~16 世紀における高麗の素描』『MUSEUM』No.416
- 尾野裕祐 2004『一五・一六世紀における通過・荷運の変革 東海地方港津連絡の検討』『国際歴史民俗博物館研究報告』第 113 集 国立歴史民俗博物館
- 笠谷和比古・黒田慶一 2015『豊臣大阪城 秀吉の築城・秀頼の平和・家康の攻撃』新潮社
- 金田善教 2017『鉄釘の技術』『モノの技術の古代・金屬編』吉川弘文館
- 河原正彦 1975『日本陶磁大系 第 9 番 丹波』平凡社
- 木島孝之 2012『城郭研究―「築造り研究」の独自性を如何に構築するか?』『建築史学』59 号
- 橘川真一・角田 淳 2011『ひょうごの城』神戸新聞総合出版センター
- 河野克人 2009『丹波焼古窯跡と採掘遺物』『丹波焼 遺跡調査による埋蔵文化財調査報告書』今田町教育委員会
- 小林康泰 1997『中世鉄鍛研究ノーハイ合戦の鐵、そして儀仗の鐵』『多知奈波考古』第 42 号
- 小森俊也監修・著 2005『京から出土する土器の編年の研究』一法律令の土器様式の成立と展開、7 世紀~19 世紀』有限会社京都編集工房
- 佐賀県立九州陶磁文化館編 2016『特別企画展 日本陶磁の源流』佐賀県立九州陶磁文化館
- 三田市立編さん専門会員編 2000『三田市史 第 3 卷古代・中世編』三田市
- 下高木輔 2017『國の城(西日本)』『季刊考古学第 139 号 特集 戦国城郭の考古学』雄山閣
- 柴田圭子 2017『土器・陶磁から見た城の性格』『季刊考古学第 139 号 特集 戦国城郭の考古学』雄山閣
- 新修神戸市史編纂委員会 2010『新修神戸市史 歴史編 II 古代・中世』神戸市
- 杉本 彰 2010『11 世紀~13 世紀における播磨の氣吹屋生産』『中世土器の基礎研究 24 特集 新世紀の土器陶磁器研究』日本中世土器研究会
- 鈴木正貴 1991『天正地下廻廊下の出土遺物』『淡路城下町遺跡 90D 区出土遺物の検討』『愛知県埋蔵文化財センター年報』
- 鈴木正貴 2001『尾張の熱・点燃装置跡出土の土器・美濃濃濃窯陶器一時期別組成の分析を中心に』『愛知県埋蔵文化財センター研究記要』第 2 号
- 瀬戸市文化財振興財团 2015『企画展 戦国時代の瀬戸窯』
- 瀬戸市文化財振興財团 2017『企画展 遊跡らみた瀬戸窯後の歴史』
- 瀬戸市埋蔵文化財センター 1998『八古窯の時代』瀬戸市埋蔵文化財センター
- 瀬戸市埋蔵文化財センター 2000『列島に華開く大都市品 西日本の様相』瀬戸市埋蔵文化財センター
- 瀬戸市埋蔵文化財センター 2001『財團法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立 10 周年記念「瀬戸大窯とその時代」シンポジウム・講演会 戦国・雄豪期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品―東アジアの視野から― 資料集』
- 千田嘉博 1987『織豊系城郭の構造―虎口型ブリッジによる縄張り年輪の試み』『史林』70 号 2 号
- 千田嘉博 1991『中世城郭研究の構想―「中世の城」考古学』新人物往来社
- 高田 雄 1999『虎口に関する一考察―普請と作業の重心を中心として―』『城郭研究室年報』第 8 号 姫路市立城郭研究室
- 高田 雄 2018『走茂木・難波に検証する』『城館史学』第 10 号
- 高田 敦 2018『城郭談話会特別例会―徹底討論―『図解近畿の城郭 I~V』発刊記念報告会 資料集』城郭談話会
- 武部真木 2019『消費地の陶磁器』『古立理文協会報』第 62 号 全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会
- 多田鶴久 2003『中世城郭における防護工事の成形について―櫻開口部の閉塞土壁を素材に―』『統文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 多田鶴久 2014『城郭概要』『図解近畿の城郭 II』戎光洋出版
- 田沼昭三 1981『狼毫大器』角川書房
- 中世城郭研究会 2013『中世都市から城下町へ』株式会社山川出版社
- 中世城郭研究会 1995『概説・中世の土器・陶磁器』真規社
- 津野・仁 1990『古代・中世の鉄釘―東国での土器品を中心にして―』『物質文化』54
- 道場町記録編委員会編 2004『道場町誌』道場町連合自治会
- 鳥羽正進編 1967『日本城郭全集』10 人物往来社
- 中井寿史 1999『室町・戦国期における近畿地方の土器部器』『中世土器の基礎研究 XIV 京都系土器部器の伝播と需要―中世後期を中心に―』日本中世土器研究会
- 中井淳史 2000『武家儀礼と土器』『史林』83 号 3 号
- 中井 均 2003『城郭にみる石垣・瓦・礎石建物』『映国時代の考古学』高志書院
- 中井 均 編監修『城郭談話会 講座編 2014『図解近畿の城郭 I』戎光洋出版
- 中井 均 編監修『城郭談話会 講座編 2015『図解近畿の城郭 II』戎光洋出版
- 中井 均 編監修『城郭談話会 講座編 2016『図解近畿の城郭 III』戎光洋出版
- 中井 均 編監修『城郭談話会 講座編 2017『図解近畿の城郭 IV』戎光洋出版
- 中井 均 編監修『城郭談話会 講座編 2018『図解近畿の城郭 V』戎光洋出版
- 水井久美男編 1994『中世の出土銭一出土銭の調査と分類』『兵庫県埋蔵文化財調査会』
- 中西義昌 2018『織張りの独自性と今後の展望』『桃山城問題』によせて―』『城郭史科学』第 10 号
- 横嶋彰一編 1977『日本陶磁全集 11 丹波』1977 中央公論社
- 西ヶ谷恭弘 1994『土器構造法の偏重化試論―関東の发掘調査成果事例を中心に―』『城郭史研究』14 号 日本城郭史学会
- 乗岡 実 2019『織豊公と備前城』『備前歴史フォーラム 2019 資料集 備前後研究最前線 III』備前市教育委員会

- 白廣幸恵 1997『鉄、手年のいのち』草思社
- 白谷朋世 2009『室山城土塁難考―一つつの市御津町（旧掛保郡御津町）所在の室山城二ノ丸の発掘調査から―』『考古学の視点一兵庫発信の考古学』一 間壁霞子先生喜寿記念論文集 間壁霞子先生喜寿記念論文集刊行会
- 長谷川義 1988『丹波丹波跡について』『中近世土器の基礎研究』IV 日本中世土器研究会
- 長谷川義 2004『中世片坡跡における埴輪生産』『中近世土器の基礎研究』XVIII 日本中世土器研究会
- 長谷川義 2005『丹波』『全日本』『中世片坡跡の基礎相』『陶器の社会』吉岡康輔先生古希記念論文集刊行会（編集）
- 服部英雄 2007『中世城郭の復元と史料学』『歴史学研究』4 日本歴史学会誌
- 早川圭 2012「陣城」『季刊考古学 120 号 繩農系城郭の成立と展開』雄山閣
- 平野聖 1991『日本城郭大系』第12巻 新人物往来社
- 平尾翠幸 2019「土師器再考」『治史 研究紀要』第12号 公益財團法人京都市埋蔵文化財研究所
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2009『金工の技術—美金属製品にみる一乗谷』
- 福島克彦 1991「『繩農系城郭の復元』と史料学』『吉岡陶芸美術館研究紀要』第4号
- 松岡千寿 2010「『兵家城主の備前城』『備前市歴史民俗資料館記要』11 備前歴史フォーラム資料集 集食・室町 BIZEN ～中世備前城のスガタ～』備前市教育委員会歴史学部課
- 松岡秀夫 1985『中世城の鉄形組成』『松岡秀夫寿記念論文集 戰・戦史の研究』神戸新聞出版センター
- 木澤泰一 2014「鐵田城の日常使いの質賀陶磁の実像 十五世纪中葉～十六世纪中葉を中心に』『国立歴史民俗博物館研究報告』第182集
- 村田修三監修・城郭談話会編 2017『繩農系城郭とは何ぞーその成りと課題ー』サンライズ出版
- 森恒裕 1991「淳心院出土遺物の検討」『吉岡研究室年報』第1号 駿路町立吉岡研究室
- 森島康雄 2012「土器・陶器から見た筑城年代」『季刊考古学 120 号 繩農系城郭の成立と展開』雄山閣
- 安田善三郎 1917『好』
- 山上雅弘 1992「西日本における中世城館調査」『月刊考古学ジャーナル』353 特集：中世城館調査＝ニュー・サイエンス社
- 山上雅弘 2005「守護の城、置藩城の発掘調査成果について』『日本考古学』第19号
- 山上雅弘 2010「三木城周辺の考古学的成果」『三木城及び付城跡群総合調査報告書』三木市教委
- 山上雅弘 2012「礎石建物」『季刊考古学 120 号 繩農系城郭の成立と展開』雄山閣
- 山崎敏昭 2018「天正 6 年 12 月『繩農さんだの城』攻めの村城群』『城郭談話会特別例会～徹底討論～『図解近畿の城郭Ⅰ～V』発刊記念報告会』資料集
- 【発掘調査報告書】
- 伊丹市教育委員会 1992『伊丹市埋蔵文化財調査報告書 第16集 有岡城跡発掘調査報告書 VIII』
- 財团法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 1998『埋蔵文化財発掘調査報告書第66集 潟陽城跡 後道公園埋蔵文化財調査報告書 第1分冊』財团法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 岡山市教育委員会 2002『岡山城三之曲輪跡 表町一丁目地区市街地開発ビル建設に伴う発掘調査』岡山市教育委員会
- 河内城・満谷古跡調査会 泰良大学・考古学研究室 1989『奈良大学考古学研究室調査報告書第13集 満谷古跡』
- 神戸市教育委員会 2001『萩原城跡埋蔵文化財発掘調査報告書』第1・3・5・次』神戸市教育委員会文化財課
- 神戸市教育委員会 2006『平成15年度 神戸市埋蔵文化財調査報告書』神戸市教育委員会文化財課
- 太宰府市教育委員会 2000『太宰府の文化財』49 太宰府跡第XV】
- 兵庫県教育委員会 1982『兵庫県の中世城郭、莊園遺跡』
- 兵庫県教育委員会 1983『兵庫県文化財調査報告第16編 北摂ニュータウン内遺跡調査報告書 II』兵庫県教育委員会
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1989『兵庫県文化財調査報告第67編 中尾城跡 近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書 II』
- 兵庫県教育委員会 1991『兵庫県文化財調査報告書第111編 野村構岸 一級河川加古川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』兵庫県教育委員会
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1992『兵庫県文化財調査報告第109編 明石城武家屋敷跡一山陽電鉄連立体交差事業に伴う発掘調査報告書一』兵庫県教育委員会
- 兵庫県教育委員会 1995『兵庫県文化財調査報告第194編 三田城跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2004『兵庫県文化財調査報告第270編 兵庫津遺跡II(須崎・七宮地区的調査) 一般国道2号共同調整事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』兵庫県教育委員会
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2007『兵庫県文化財調査報告書第318編 福中城跡・芝崎遺跡——般国道175号平野松風事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』兵庫県教育委員会
- 兵庫県立考古博物館 2009『兵庫県文化財調査報告第356編 三田城跡2号兵庫県立馬高等学校校舎建設工事等に伴う発掘調査報告書』兵庫県教育委員会
- 兵庫県立考古博物館 2011『兵庫県文化財調査報告第409番 吉田住吉山遺跡群発掘調査報告書 主要地方道三木三田線住宅地開通公共事業施設等総合整備促進事業に伴う発掘調査報告書』兵庫県教育委員会
- 兵庫県立考古博物館 2012『兵庫県文化財調査報告第421番 三田城跡3号 竜池有馬高等学校講義棟新築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』兵庫県教育委員会
- 兵庫県立考古博物館 2014『兵庫県文化財調査報告書第461番 小野市豊地城跡一道道路改良事業((主)神戸加東線)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』兵庫県教育委員会
- 西脇市立資料館編 1992『播磨・水原城跡の調査と研究』西脇市教育委員会
- 三木市教育委員会編 2007『三木市文化研究資料第19集 クソノ墓構付城跡・高木大塚城跡』三木市教育委員会
- 三木市教育委員会編 2010『三木市文化研究資料第25集 三木城跡及び付城跡群総合調査報告書』三木市教育委員会
- 三木市教育委員会編 2013『三木市文化研究資料第26集 平成20・21・22・23年度国庫補助事業による発掘調査報告書』三木市教育委員会
- 夢前町教育委員会 2002『佐賀城跡総合調査報告書』夢前町教育委員会

写真図版



1. 調査地全景（北東上空から）



2. 曲輪2および曲輪4（北東上空から）



1. 調査地遠景（南上空から）



2. 調査地全景（北西上空から）



調査地全景（南東上空から）



1. 調査前全景（南から）



2. 調査前全景（西から）



1. 曲輪1 全景（南から）



2. 曲輪1 全景（南から）



1. 曲輪1
第1造構面 石敷造構および南西土塁
(北から)



2. 曲輪1
第1造構面 SX01001
(南西から)



3. 曲輪1
北西土塁断ち割り
(南東から)



1. 曲輪2 第1遺構面全景（東から）



2. 曲輪2 第1遺構面全景（西から）



1. 曲輪2
第1造構面 上層石敷造構
(北から)



2. 曲輪2
第1造構面 SX02101
(南西から)



3. 曲輪2
第1造構面 虎口
(東から)



1. 曲輪2 北西土壘上面碑群（北東から）



2. 曲輪2 第2遺構面全景（南上空から）



1. 曲輪2 第2遺構面全景（東から）



2. 曲輪2 第2遺構面全景（南から）



1. 曲輪2
第2遺構横面全景
(西から)



2. 曲輪2
下層石敷遺構検出状況
(南から)



3. 曲輪2
第2遺構横面 下層石敷遺構
(南東から)



1. 曲輪2
第2造構面 碇石建物および下層石敷造構
(南東から)



2. 曲輪2
第2造構面 SX02204
(南東から)



3. 曲輪2
北東土塁（東側）断ち割り
(西から)



1. 曲輪2
北東土壘（西側）断ち割り
(西から)



2. 曲輪2
北西土壘断ち割り
(南から)



3. 曲輪2
南西土壘断ち割り
(西から)



1. 曲輪2
北東土堀（東側）縦断面および焼土面検出状況
(南西から)



2. 曲輪2
北東土堀（西側）縦断面および炭面検出状況
(南から)



3. 曲輪2
北西土堀縦断面
(南から)



1. 曲輪2 北西下層土壘石積（南から）



2. 曲輪2 南西下層土壘（東から）



1. 曲輪2 北西下層土壘断ち割りおよび石列（東から）



2. 曲輪2 北東下層土壘断ち割りおよび SD02301 の北東部（西から）

1. 曲輪2
SD02301 の北西部
(南から)



2. 曲輪2
北西土壘断ち割り
(南西から)



3. 曲輪2
北西斜面断ち割り
(西から)





1. 曲輪2 南西斜面断ち割り（南東から）



2. 曲輪2 南西斜面断ち割り（北西から）



1. 曲輪2
南西斜面断ち割り
(南西から)



2. 曲輪3 全景 (北西から)



1. 曲輪4 全景（東から）



2. 曲輪4 全景（北西から）

1. 曲輪5
全景
(南東から)



2. 曲輪6
全景
(西から)



3. 曲輪7
全景
(南西から)





1. 曲輪 14 全景（西から）



2. 堀切 全景（南西上空から）



1. 堀切 全景（南西から）



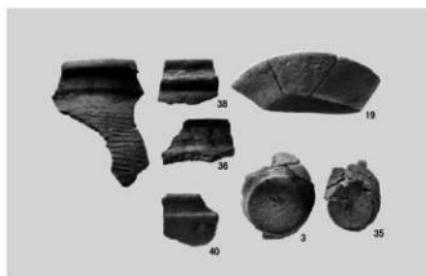
2. 堀切 南西側断面（南西から）



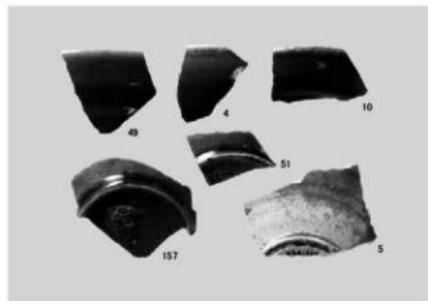
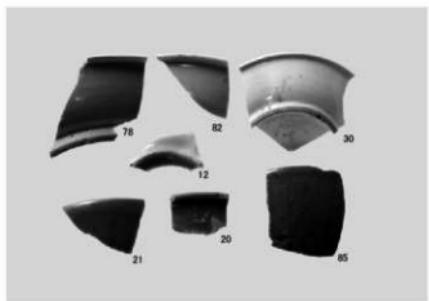
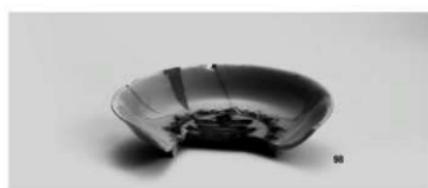
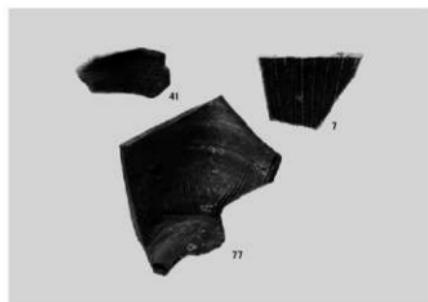
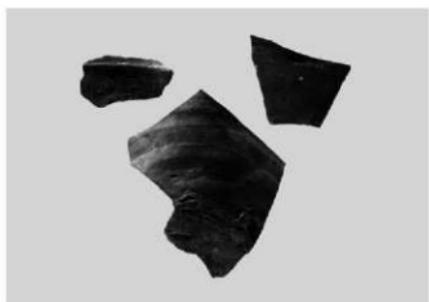
1. 堀切および閉塞土壁（北東から）



2. 閉塞土壁断ち割り（北西から）



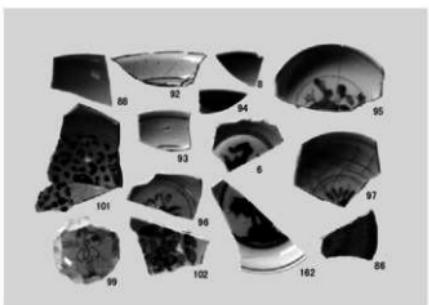
曲輪1 出土遺物（1）



曲輪1 出土遺物 (2)



曲輪1 出土遺物（3）



183



185



187



139



331



212

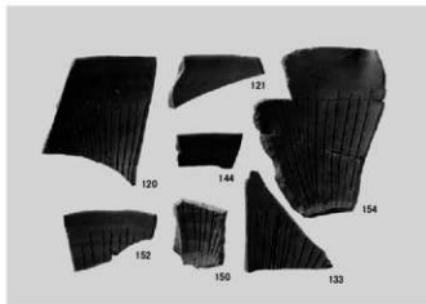
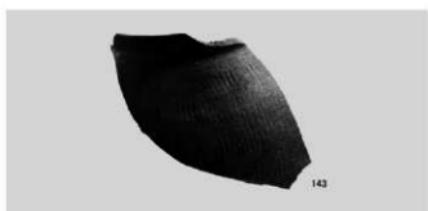
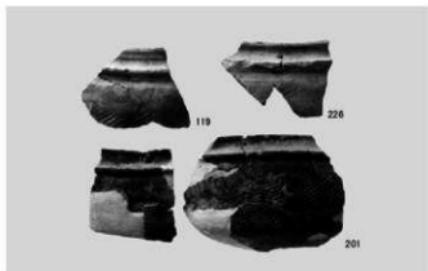


221

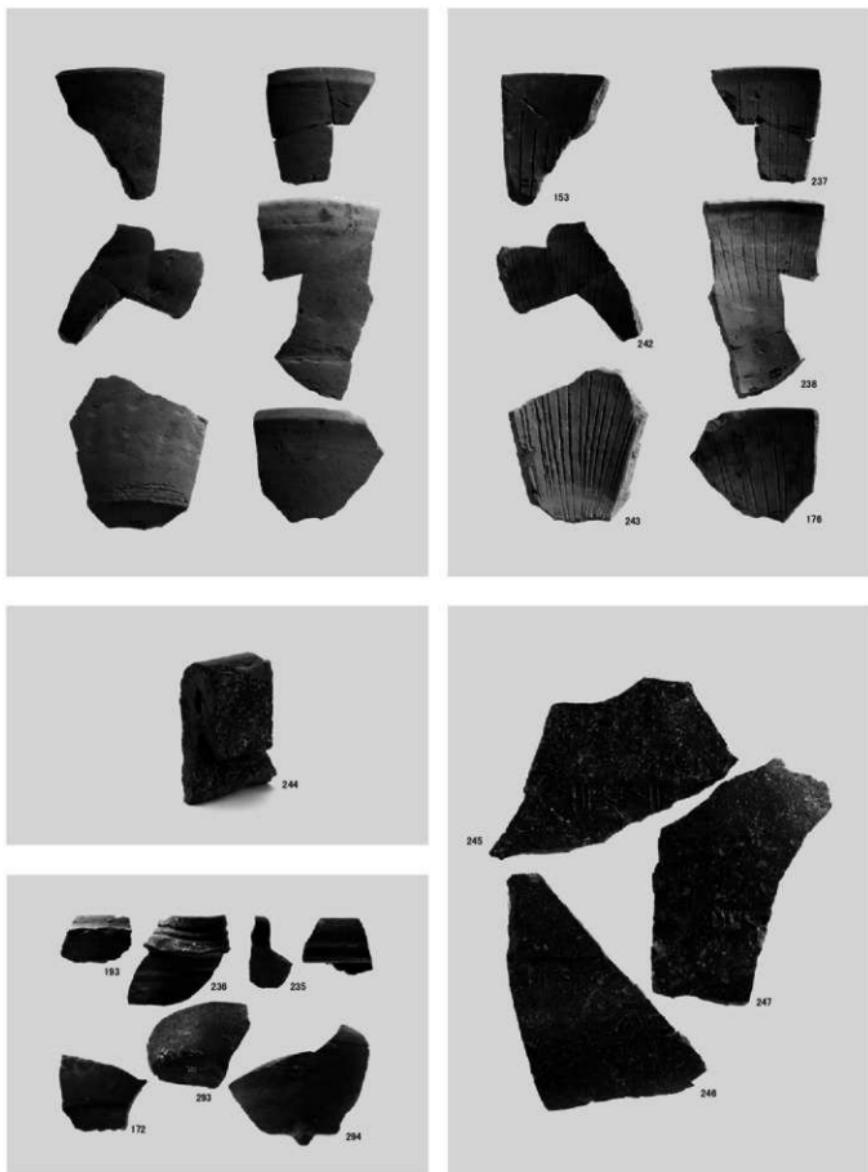


220

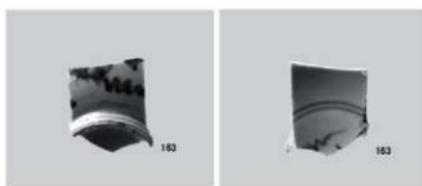
曲輪2 出土遺物（1）



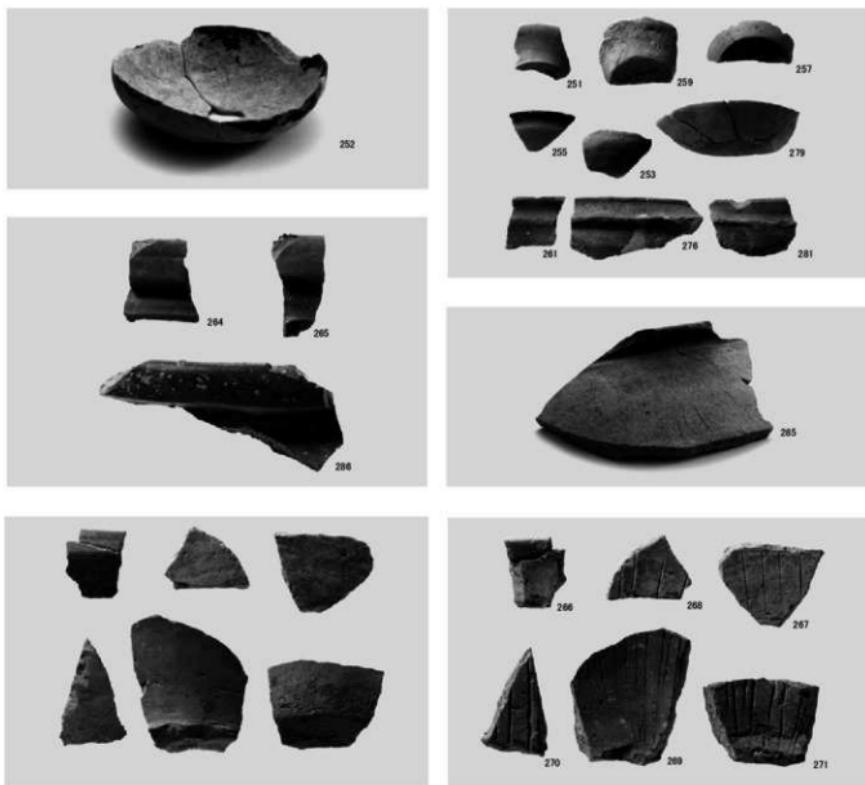
曲輪2 出土遺物 (2)



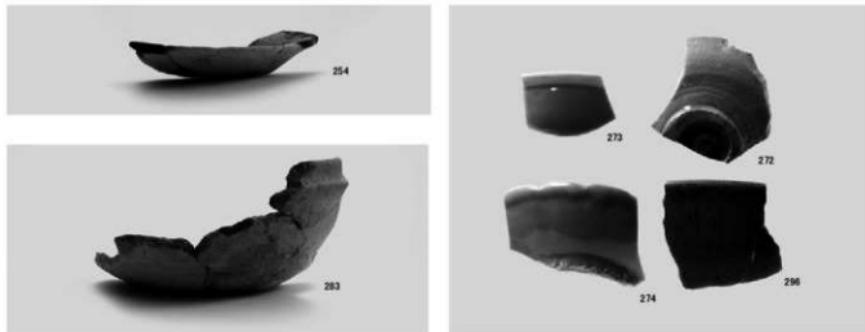
曲輪2 出土遺物 (3)



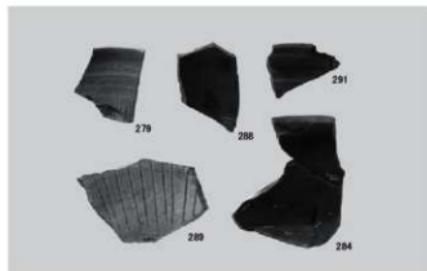
曲輪2 出土遺物 (4)



曲輪4 出土遺物



曲輪14 出土遺物 (1)



曲輪 14 出土遺物 (2)



石製品・石造物



297



298



300



301



299



310

308

309

308

304

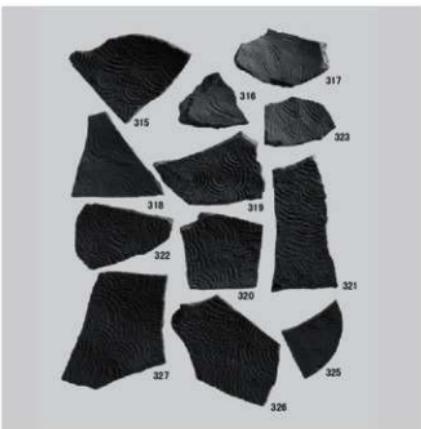
302

303



311

312



315

316

317

318

322

319

320

321

322

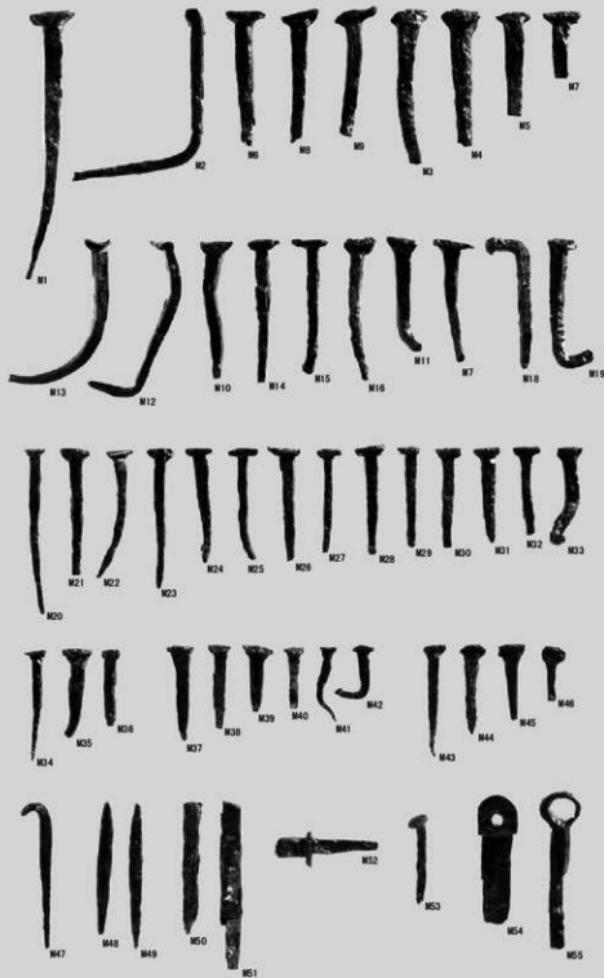
323

325

327

328

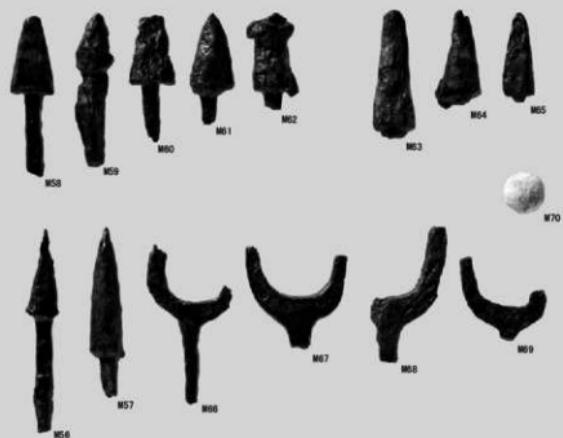
326



鉄釘・金具類



鉄釘・金具類（レントゲン写真）



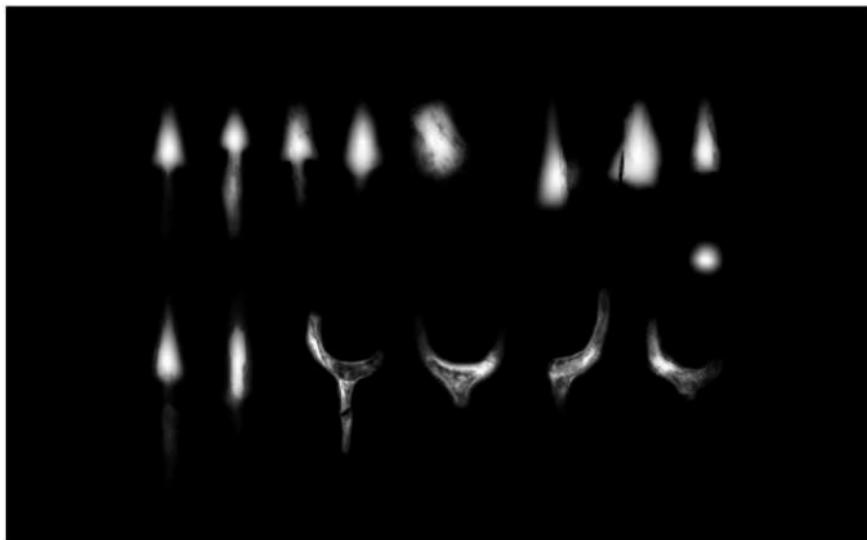
鐵鏃・鉄砲玉



短刀



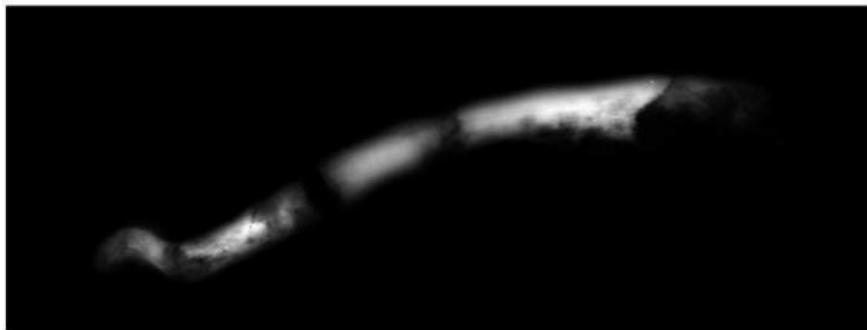
鉄鎌



鉄錐・鉄砲玉（レントゲン写真）



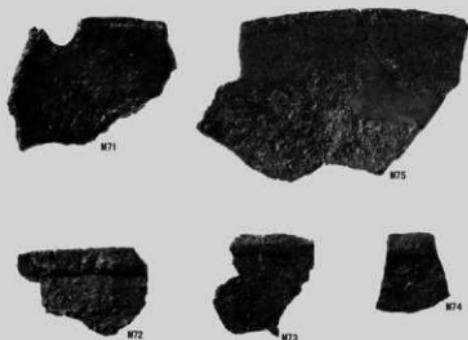
短刀（レントゲン写真）



鉄鉈（レントゲン写真）



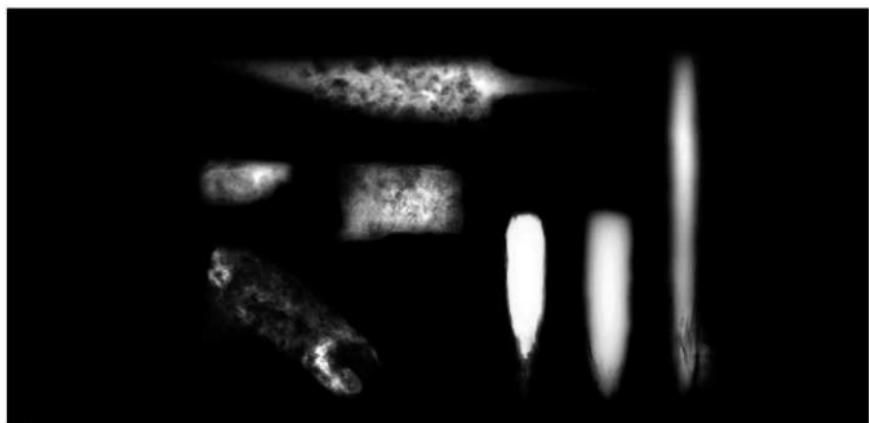
刃物・工具類



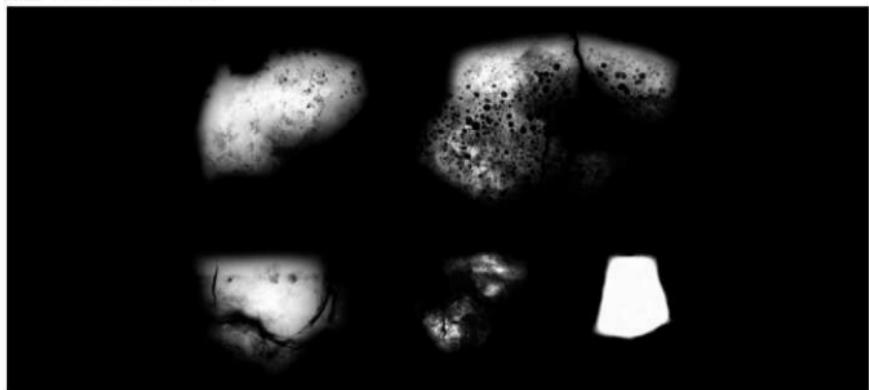
鉄製容器片



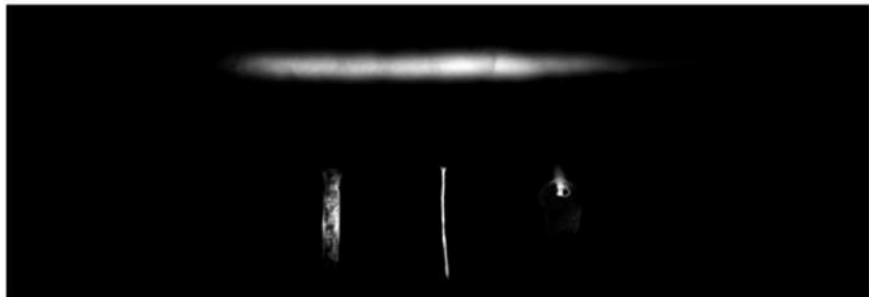
銅製品



刃物・工具類（レントゲン写真）



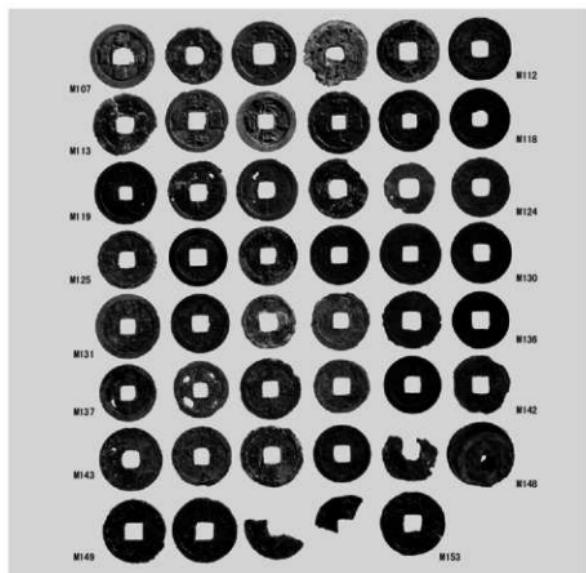
鉄製容器片（レントゲン写真）



銅製品（レントゲン写真）



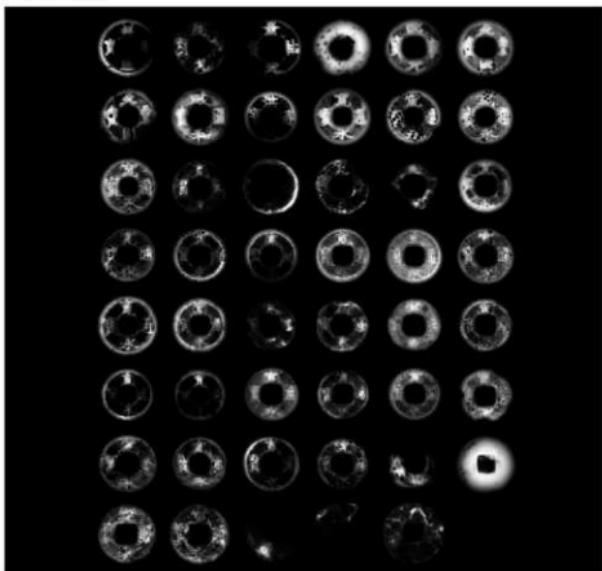
その他金属製品



銭貨



その他金属製品（レントゲン写真）



銭貨（レントゲン写真）

報告書抄録

ふりがな	まつらじょうあと はくつちょうさほうこうしょ						
書名	松原城跡発掘調査報告書						
副書名							
編著者名	佐伯二郎・小野寺洋介・萱原朋奈(編) 山田侑生・田島靖大						
編集機関	神戸市文化スポーツ局文化財課						
所在地	〒 650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5-1						
発行年月日	2021年3月31日						
所取遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
松原城跡	神戸市北区道場町下部字西山	28109 61	34 度 52 分 00 秒	135 度 13 分 38 秒	20190318 ~ 20200128	約10,930	記録保存調査
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
	城館	中世	曲輪・堀切・土塁・切岸・礎石建物	土師器・須恵器・瓦質土器・陶器・磁器・鉄刀・鉄鎌・釘・銭貨・鉄砲玉			
要約	松原城跡は中世に築かれた山城である。主たる曲輪である曲輪1~3を始め、武者だまりと考えられる曲輪4、腰曲輪の曲輪5~16、堀切、閉塞土塁などを確認した。15世紀~16世紀後半における土師器、瓦質土器、陶器、磁器の他、鉄刀、鉄鎌、鉄砲玉、鉄製工具、釘、銭貨などの金属製品が出土した。『信長公記』にある「道場河原」の「足懸り」に該当する城の可能性がある。 また、古墳時代と平安~鎌倉時代の遺物が出土しており、城郭形成以前の活動痕跡を確認した。						

松原城跡発掘調査報告書

2021.3.31

発行 神戸市文化スポーツ局文化財課

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

Tel 078-322-5799 Fax 078-322-6148

印刷 株式会社クレアチオ

神戸市中央区新港町8-2 新港貿易会館4階 32

Tel 078-332-0515 Fax 078-332-0567

神戸市広報印刷物登録 合和2年度 第490-5号 (広報印刷物規格 A-6類)